
仮面ライダーディケイド 世界の破壊者VS世界を救った男達

死神大使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド 世界の破壊者VS世界を救った男達

【Nコード】

N1189N

【作者名】

死神大使

【あらすじ】

クウガ、キバ、響鬼、ディエンドと共にスーパーアポロガイストを倒した仮面ライダーディケイド。門矢士。

しかし、彼の前に八人の仮面ライダーが立ちふさがる。

大ショッカーとの戦いの行方は？世界の破壊者・ディケイドとは？

『仮面ライダーディケイド。戦いの果てに、その瞳は何を見る？』

申し訳ありません。このような小説&受験生で。

何番煎じか分かりませんが、ディケイド最終回後のストーリーです。

二次設定など、TV版との違いがあります。

また超電王以外のディケイド映画、トリロジー、

(恐らく)W&OOOを無視しています。ご了承下さい。

第一話 「オリジナル」(前書き)

もうすぐWも終わるというのに、今更ごめんなさい……。でもどうしてもやりたかったんです。後悔はしていない！

第一話 「オリジナル」

「デイケイド、お前を倒す。・・・変身。」

【TURN UP】

アギト、龍騎、ファイズ、響鬼、カブト、電王、キバ、ブレイド。
旅の中で出会い、仲間となったライダー達が今、デイケイド自分を殺すために、目の前にいた。

「おいおい、まさかお前らまで・・・」

「ハアツ！」

仮面ライダー「デイケイド」門矢士が言い終わるより先にアギトが拳を放った。

「・・・ツ！？やめろショウイチ！」

デイケイドはそれを間一髪のところかわし、怒鳴るようにアギトに言う。

しかし、アギトにはかり気をとられていたせいで、デイケイドは背後のファイズに気付けなかった。

「ラアツ！」

「ぐあー！」

ファイズの蹴りをまともに浴びて、デイケイドは吹っ飛んだ。

「津上い！んな攻撃で倒せると思ってんのか！」

「あ、ごめん。乾君・・・」

デイケイドの予想に反して尾上タクミとは似ても似つかぬ荒々しい

口調でファイズが怒鳴り、対照的にアギトは芦河シヨウイチとは違い温厚そうな声で答えた。

(タクミやシヨウイチじゃない!?)

ブレイドもキバもファイズもアギトも、土の知る変身者とは違つ。よく見ると、どのライダーも微妙に仕草や癖が違って見える。

全く状況の読めないディケイドを、更にブレイド、カブト、キバが取り囲んだ。

「お前ら、いったい何なんだ!？」

「・・・答える必要はない。」

「僕達はここで、貴方の旅を終わらせる。それだけのことです。」
「ウエエイ!」

土の質問にはろくに答えず、ブレイドのブレイラウザーが襲ってきた。

予想していなかった訳ではないが、両者の力の差は明白だ。

ライドブツカーで防御しても、すぐに押し負ける。

「くそっ!」

ディケイドはいったんブレイドから離れ、キバとカブトに構えなおした・・・が、

そこにいたのは音撃棒・烈火を構えた響鬼だった。

「でりゃあ!」

響鬼の強烈な一撃でディケイドはまた吹っ飛ばされ、アギトや龍騎達に囲まれた。

(チツ、戦い続きだつてのに・・・)

ディケイドはすぐに態勢を立て直したが、多勢に無勢なだけでなく一人一人がとんでもなく強い。

どこか遠慮したような戦い方のライダーがいるのも不気味に感じられる。

「ウエエエ・・・!!」

(奴らに通用するカードがあるとすれば・・・)

「やっぱコレしかねえよな！その五月蠅いブレイド、ちょっとくすぐりたいぞ。」

【FINAL FORM RIDE B B B BLADE!!】

突っ込んできたブレイドが突如変形し、大型の剣『ブレイドブレード』となる。

筈だった。

「無駄だ。オリジナルである俺たちにその力は通用しない。」

ブレイドは変形せずにそのまま剣を振るい、ディケイドは反応しきれず斬撃を受ける。

「オリジナル・・・だと？」

更なる困惑の中、今度は海東大樹「デイエンドが走り込んできて、

「……ッ!?!」

デイエンドライバーの銃口をデイケイドに向けた。

そして、引き金に指をかける。

「土ぁ……伏せてろ!!」

【KAMEN RIDE RIOTROOPER!】

素早くデイエンドライバーにカードを充填し、十五人ものライオトルーパーを召喚した。

「!?!」

ライオトルーパーの乱入でデイケイドへの攻撃を中断する八人のライダー。

その際にデイケイドはデイエンドを問い詰めようとする。

「海東、奴等は何なんだ?それに」

「悪いんだけど、今はそんな暇はない。後で落ち合おう土。説明はその時するから。」

そういつてデイエンドはまたカードを充填した。

【KAMEN RIDE DELTA!】 【ATTACK

RIDE JETSLIGGER!】

「コレだけは今言っておくけど、彼等とまともに戦っても勝ち目はないよ。」

ディケイドが何か言う前に、
デルタがディケイドをジェットスライガーに乗せて行ってしまった。

第一話 「オリジナル」(後書き)

死神大使「というのが、この小説の記念すべき第一話です。いかがでしたか？」

ちなみに、ブレイドは通常フォームです。」

門矢士「なあ、いきなり俺フルボッコすぎないか？」

死神大使「いや、流石に彼ら八人を相手に善戦されちゃ困るんですよ。今後のストーリー的に。」

剣崎一真「何故俺がキングフォームじゃないんだ。」

死神大使「個人的に通常 ジャック・キングフォームのモーションが好きなんです。」

いきなりKFだと、通常やジャックフォームになる機会がなくなっちゃうでしょ？」

夏海&ユウスケ「私(俺)達の出番は!？」

死神大使「第二話に持ち越しとなります。残念ながら。」

・・・!?!?ちよっ、待ってホラ、

話せば分か(ピチューン)

第二話 「夢を追う男」(前書き)

早いペースで上げられましたが、果たしていつまで保つやら・・・

第二話 「夢を追う男」

ありつたけ召喚したライオトルーパー達も、既に八人の仮面ライダーによって全滅してしまっていた。

「勝ち目がないと分かって戦うなんて、らしくないなデイエンド。」
士は取り逃がしたというのに、仮面ライダーブレイド「剣崎一真の口調からは余裕が感じられる。

「らしくないのはお互い様さ。それに・・・」

【KAMEN RIDER...】

「勝ち目がない」からといって、「負ける」とは限らない。」

【BLADE!】

「ヘッ、面白えじゃねーか！行くぜ行くぜええええ！！」
デイエンドが召喚したブレイドに電王が突進した。

が、

「残念だけど君と戯れている時間はないんだよ、イメージン君？」

【ATTACK RIDE TIME!】

デイエンドが召喚したブレイドは、一枚のカードを取り出して剣に通した。

電王の動きが急に止まる。他の七人も同様に、微動だにしなくなっ

てしまった。

「オリジナルライダーのベルトか・・・
またとないお宝だが、今は士の所に行ってやらなきゃな。」
【ATTACK RIDE INVISIBLE!】
眩きながら、ディエンドは姿を消した。

ディケイドが戦線を離脱する少し前

「これじゃあ夢と同じに・・・ユウスケ！ユウスケ！起きてください！！！」
士を助けたい一心で、光夏海は既に息絶えた小野寺ユウスケを起こそうと必死になった。

「ワタシが蘇らせてあげる　アルティメットクウガとしてね」
いつの間にかそばにいたキバラーが、夏海の返事を待たずにユウスケに噛みついた。
その瞬間、ユウスケは急に起きあがり、変身の構えをとる。

「やった！ユウスケ・・・っ!？」

思わず夏海はユウスケから距離をとった。
彼の雰囲気は夏海の知るそれとは全く違う。冷酷と言つのが相応しいだろう。

「変身。」

ユウスケが変身したクウガは夏海が夢で見た姿と全く同じ、全身が真っ黒なアルティメットフォームだった。

「世界は、俺が貰う。」

クウガは夏海の首を片手で掴むと、軽々と持ち上げた。

「ユウスケえ・・・っ」

当然、クウガに変身しているユウスケの表情は見えない。

それでも、夏海にはユウスケが笑っていることがはっきりと分かった。

（私は　このまま何もできずに死ぬんでしょうか・・・）

そんな考えが脳裏をよぎり、夏海は目を瞑った。

だが次の瞬間に轟音が鳴り響き、夏海は誰かの腕の中にいた。

「え？」

恐る恐る目を開くと、そこにはクウガと、倒れたバイク、そして・

「貴方は・・・？」

彼は夏海を下ろし、サムズアップをした。

「夢を追う男・・・五代 雄介!!」

第二話 「夢を追う男」(後書き)

死神大使「五代雄介登場！テンション上がります。」

門矢土「俺が全く出てないのは気のせいか？俺は一応主人公だぞ。」

死神大使「平成ではよくあることですよ。そんなん。」

光夏海「なんで私がユウスケに襲われてるんですか！？」

嘘予告からしてそれは海東さんの役目でしょ！？」

海東大樹「結構酷いこと言うね夏メロン。」

死神大使「海東には解説係になつてもらわなきゃなので、アツサリ逃がしてみました。」

あんな戦法とれるのは海東だけですし、別に良いかなと。

」

小野寺ユウスケ「そっぴや、投稿がこれから物凄く遅れるかもつてどゆこと？」

死神大使「あらずじにもチラと書いているんですが、自分受験生なんですすよね。」

つまりそういうことです。」

門矢土「おいおい、そんな大事な時期に何やってんだよ」

死神大使「だつて受験終わるの待つてたらWどころか

オーズだつてもう中盤に入つちやってますよ？

そこからデイケイドなんて・・・」

海東大樹「君、ホント馬鹿だね。」

それで投稿が遅れて飽きられたらそれこそ誰も読んでくれないよ？」

死神大使「・・・はい、反省してます。」

飽きられないよう頑張つて投稿します(泣)」

第三話 「リ・イメージーション」(前書き)

今回はただの説明回となっています。

第三話 「リ・イメージーション」

夏海は一旦落ち着いて、状況を分析した。

恐らく五代雄介は倒れているバイクでクウガに突進し、自分を助けてくれたのだろう。

「あら、オリジナルのクウガじゃない。アンタはディケイド倒して帰ればいいの。」

ユウスケのことは放つときなさいよ。」

キバーラは冷たく言う。

ユウスケといいキバーラといい、一緒に旅した仲間達がまるで別人のようだ。

夏海はその現実を簡単には受け入れられなかった。

「ユウスケもキバーラも、一体どうしちゃったんですか・・・？」

夏海の痛々しい呟きに応えるように、雄介は前に出た。

「大丈夫だよ。小野寺君は絶対俺が元に戻す。俺も小野寺君も、クウガだから！」

「変っ身!!」

五代雄介はユウスケとまったく同じポーズをとり、目が赤い意外はユウスケとまったく同じ姿

仮面ライダークウガ アルティメットフォームに変身した。

「おりゃあ！」

クウガ（赤目）がクウガ（黒目）に殴りかかる。

「ぬぐう……」

クウガ（黒目）は一瞬怯むがすぐに踵を返して右手を掲げた。

「ファッ!? フウ……ッ！」

突然にクウガ（赤目）から炎が吹き出し、クウガ（赤目）は悶え苦しんだ。

しかし、そこで終わるほどクウガ（赤目）は甘くない。

「ふう……ん！」

体から炎が出たままクウガ（黒目）に向かっていき、パンチを食らわせる。

そして側にあった自身のマシン、ビートチェイサー2000のハンドルを引き抜いた。

「うおりゃあああっ！」

クウガ（赤目）は、クウガ（黒目）を容赦なく切り裂いた。

とある廃屋

「やあ士！ごめん、待ったかい？」

「いや、別に・・・って、俺はお前の彼女か!？」

ちよつとした夫婦（!？）漫才をする海東大樹と門矢士。

これでもこの二人は今、相当厳しい状況にある。

「うん。聞きたいことは山とあるだろうけど、どこから知りたいかな？」

士はようやく海東が真面目になったことに安堵した。

「そうだな。とりあえずナツミカンはどうした？」

「・・・まさか置き去りにして来たんじゃないだろうな。」

「ん？そうだよ。でも、オリジナルのクウガがいたし大丈夫だろ。

それで、オリジナルの奴等のことなんだけど・・・」

士はもつともなことを言うが、軽く流される。

「海東お前・・・!」

「まあ落ち着きたまえ士。さっきも言ったがオリジナルのクウガがついてる。」

そんなことで士の怒りは収まらないと知っている海東はやや強引に説明した。

「オリジナルってのはさ、君にとっては敵だが決して悪い奴等じゃない。」

スーパーアポロガイストみたくナツメロンを人質にしたりしないさ。」

「ああ？八対一で向かってきた癖にか？」

海東はふうと溜息をついた。

「だから君にとっては敵だと言ってるだろ？」

「まあいいや。まずはその辺りから説明してあげるよ。」

「ああ。そうしてくれ。」

士は適当に相づちを打った。

「最初に言っておかなきゃならないのは、君が今まで旅した世界の殆どは、

大シヨツカーが作り出したものだって事だ。

リ・イマジネーションと僕等は呼んでるんだけどね。」

「リ・イマジネーション？何のためにそんな・・・」

「それは多分、デイケイドの機能確認のためだ。

デイケイドは大シヨツカー製でさ、デイエンドや十面鬼はその試作品なんだ。」

「十面鬼もか？」

デイエンドについてはさして驚かなかったが、十面鬼のことは流石に驚いた。

「そう。君も不思議に思わなかったかい？十面鬼が仮面ライダーの技を使えることを。」

確かに、十面鬼ユム・キミルは『クウガ返し』等の技を使っていた。その中には『デイケイド返し』も含まれていたが、その時光ったのは彼自身の顔。

つまりデイメンションキックの元祖は十面鬼なのだろう。

「・・・なんか、知りたくなかったな。」

「十面鬼の話はこれくらいでいいだろう。」

大シヨツカーは元々君を使ってオリジナルの世界を破壊しようとしてたんだ。」

ガツクリする士をクスクスと笑いながら海東は続けた。

「とはいえ世界を破壊するなんてそう簡単な事じゃない。だからいきなりオリジナルの世界を破壊しようとせず、リ・イマジネーションの世界を作り、慎重にディケイドの性能を確認しようとした。」

まあ知つての通り君は世界を破壊しなかったから失敗なんだけど。」
「っつーかそもそも、オリジナルってのは何なんだよ？」
「一段落したとみるや、すかさず士が質問した。」

「ああ、そういえばまだ話してなかったね。
彼等ハリ・イマジネーションの世界の元になった世界の住人だ。
もう分かるっているだろうが、
即席で作られたリ・イマジネーションのちやちなライダー達より
ずっと強い。」

「ただ、」と海東は付け加える。
「中には信じられないくらい甘いのがいてね。特にオリジナルの電
王、野上良太郎だ。」

なんせ彼はリ・イマジネーションの世界を庇って
君を自らの世界に入れてしまったんだからね。」

「オリジナルってのはそんなことができるのか？」
「ああ。但し相当厄介なことになる。
イマジンは再び暴れ出すし、野上良太郎は子供の姿になっちゃうし。」

「彼等をファイナルフォームライドできないのは
君が回っていない世界のライダーだからだ。
つまり電王に限ってはオリジナルをファイナルフォームライドで

きるよ。」

「それはそうと・・・今更なんだが海東、何でそこまで知ってんだ？」

「それはねえ士。僕が大シヨツカーからディエンドライバーを盗んだ少し後に

オリジナルからディケイドの旅に同行し、色々調べよう依頼を受けたんだ。

後払いだけど結構なお宝が報酬だったから、僕はすぐのった。

その時にオリジナルから聞いたことと、

僕なりの調査結果から考察できることを今話してる。」

一呼吸置いて、海東はバツが悪そうに言った。

「ディケイドについては・・・正直よく分かっていないことが多い。分かっていえることと言えば、ディケイドの影響は予測不可能って事くらいかな。」

「・・・そうか。」

二人は話を切り、各々の考えを巡らせた。

(結局のところ、俺はやはり破壊者か。カズマも、ワタルも、アスムも俺が・・・)

(そろそろオリジナルの奴等も動けるだろうから逃げないといけないんだけど、土のことだから逃げてくれないだろうなあ。)

大シヨツカーも何かしら首を突っ込んでくるだろうし・・・)

大シヨツカー本拠地

「首領、ディケイドはディエンドの助けによって逃げ延びたようです。」

「・・・ああ。分かっている。腹立だしがあやつはまだ必要だ。
お前が連れて来い。」

邪魔するようなら、オリジナルもディエンドもあやつも殺してか
まわん。」

「・・・了解しました首領。すぐにディケイドの捕獲へ向かいます。」

「

第四話 「幹部来襲」 (前書き)

ダブルは明日最終回か・・・寂しいなあ

第四話 「幹部来襲」

「・・・やってくれたな、あの水色。」

タイムスカラベの効果が切れた天道総司はイライラと呟いた。

「お前なら奴を追えただろう。何故クロックアップを使わなかった。」
同じく動けるようになった剣崎はどうしても納得のいかないことを聞く。

「馬鹿を言うな。空間に作用するような事を自分の世界以外で使うのは危険だ。」

「お前も知っているだろう?」

「・・・」

馬鹿にするように言う天道に剣崎は言い返せず黙り込んでしまった。

「逃がしてしまったものは仕方がない。すぐに探すぞ、もう時間が無い。」

「取り敢えず手分けして」

「・・・本当にディケイドを倒すしか世界を救う方法はないんでしようか?」

天道の言葉を遮り、良太郎（子供）が口を出した。

「そ、そうだよ、絶対なんか別にあるって!」

真司もすぐに賛同する。

「気持ちに分かるぜ?二人共。」

「けどもう取り返しのとつかないとこまで来ちまってるんだ。腹括るしかないだろ。」

だが、一人だけ顔のみ変身を解いているヒビキは既にディケイドを

倒す覚悟でいた。

「おつ、すみません。遅くなりました。」

なんとも言えない険悪な空気の中、明るい声が響く。
見れば雄介がユウスケを背負って歩いており、後ろから夏海が着いてきていた。

「・・・五代さん。その二人は。」

「小野寺君が究極の闇になっちゃってたんで、
その、俺がアマダム壊して無理矢理止めたんです。」

キバーラは・・・逃げてっちゃったんだけど、

この二人も放っておく訳にはいかないし。」

少し言葉を詰まらせながら雄介は渡に答えた。

「・・・そうですか。でも、コイツ等が消えないのはどういう事なんだ？」

「デイケイドと共に旅をしていたからって訳でもねーだろうな。」

破壊以外でデイケイドは世界や人間に影響を与えることはないはずだ。」

剣崎と巧は二人が存在していることに疑問を持つ。

「ちょっと待ってください！何がなんだかさっぱり分かりませんよ！？」

「ちゃんと説明してください！！何で私たちが消えなきゃならないんですか！？」

そもそも土君は破壊者なんかじゃな」

「あー、落ち着いて？今からちゃんと話すから。」
困惑している夏海に津上翔一こと沢木哲也は優しく対応するが、

「津上、さつきも言ったがそんな時間はないんだ。

これで全員揃ったことだし、すぐにもディケイドを探す。」
天道はそれを良しとはしなかった。

夏海は何か言い返そうとしたが、雄介がそれを遮った。

「あつ、それじゃ俺はこの子達と一緒にディケイド探すよ。
その間に出来る限り説明する。それでいいかな？」

一瞬の沈黙があつたが、確かに理に適った意見だ。

「僕は構いません。ただし、ディケイドを優先させてください。」

「つつーか津上達にも言えることだけだよ、

五代お前ホントにディケイド倒す気あんのか？」
思ったことを限りなく率直に言った巧に、剣崎は内心舌打ちをした。

確かに剣崎も感じていたことだが、

これからすぐにもディケイドを探しに行かねばならないという時に
更に話がこじれることになっては困る。

ここはさっさと話を切り上げるべきなのだが・・・

「え？ないけど？」

「はあ!？」

「あの人は僕達と戦ってくれましたし、悪い人ではないと思います

よ。」

「良い人が悪い人かなんてのはこの際関係ない。

奴の存在こそが世界を破滅に導くんだ。お前達はそれで良いのか？」

「でも、いくら世界を救うためだからって人を殺すなんて……。」
時既に遅し。

雄介達と巧達の間で完全に意見が割れて、言い争いが始まっていた。

「もういい！」

剣崎は大声を出してそれを止めた。

「兎に角ディケイドを探す。話はそれからだ。」

「ほう。それはそれは殊勝なことだな。」

全員がゾクリとして声が聞こえた方向を向く。そこには

「どうした？早くディケイドを探してこんか。ワシもこれで忙しい身でな。」

君達がディケイドを探してくれるのならば非常に助かる。」

電磁鞭を携え、不気味な笑みを浮かべた大シヨツカーの幹部 地獄大使がいた。

「……さつきは悪かったな剣崎、俺としたことが肝心なことを忘れていた。」

詫びという訳でもないが、コイツは俺に任せろ。
すぐに終わらせてディケイドを追う。」
「ああ、分かった。頼んだぞ！」

天道の元にカブトゼクターが舞い降りたのを合図に、
天道以外の全員がその場を駆け出した。

「変身！」

【HENSHIN】

【SWORD FORM】

いつの間にか憑依されたM良太郎だけは『前へ』だが。

「俺、参上！」

「む？貴様等は協力してくれんのか。では必要ないな、殺すとしてよ
う。」

「へっ、上等だ。やれるもんならやってみやがれ！」

やる気満々でデンガツシャーを組み立てる電王にカブトは溜息をつ
いた。

「お婆ちゃんは言っていた・・・」

未熟な果物は酸っぱい、未熟者はよく喧嘩をするってな。」

「んだとお、テメエ！」

「フン、口の減らん奴等だ。すぐ楽にしてやるう！」

地獄大使は電王に向かって鞭を放つが、電王はそれを紙一重でよけ
た。

「行くぜ 行くぜ 行くぜえ！」

単調ながらもデンガツシャーを連続で振るい、地獄大使はやや防戦
一方になる。

そこにカブトからの遠隔射撃までくるのでたまらない。

「フンッ！」

このままでは分が悪いと判断した地獄大使は
アイアンクローで電王の腕を掴み、電磁鞭でカブトをも絡め取った。

「いででで！ちょ、放せこの野郎！」

「ぐっ、電流か……。キャストオフ！」

【CAST OFF！ CHANGE BEETLE！！】

カブトは電磁鞭に脅威を感じ、すぐにキャストオフして鞭から逃れた。

その時に飛び散ったアーマーが、

地獄大使に盾にされて動けない電王に次々当たる。

「がっ！ ぶっ！ だっ！ 何すんだコラア！」

が、カブトはまったく気にせず地獄大使に近づきパンチを食らわせた。

その衝撃で地獄大使は思わず電王から手を離してしまい、
今度は電王からの一太刀を浴びる。

「グヌウ……。貴様らア……。！」

屈辱に顔を歪める地獄大使だが、電王はカブトに掴みかかっている。

「さつきはよくもやりやがったな！」

「落ち着け。俺がああしなればお前はまた奴に掴まれていたぞ。」

「ああん！？んなこたねーよ、俺がかっこよくアイツを……。！」

「ワシを無視するなああああつ！！！」

とうとう地獄大使はキレた。全身を振るわせ、真っ赤になっている。

「……。お婆ちゃんは言っていた。」

男はクールであるべき、沸騰したお湯は蒸発するだけだつてな。」
「黙れ、黙れ、黙れえっ！貴様等だけは生かしておか・・・む？」
急に地獄大使は下を見た。するとそこには一匹の毒蛇がいる。

「ツチ！そうか・・・分かった。」

・・・残念だが貴様等は後回しだ。せいぜい怯えているんだな！」
地獄大使は一瞬、蛇のような姿になったと思うと地中に消えていった。

第四話 「幹部来襲」 (後書き)

死神大使「おつちよこちよいな地獄大使登場！まあ別人ですが。」
士「いいのか？幹部がこんなに早く出てきて。後々困るんじゃないか？」

死神博士「いやいや、大シヨツカーの幹部は僕の独断と偏見で考えたら案の定多くなったのでこんくらいのペースでやっていこうと思つてます。」

夏海「それにしてもオリジナルの皆さんくらいしかいませんね。私は一応いますけど。」

士「ソコはこの馬鹿作者だ。イチイチ気にしてたらキリがないぞ。」

死神博士「う……。まあその辺はホント悪いと思つてます。だが私は謝らな」

士「また殺されたいか？お前も物好きだな。」

死神大使「すいませんでしたあ！（土下座）」

第五話 「自分の為に」(前書き)

似たようなタイトルの小説があつたので変えました。
本当にすいませんでした。

第五話 「自分の為に」

「遅いなあ・・・土君達。」

まあそつちは心配ないだろうけど、

キバーラちゃんもどこかへ行っちゃったし、探しに行った方がいいかな？」

これまで光写真館で一人オヤツを作っていた光荣次郎はふと時計を見て呟いた。

「孫娘が攫われているというのにお菓子作りとは薄情な祖父だな、光荣次郎。」

「・・・鳴滝君、か。私は彼等の帰る場所でないかならないからね。」

それに夏海には土君もユウスケ君もついてる。

それより大学も作ったんだけど、君もどうだい？」

突然現れた鳴滝に対してさほど驚く様子もなく栄次郎は言う。

「いや、遠慮しておこう。」

「そうかい？でもお茶くらいは。」

あくまで鳴滝を普通の客のように扱う栄次郎に、鳴滝はイライラしてきた。

「そんなことはどうでもいい！」

偉大なる首領は君が大シヨツカーを裏切ったことを大いに嘆いている。

最後のチャンスだ、大シヨツカーに戻る気はないか？

無論我々は君を幹部として迎え入れるぞ、死神博士。」

「・・・私はね、その名はもうウンザリしてるんだ。」

鳴滝君、申し訳ないけど大シヨツカーに戻る気はこれっぽっちも

ないよ。

世界を弄るより、ここで賑やかに暮らす方が余程楽しい。」
「ようやく栄次郎は真剣な顔を垣間見せたが、今は既に笑顔に戻っている。」

鳴滝は栄次郎のそういうところが気に入らない。

「やはり断るか。ならば覚悟しておくんだな。」

「近いうち大シヨッカーからの刺客が来るだろう。」

「そうだったら、命がけでもここを守ってみせるぞ。」

「それでも私はこの写真館の主人だからね。」

「・・・そうか。」

鳴滝はオーロラの中へ消えていった。

しまった。

「俺がもといた世界では、俺を含めた13人のライダーが自分の願いを叶えるための、殺し合いをしてたって話しましたよね？」

理由はどうあれ、今俺達がやろうとしてるのはそれと同じなんじゃないかな・・・って。」

ヒビキは顔を落とし、暗い笑顔で言った。

「真面目なんだな、真司は。」

まあ確かに俺達も自分の世界、自分の為にディケイド倒そうとしてる。」

でもさ、自分以外の人の為に頑張るってのは本当は誰にも出来ないんだよ。」

誰かを守りたいって心の底から思っても、

それは結局その人を傷付けたくないっていう自分の願いだからな。」

「

「だから誰かが自分の為に行動しても、誰もそれを責めることは出来ない。」

真司がもし自分の為にディケイドを助けたいって思うんなら、好きにしるよ。」

「は、はい・・・？」

「ははっ、何で疑問系なんだよ。言っとくがそんな時は容赦しねえぞ

お。」

「ヒビキさん・・・有り難うございま」

突然真司はヒビキに口を塞がれた。

「シッ！すごい悪いタイミングで見つけちゃったみてえだ・・・。」

(落ち付けて！幸いアイツは俺達に気付いてないっばいし、完全に舞い上がってる。簡単に隙をつけるさ。)
(え、でも変身するときバレちまったらアウトですよ？)
(その辺は任せろ。・・・さあ、行ってこいっ！)

キーン、と高い音が小さく鳴り、ルリオオカミとリョクオオザルが動き出す。

(うわあ、スッゲー・・・。)
真司は思わず手品を見た子供のような顔で呟いた。

二匹は未だ高笑いしている地獄大使にそつと近づき、思い切り攻撃した。

「ハハハ・・・ぬお！？何だコイツ等！？」
大したダメージは与えられていないが、十分な隙がうまれた。

【KAMEN RIDE...】

「変身！」

【DIEND!!】

「っしゃあ！」

「はあああああ・・・だりゃあっ!!」

仮面ライダー龍騎、響鬼、ディエンドの三人が同時に変身した。

「ぬっ！？貴様等・・・」

「この俺を忘れてんじゃねえっ！変身!!」

【KAMEN RIDE DECADE!!】

士も地獄大使の手が僅かに緩んだと見てすぐさまカードを取り出し変身した。

「せいっ!」

「ぐぬあっ!?!」

更にエルポーの一撃で地獄大使から逃れ、龍騎達と共に構え直した。

「俺としたことがあんな奴に捕まっちまうとはな。

しっかしお前等、一体どういう風の吹き回しだ?それともアレか?油断したところを叩くっつゝ悪役に定番のヤツか?」

「いや違えって!俺は、アンタと戦うのも不本意だったしさあ……。」

「俺としちゃ確かにお前を倒したいトコなんだが、大シヨツカーにくれてやったらロクな事にならねえだろうしさ。」

「要するに、今は味方とみなして良いわけかな?」

「「おう!」」

「ぬううう……。」

地獄大使は鞭を地面に叩き付けると姿を消した。

「!?!消えた……逃げたのか?幹部って割には大したことないな。」

「土、下だ!」

「どわっ!?!」

デイエンドの言葉通り、

地面から猛毒怪人 ガラガラランダが触手を伸ばしてきた。

デイケイドはなんとか避けたが、次の攻撃に反応するほどの余裕はなかった。

「グア〜ラア〜ツ!」

「ぐふ……っ!」

「オイオイ、大丈夫かい士」

【ATTACK RIDE BLAST!】

三度目はディエンドの助太刀により阻止されたが、
ディケイドはその一撃だけで膝をつくほどのダメージを負ってしま
っていた。

「真司、俺達もやんぞ。はああああ・・・」

「はいつ!」

【SWORD VENT】

龍騎はドラグセイバーを召喚し、
響鬼はなにやら気合いを入れて音撃棒・烈火を鬼棒術・烈火剣にし
た。

「だあつ!」

「そいあつ!」

「グアラ〜!!」

二人の剣が当たる前にガラガラダはまたしても地中へ逃れて機会
を伺う。

「地下から攻撃してくるとは厄介だな・・・。」

「なに、地獄大使の狙いは士だ。それさえ分かればどうにか反応で
きるぞ。」

【FINAL ATTACK RIDE...】

「これで決めてやる。」

ディエンドがカードを充填するのとほぼ同時に
ディケイドの背後から怪人の気配がした。

「そこか!」

【DI・DI・DI DIEND!!】

ディエンドライバーから物凄いエネルギーが放たれ、怪人に命中した。

第五話 「自分の為に」(後書き)

士「オイ作者ぁ……。やっとでてきたと思ったら何だこの扱いの悪さは？」

死神大使「ヒイツ！」

いやその、やってたらどうしてもオリジナルの人達が目立ってきちゃって。」

海東「というか僕はそこそこ戦ってるけど、士はまだカード二枚しか使ってないよ？」

夏海「あつ、ホントですね。」

死神博士「もう本当に勘弁して下さいって。」

あんだけライダーいたら主役目立たせるの難しいんですけど。」

士「お前の文章力がないせいだろうがああ！」

死神大使「お、お助けえええ！(半泣)」

ユウスケ「いいんだ、どうせ俺なんかクウガじゃなくてクウキだし。」

(泣)」

第六話 「怪人軍団」

「 !? 」

デイメンションシユートが怪人に命中する直前に驚いたのは怪人ではなくデイエンドだった。

デイエンドの放ったデイメンションシユートは、確かに土の後にいた怪人を撃ち抜いた。だが、

「キケケケケケエツ!?!」

土の後に現れたのはガラランダではなく死霊 イモリゲス。この怪人は赤い液体となって水中や地中を自由に移動できるのだ。しかもデイメンションシユートをまともに受けて尚こちらに向かってくる。

「クツ、この死に損ないがっ!」

デイエンドがデイエンドライバーの引き金を引くより先に今度は毒針怪人 ハリネズラスが爆発針を飛ばしてきた。

「アレレレレレ!」

「うわっ!?!」

予想外の攻撃に反応できず、デイエンドライバーを取り落としてしまった。

その際に発電怪人 シードラゴン?世、?世、?世が

デイエンドに槍やハサミを突き出す。

「イーチー！」「ニーチー！」「タァーッ！」

「海東！」

【ATTACK RIDE ILLUSION!】

三体に分身したデイケイドの一人がデイエンドを突き飛ばし、シードラゴン達の一斉攻撃を受けて消えた。

「・・・助けてもらったことには礼を言うけど、

そこは分身を使うべきじゃないんじゃないかい？」

「なに言ってるんだ。誰も傷付かないんだからこれがベストの方法だろ。」

デイエンドは『それはそうなんだけど。』と言おうとしたが諦める事にした。

「さ、無駄話はそんくらいで良いだろ。

どうやらやつこさん、部下をわんさか連れて来たみてえだしよ。」

響鬼の言うことはもつともだった。

姿は見えないが、デイケイド達が今おびただしい数の怪人に囲まれている事は

その気配で嫌でも分かる。

「だったら全員一気に倒してやる！」

【ADVENT】

龍騎は召喚したドラグレッダーに乗ってドラグセイバーを構えた。

「おおっ、気合い入ってるな真司。んじゃ俺も・・・はああああ、せああっ！」

響鬼の身体が真紅の炎に包まれ、響鬼 紅へと変身する。

「怪人軍団には、怪物軍団モンスターで対抗するのでしょうか。」

【KAMEN RIDE IMPERER!】 【ATTACK RIDE ADVENT!】

デイエンドは仮面ライダーインペラーと共に大量のモンスターを召喚し、

「大体分かった。取り敢えず海東、紛らわしいからそいつ等引っ込めろ。」

【KAMEN RIDE BLADE!】 【FINAL FORM RIDE B-B-B BLADE!】

デイケイドは残った一体の分身をブレイドブレードに変形、巨大な剣を軽々と持ち上げて大群に向かっていった。

「俺は冒険家やってて、津上さんはレストランやってるって言うってたなあ。

「ご飯物凄く美味しいんだよ。あ、でも天道君とかも負けてなくて・

・
「……五代さん、そんなところから説明してたらキリがないと思いますよ。」

「えっ、あ そっかあ……ん〜でもどこから話したもんかな?」

「あの〜、説明してくれるって割にまだほとんど何も分かってないんですけど。」

「あぁっ、もしかしてぶざけてます!?!」

こちらは雄介、渡、夏海、ユウスケ（気絶中）だ。
とても重要な話をする筈が、

日常的な会話をしてしまうのが五代雄介の恐ろしいところだろう。

見かねた渡が「よろしければ僕が説明しましょうか？」と言わなければ

未だに何番目の技がどうのこうのとか、

翔一と天道のどっちの料理が美味しいとか話していたかもしれない。

「貴女方が旅してきた世界はリ・イマジネーションという、

僕達がもっていた世界を基に大シヨツカーが作り出した世界です。

大シヨツカーは僕達の世界を破壊する為に開発したディケイドの
実験として

ディケイドにリ・イマジネーションを破壊させようとなりました。」

「でも土君は……。」

「確かにディケイドは直接世界を破壊しませんでした。

しかし彼が通った世界から『滅び』が起きていったのは事実です。

僕達は『滅び』を止めることと世界の修復にあたっていたので

これまで干渉できなかったのですが、今そのことは別の人達に任
せています。

……ただ。」

渡は意味ありげに息をついた。

「クウガの世界は五代さん以外に滅びを止めていられる人がいない
んです。

なのに五代さんの話ではクウガの世界はまったく『滅び』が進ん
でいない。

だから五代さんも今此処にいられるんですが、どうにも不可解で
す。」

「そうなんだよね。野上さんの世界が破壊されないのは

困惑する夏海をよそに仮面ライダークウガとキバがその場で構えた。「いるのは分かってる。出てきたらどうだ!？」

これまで淡々とした口調だったが、熱気のコもった声色でキバが叫んだ。

「フッフ、流石はオリジナルのライダー。一筋縄ではいかんということか。」

何も無いところから軍服に身を包み西洋風の兜を被った男が現れた。

「お前・・・大シヨツカーか。」

「左様。我が輩は大シヨツカー幹部　ブラック將軍。」

その娘とリ・イメージーションのクウガを渡せ。

貴様等にはなんの義理もないだろう？

・・・とは言ってみてもやはり無駄か。」

クウガとキバはブラック將軍の言葉を最後まで聞かずに飛び出していた。

ブラック將軍は二人の同時攻撃を姿を消すことでかわす。

「！　超変身!！」

クウガはペガサスフォームへ超変身してブラック將軍を捜したが、その必要はなかった。

「ウアッハッハッハ。ここだここだ。」

我が輩との取引に応じなかった以上は死んでもらうぞ、ライダー共!」

「僕達は大シヨツカーの計画を阻止する為異世界まで来たんです。

そう簡単には負けるわけにはいきません。」

「さつてと、んじゃ貴方から色々聞き出すとしますか・・・ねっ！」

クウガは再びブラック將軍に突っ込んでいった。

第六話 「怪人軍団」(後書き)

士「・・・なんだ？この昭和の香りだらけの小説は。」

死神大使「返す言葉もございません。しかし大シヨツカーと言うか
らには

シヨツカー及びゲルシヨツカーは多めに出していきたい
んですよ。」

夏海「完全に私情ですね。というかとことんユウスケが・・・」

ユウスケ「！夏海ちゃん、俺のこと覚えててくれたんだ！」

夏海「え？あ、はい。」

死神大使「いや、アマダム壊されたらそう簡単には起きないと思う
ので・・・

つつーかそもそも死んでたんだしよくね？」

ユウスケ「ひどっ！土も何か言っつけてくれよ。」

士「アマダム壊れたのか？んじゃお前何の為にいんだ？」

ユウスケ「・・・！ウワァーン！！」(退場)

ヒビキ「まあ、俺等に出番くれるのも嬉しいけど、

ちゃんとアイツ等のことも書いてやれよ？」

死神大使「はい、すいません。」

次回かその次くらいにユウスケも起きると思うので、そ
の時に・・・」

全員「」「遅えよ。」「」

第七話 「助っ人」

「フン、考えもなしに突っ込んでいるようでは

我が輩に触れることもできんぞ、仮面ライダークウガ!」

ブラック將軍の言う通りクウガの攻撃はことごとく回避されてしま
い、

スティックやドリルによるカウンターを浴びる。

「グウ・・・、ふおおりや!」

「無駄だというのが、まだ分からんかつ!」

なおも立ち向かうクウガは重い一撃を受け倒れてしまった。

「五代さん!」

念のため夏海の側にいたキバはクウガが倒れたのを見てついに動き
出した。

「はあああ、フアツ!」

またしてもブラック將軍は姿を消すが、

キバは落ち着いた動作でキバットにフエッスルを吹かせた。

「ガルル セイバー!!!」

キバの胸と左腕の鎖が弾け飛び、ガルルフォームへチェンジした。

「ふうおツ!」

「ハアツ!」

ブラック將軍のスティックとキバのガルルセイバーがぶつかり合う。

「貴様、何故我が輩の居場所が分かった?」

「さあ?野性の勘・・・とでもしておこうか。」

「ふむ、面白い奴だ。」

仮面ライダーキバ、いつまで我が輩の攻撃を見切れるかな?」

ブラック将軍は姿を消したが、キバは冷静さを欠かずにクウガを助け起こす。

「五代さん、奴の保護色能力は厄介です。」

「僕が次に居場所を突き止めた後は隙を与えずに一気にやりましょう。」

「はい・・・うわっ!?!」

「クククク　ギギツ、キイーーー!」「クククク」

六人もの仮面ライダー1号が現れ、クウガを攻撃しだした。

「え?」

「う・・・仮面ライダー!?!な、何で」

なんとか臨戦態勢を取るクウガだが、

全員が同じ姿をした六人と戦うというのはなんとも奇妙な気分だ。

「戸惑っているようだなクウガ。そいつ等はショッカーライダーと違って

仮面ライダー1号と同等の力と特殊能力を合わせ持つ。

そしてキバよ、貴様の相手は我が輩だ。」

すぐにクウガを助けようと動くキバはブラック将軍のドリルに阻まれた。

「『保護色能力が厄介だ』と言ったな。果たして・・・それだけか?」

はっとして下を見ると、そこには数え切れないほどのヒルがいた。

「これは　　!」

「遅いわ!」

ヒルが次々とキバに飛びついた。

ジル、ジル、と不気味な音を出してキバの血を吸っている。

「うアツハツハツハツ！血を吸われる吸血鬼とは滑稽だな！！」
ブラック將軍も触手を伸ばして血を吸い始めた。

「ぐ・・うう・・。」
触手を切ろうと必死になるが、
思ったより柔らかい上にガルルセイバーを持つ手が安定せずうまく切れない。

一方のクウガも六人のショッカーライダーを相手に満身創痍。
とてもキバの救援には向かえない。

「思ったより容易かったが、もう貴様等に勝機はない。
我が輩の目的を果たさせてもらおうか。」
ブラック將軍は夏海に向かって触手を伸ばした。

「ひ・・・！」
夏海は小さな悲鳴を上げ、そして

「！！！！」
目の前で触手が噛み千切られるのを見た。

「おいおい、女を狙うたあ無粋だぜ？」

「父・・さん・・？」
触手からは解放されてはいるが今にも気絶しそうな
キバ キバフォームが男に呼びかける。
男はやれやれと溜息をついた。

「生憎だが音也じゃねえよ。相ツ変わらずお前はファザコンらしい
な、渡。」

「次狼さん・・。」
不思議な安心感を得たキバは、ふらつきながらもしっかりと立ち上

がった。

「裏切り者、死神博士よ。我々はこれより貴様を処刑する！」
ブラック將軍とは毛色の違う、ナチスの軍服に身を包んだ鳴滝
ゾル大佐が叫んだ。

「おや、刺客というのは君のことだったのかい？
私が知らない幹部が来るかと思えば、私も舐められたものだねえ。」

「ほざくなよ老いぼれめが・・・かかれ！」

「必殺シュートだ！」 「サボテン爆弾！」 「弾丸、スクリューボオ
ール！」

ゾル大佐の指示で怪力 トカゲロンは岩を蹴り、
魔人 サボテグロンは手に持っていたサボテンのような爆弾を投げ
つけ、
鋼鉄怪人 アルマジロンは自身の身体を丸めて
転がるようにして栄次郎に突進していく。

三体の怪人が同時に放つ必殺技。たとえディケイドであっても
何かしらの方法でこれを防がなければまず助からないだろう。

だが栄次郎は眼鏡とバンダナを取っただけでなんら特別な動きを見せない。

「甘い甘い。私を殺すつもりなら責めて十体くらいは来なきゃ駄目だよ。」

隕石のようなものが多数降り注ぎ、三怪人の技を打ち落とせばかりか

ゾル大佐が率いている怪人軍団も全滅しかねない勢いで攻撃してくる。

「・・・くつ、私が貴様の隕石を予想せずに来るとでも思っていたのか？

貴様は昔から私を舐め腐っていた。だから私は貴様が、大っ嫌いなんだ！」

「鳴滝君・・・。」

「だがそれももう終わりだ光荣次郎。私は今日をもって貴様と決別する！」

栄次郎は急に手で口を押さえ、ガクンと膝をつき、空を見上げた。

「クエエエーッ！」

「毒蛾怪人 ドクガンダー・・・奴の毒鱗粉か。なるほど一本取られたよ。」

「クク、貴様に誉められるのはこれが最初で最後だな。 やれ。」

迫り来る怪人達を前に、栄次郎はなんの対策も取ろうとしなかった。（心残りは、たくさんある・・・でもその方が私の最期には相応

しいかもな。

あとは頼んだぞ、仮面ライダー諸君。)

栄次郎が生きること諦めかけたその時

【LIGHTNING SLASH】

「ハアッ！」

「ウヴェエエエエイ！」

アギト フレイムフォームのセイバーブレイクと

ブレイド ジャックフォームのライトニングスラッシュが

擦れ違うような形でドクガンダーを斬りつけた。

ドクガンダーの死を皮切りに赤い閃光が走って怪人達がどんどん消滅していく。

【TIME OUT . REFORMATION .】

「大丈夫かよ爺さん。」

栄次郎の目の前に現れた仮面ライダーファイズが短く問いかける。

「おおお・・・！」

栄次郎は思わず感嘆の声を漏らした。

【FINAL ATTACK RIDE B・B・B BLADE
!】

「うあああ・・・せやあつ!」

「灼熱真紅の型あ!」

【STRIKE VENT】

「はああ、ラアツ!」

四人のライダーの奮闘で周囲の怪人がかなり減ってきた。

（モンスターも巻き込まれてインペラーがブランク化、消滅したが、
）

「おっし、もうひと踏ん張りだ。全員、やれるか?」

「当たり前だ。俺がこの程度の奴等に負けるかっての。」

「なんだよ、お前さつき助けてもらってたくせに感じ悪いぞ!」

「そこは気にしない方がよいよ城戸真司。それより、オリジナルの
援軍かな?」

ディエンドの言葉で気がついたが、いくつかのエンジン音が近付い
て来ている。

「あれ、ホントだ。しかも結構来てくれてるっぽいな。」

「みんな良いよなあ、カッコいいバイク持ってる。」

「俺なんかやっつとバイクに乗れるってくらいなのに。」

「仮面”ライダー”がそれで良いのか・・・ってなんか多すぎねえ
か!?」

ディケイドの言う通り、とても七台やそこらの数ではない。

ゆうに十数台はあるバイクが突っ込んでくるらしい。

「ウエアー！」 「シャアアッ！」 「ピシャアーツ！」
イカファイアの火炎放射、マシンガンスネークとミサイルヤモリの銃撃が
四人に迫る、その時真つ赤なバイクに乗った真つ黒な戦士が四人を守った。

「うおおらっ！」
なんの躊躇いもなく戦士はバイクでジャンプしたが、そこには既にカメラモスキートとゴキブリスパイクが戦士を挟み撃ちにする形で待ち構えていた。

「へっ、行くぜ！」

【JOKER！ MAXIMUM DRIVE！！】

「ライダーキック！」

戦士の足が紫色に光り、ゴキブリスパイクに対しライダーキックの態勢を取る。

その後ろからカメラモスキートが襲いかかろうとするが、赤いバイクが突如変形しそれを迎え撃った。

【ACCCEL！ MAXIMUM DRIVE！！】

「はああっ！」

黒の戦士と赤の戦士のキックを浴びた二体の怪人は一瞬にして爆死した。

「お前達は一体・・・」

「俺か、今の俺は仮面ライダー ジョーカー。」

「俺は仮面ライダー、アクセルだ！」

第七話 「助っ人」(後書き)

次狼「まさか俺まで出られるとはな・・・一応礼を言っとくぜ。」
死神大使「いやあ、これはどうも。」

ぶつちゃげザンキさんが出したかったけど出せないから仕方なく(グシヤツ)「

次狼「前言撤回だ。」

キバット「つつーかなんで俺様より目立ってたんだこの馬鹿狼！お前等も！」

照井「俺に質問をするな。」

翔太郎「いや出れたのは嬉しいんだけどよ、

フィリップがいないんじゃないやどうもシツクリこねえ。」

夏海「そうですね。その辺はなんで・・・あ、ダメです死んでます。」

士「しゃーねえ俺が作者に代わって説明してやる。」

ダブルについては詳しく言えねえ。ユウスケの復活は延期。メモられてることは以上。」

翔太郎「えっ、それだけかよ！

詳しくは言えなくてももうチヨイなんか教えてくれても良いじゃねえかよ！」

照井「答える作者・・・所長は、所長は出るんだろうな!？」

死神大使「う・・・僕そろそろ本当に死ぬからでない・・・かも・・・」

照井「！ 良いだろう・・・ッ!！」

【ENGINE! ELECTRIC!】

死神大使「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

ユウスケ「・・・。」

設定集 オリジナル&大シヨッカー(前書き)

八話書いてたら二次設定多いなと思ったので。

設定集 オリジナル&大シヨッカー

五代雄介/仮面ライダークウガ

オリジナルのクウガで、ダグバを倒してから数年が経過している。技の数は増えてません。2000のまんまです。

理由は2009にすべきか2010にすべきか迷ったのと、正直こんだけあったらダブってしまいそうだったので・・・。

それとここではライジングを使っても大爆発は起きません。

恐らくアレはゲゲルをしているグロンギが

薔薇のタトウの女からベルトに何らかの細工をされていたのでしよう。

したがってゲゲルをしないラヤダグバは爆発しなかった、ということ。

いやあんな規模の爆発ほいほい起こされちゃ進めにくいんですよ。すみません。

津上翔一/仮面ライダーアギト

オリジナルのアギトで「レストラン アギト」のシエフ。

未だ大した出番はありませんが、個人的に好きなので活躍する予定。

城戸真司/仮面ライダー龍騎

オリジナルの龍騎。戦いがリセットされてから一時その記憶を失っていたが、

世界の危機を知った神崎士郎によって記憶を取り戻した。

乾巧/仮面ライダーファイズ/ウルフォルフェノク

オリジナルのファイズ。灰化は進んでますが非常に遅いです。

周りを遅くするクロックアップと違いアクセルフォームは普通に加

速のため
アクセルフォームで活動できる。
またオートバジンは壊れたままなのでバイクなし。ファイズエッジもない。

剣崎一真／仮面ライダーブレイド／ジョーカーアンデッド
オリジナルのブレイド。この人二時設定が多い。

ジョーカー化のため身体能力が飛躍的に上昇しており、
運動神経はヒビキを上回るほど。

しかも彼が変身するブレイドはカード使わなくても技の発動が可能。
どういう事かと言いますと、彼は十三体のアンデッドと融合して
ジョーカーになった。

つまりそれらが封印されているラウズカードは彼の体内にあるので
す。

最終話でのロイヤルストレートフラッシュを見てみてください。
ブレイドの身体が光って、その光がラウザーに集まって・・・
そんな感じで出せます。

ヒビキ／仮面ライダー響鬼

オリジナルの響鬼。正直覚えてないところが多くあるので一番心配。
ちゃんと自分も京介も鍛えてます。それだけは確か。

天道総司／仮面ライダーカブト

オリジナルのカブト。ご存じ天の道を往き総てを司る男。
ちよつと天道語録使いすぎたな。

最大の長所であるクロックアップは使用不可だが、それでもやはり
強い。

野上良太郎／仮面ライダー電王

オリジナルの電王。ディケイドの影響を受け子供の姿となっている。

同じ理由でイマジン達は未契約状態。映画の多さ故に活躍しないかもしれない。

紅渡／仮面ライダーキバ
オリジナルのキバ。超冷静な性格になっている。

左翔太郎／仮面ライダージョーカー
フィリップも帰ってきた後だが何故かジョーカーに変身している。
正直感動のあまり勢いで登場させた。でもま、私に良い考えがある！

照井竜／仮面ライダーアクセル
そついやジョーカーとアクセルの共闘ってないなと思って、ね？

大シヨッカー
TVではあまり昭和勢は出ませんでした。バンバン出します。
地獄大使、ブラック将軍、ゾル大佐、ドクトルGが
現時点で登場している幹部ですがまだまだ出す予定。
幹部達はディケイドが行った世界のみオーロラを出して自在に移動
できる。

一応、彼等の部下は設定に合わせています。

地獄大使／ガラガンダ
ガラガンダにならなくてもある程度は戦えるが、
地中に潜ったり毒出したり特殊能力は使えない。
容姿は映画より初代に近いです。全員そつです。

ブラック将軍
地獄大使と違い人間態で姿消したり血を吸ったり出来る。

(姿消すだけにする予定でしたがSPIRITSで血を吸う描写が

あつたので)

正直出さないでおこうかなとも思いましたが
ディケイド映画での扱いの悪さから同情して出しました。

ゾル大佐

ぶつちやけ鳴滝が着替えただけ。栄次郎を毛嫌いしている。
ディケイドの終わりに納得いかなくて書き始めたのに
こっとう設定を守るってのも変な話ですね。

ドクトルG

大シヨツカーレインジャー部隊を統括している。あの独特の言いま
わしは健在。

レインジャー部隊

ほとんどはデストロン怪人で構成されており、第一部隊から第三部
隊まである。

ちなみに第三部隊の隊長はデストロン怪人ではなく

クウガと壮絶なバイクアクションを繰り広げたグロンギ ゴ・バダ
ー・バ。

第八話 「誰も知らないライダー」 (前書き)

今回から次回にかけては、反感を買うかも知れない……。

第八話 「誰も知らないライダー」

「どういう事だ、ドクトルG。僕の邪魔をする気か？」

ドクトルGの前にガラガラランダが現れた。

かなり頭に血が上っているようで、物凄い気迫でドクトルGを睨み付けている。

「邪魔だと？不甲斐ない貴様をわざわざ助けに来てやったんだ。

事実、貴様の部下はほぼ全滅しているようだが？」

「・・・ちっ、僕はディケイドを捕らえる。貴様は他の奴の相手でもしている。」

「そのつもりだ。俺はあの仮面ライダージョーカーとアクセルに興味がある。」

ドクトルGはガラガラランダを軽くあしらって静かにジョーカー達を見据えた。

「照井、雑魚共はお前に任すぜ。」

あのドクトルGって奴は俺がやる。」

「・・・妥当な割り振りだとは思うが、左。やれるか？」

「ああ？くだらない質問すんなったのはテメーだろ。」

「ふん、そうだったな。」

【TRIAL!】 【TRIAL!】

アクセル トライアルはすごいスピードで走り出した。

「ジョーカーにアクセル・・・？驚いたな。

僕もまだ知らないライダーがいたとは。」

「まあ味方みたいだし、俺はちょっとあの黒い方の手伝いしてくるわ。」

「ちよっ、ヒビキさん!？」

駆け出した響鬼 紅を追い掛けようとした龍騎だが、背後に気配を感じて咄嗟に振り返った。

「デイケイドオオツ！」

ガラガラランダがデイケイドに向かって突っ込んで来たのだ。しかしデイケイドはそれを難なく避け、デイケイドライバーにカードを充填した。

「そう何度も同じ手食つかよっ・・・と！」

【KAMEN RIDE KABUTO!】

「こつちも疲れてるんでな、一瞬で終わらせてもらっぜ？」

自分の戦法が既に見切られていたことに動揺し動かないガラランダを前に

デイケイドは殺る気満々で次のカードを充填した。

【ATTACK RIDE CLOCK UP!】

クロックアップしたDカブトにガラランダは蹴られ殴られ成す術もない。

「ぐああああ！」

「トドメはやっぱり、同類（ヒ）にしてもらいたいよね」

【KAMEN RIDE OHJA!】

「祭りの場所は、ここかア・・・。」

王蛇は有無を言わずベノサーベルを振り回し、ガラガラランダを追いつめていく。

【FINAL ATTACK RIDE KAKAKAKA BUTO!】

「うらあっ！」

Dカブトにライダーキックの追撃を受けたが、ガラガラランダには更なる追撃も見えていた。

「これで終わりだ。」

【ATTACK RIDE CROSS ATTACK!】

「わ 儂の、長年の夢が、キサマらなゾ、ニイイイ……！」

ガラガラランダはありったけの毒を王蛇に放つが、

もともと毒を纏った王蛇のベノクラッシュには通用せず

むしろ効果が上がった状態で喰らう。

「ガア……ラアアア……。」

ガラガラランダは体中からスパークを出しつつもオーロラで退散した。

「うわ……アイツのは、いつ見てもおっかねえな。」

嫌なことを思い出した龍騎は暫し立ち尽くした。

「勝負だ、仮面ライダージョーカー。ゆくぞ……！」

「うおっ!?!」

人間態と思って油断していたジョーカーに

ドクトルGはその斧で重い一撃を食らわせた。

(おいおい、なんてパワーだよ！)

【METAL!】 【METAL!】

ドクトルGの怪力を思い知ったジョーカーはすかさず

銀色のメタルフォームとなって背中メタルシャフトを構えた。

「今度はこっちから行くぜ、てらああ！」

「ふうんっ！」

ジョーカーは勢いよくシャフトを振り下ろすがいとも簡単に盾で防がれ、

あろう事か力負けしてしまった。

ドクトルGの斧が防御に優れたメタルフォームに激痛を走らせる。

「ぐおっ・・・長引かせると厄介だな。一気に決めるぜ！」

【METAL! MAXIMUM DRIVE!】

「そつだジョーカー、俺に貴様の力を余すことなくぶつけてみせろ。」

「舐めやがって・・・ライダーノック！」

メタルシャフトが銀色の輝きを放ち、

先程より力を込めてドクトルGに向かっていくジョーカー。

ドクトルGは盾を前に出し、その後ろに隠れるような体勢を取る。

「俺の本当の姿をよよく見る！」

盾の後ろ側から泡のようなものが吹き出し、

ドクトルGの身体が蟹の怪人 カニレーザーへと変わった。

「カアバラアアアア！」

突如として辺りが暗くなり、視界を奪われた。

「!?!?何だコリヤ!?!?」

「鬼法術・鬼火！」

一瞬戸惑ったジョーカーに発射されたレーザーが真紅の炎で相殺された。

その隙にジョーカーのライダーノックがカニレーザーに命中、ギリギリで避けられるもかなりのダメージを与えた。

「大丈夫、みたいだな青年。」

「っ・・・ああ。アンタが異世界の仮面ライダーってヤツか。」

「んん？まあそう、なのか？」

響鬼 紅は中途半端な返事をした。

「ふむ、仮面ライダー響鬼か。俺には丁度良い相手かもしれないな。」
ライダーノックのダメージが堪えていないのか、
カニレーザーは平然と起きあがり響鬼 紅に向かって斧を振るう。
響鬼 紅はそれを烈火で受け止めた。

「うん、やっぱり仮面ライダーって呼ばれるのは慣れねえや。」
そんなことを言いながら炎を纏った烈火でカニレーザーを攻撃する。
まさに鬼神の如きその一撃にカニレーザーは思わず退いた。
「スツゲエ・・・っと、接近戦は不利なんだったな。」

【TRIGGER!】 【TRIGGER!!】
ジョーカーはトリガーフォームにチェンジし蒼いエネルギー弾を放った。

ルナトリガーのような追尾機能はないが、
トリガーメモリの”銃撃者の記憶”が最大限に発揮されるこの姿は
百発百中とも言える命中率を誇っている。

全ての弾がカニレーザーを襲ったが、
蟹の外甲に阻まれ大したダメージに至っていない。
響鬼も二本の烈火を巧みに扱って攻撃するが今度は的確に捌かれて
いる。

「こんな事で、俺は死なん・・・カアアアバラアアアアア!!」
カニレーザーの雄叫びが響き渡った。

【TRIAL! MAXIMUM DRIVE!!】
「9.7秒・・・か。」

アクセル トライアルの背後で大爆発が起こった。
攻撃力に欠けるトライアルに何体もの怪人を十秒以内に倒すほどの力はない。

だがアクセル トライアルはマシンガンスパイクを
レインジャー部隊が乗るバイクを攻撃することで爆発を起こし、
怪人達にダメージを与えたのだ。

「さあ、ここからが本番だ。かかってこい！」
バイクを失った怪人達に向かい、文字通り目を光らせた。
真っ先にやって来たオックスオルフェノクにエンジンブレードの斬
撃を浴びせ、
再びトライアルメモリを手にとってマシンガンスラッシャーを発動
する。

「うおおおお・・・！」
今のアクセル トライアルにはどんな敵を攻撃しているかの判断も
つかない。
ただがむしゃらに、エンジンブレードで目の前の相手を斬りつけ走
り続けた。
それでも敵は一向に減らない。まるで沸いてくるかのように次々に
現れる。

そしてそこから来る焦りがアクセル トライアルにとって致命的だ
った。

（クソツ、一体何体・・・！しまった！！）
気が付けば、タイムリミットはすぐそこまで来ていたのだ。
しかもずっと走り続けていたせいでトライアルメモリはかなり遠く
にある。

トライアルのスピードをもってしても間に合わない。

遂に10秒が経過し体中に蒼い電流が走った。

「ぐああ！」

アクセルの変身が解け、照井はその場に倒れ込んだ。

「くっ……。」

すぐに立ち上がろうとするが体が言うことを聞かない。

【ACCEL！】

どうにかアクセルメモリを取り出した照井だが、

ノコギリトカゲから電動ノコギリを突きつけられた。

「キイリリリリ！」

この時点で照井が自力で助かるのは不可能。

また他のライダー達も各々で戦っており助けるどころかこちらを見てもいない。

（最早、これまでか……！）

そう思った刹那、ノコギリトカゲに銃弾が当たり、

ノコギリの狙いが照井の首を僅かに逸れた。

「アレは……！」

銃弾が発射された方向には骸骨のような顔に黒いボディと銃、

そしてハット帽を被った仮面ライダー、スカルが仁王立ちしていた。

「さあ、お前達の罪を 数えろー！」

第九話 「師匠VS弟子!？」

「ほあ、おお、あたー!」

スカルはスカルマグナムで怪人達をブツ叩いていく。

その様はまるでスリッパによるツッコミのようだった。

「まさか、所長か・・・?」

照井の嫌な予感(確信に近いが)は見事的中してしまった。

そう、スカルに扮するは自称 鳴海探偵事務所所長こと鳴海亜樹子である。

そもそも低スペックな上、戦いに慣れていないスカルの戦い方は危なげであり、声をかけただけで命取りになりかねない。

だが、

「亜樹子オ!それおやつさんからもらったメモリとロストドライブ
ーだろ!

傷つける前にさっさと返しやがれ!」

「お、おい青年!?!」

スカルに気付いたジョーカーがカニレーザーへの攻撃を
一時中断してまでツカツカと近づいてきた。

「それはなあ、NEVERとの戦いの時おやつさんがくれた大ツ切
なモンなんだよ!

っつーか隠しといたはずだろ、どうやって見つけやがったあああ
!!!」

「そりゃあ翔太郎君がポーツとしてたあの一年間、私が苦勞して探
したのよ!

いくら仕事の合間に少しずつとはいえ一年も掛けて見付かない

って事の方が

どーなつとんじゃあー!」

「馬鹿お前、おやつさんからの貰いモンだぞ!」

後生大事に間違つても盗まれないようにしとくに決まってるんだろ
うがア!」

一応ジョーカーが怪人達に発砲しているため言い合いに支障は出て
いないが、

ジョーカーは今にもスカルを撃つてしまいそうな程のキレっぷり
である。

「上等だコラ・・・力尽くでも返して貰うぜ亜樹子!」

【TRIGGER! MAXIMUM DRIVE!!】

「ちょ、ちよつと翔太郎君!」

遂に業を煮やしたジョーカーは迷いなくトリガーマグナムにメモリ
を入れる。

流石に焦って距離を取るスカルだが、銃を相手にそんなものは意味
を成さない。

「ライダーショット!」

「アタシ、聞いてないっ!おつ、ゴメン竜君ちよつと借りるね!」
蒼い光球がスカル目掛けて放たれたと同時に

スカルは側にあったエンジンブレードを拾って自分のメモリをそれ
に入れた。

【SKULL! MAXIMUM DRIVE!!】

「ほおお・・・スカル、スラーッッシュユ!」

マキシマムのパワーに驚きつつもエンジンブレードをバットのよう
に振るつた。

「シャシャアッ!」

打ち返されたライダーショットはジシャクイノシシを襲い、見事に爆破した。

(突然のことで反応できなかったらしい)

「や、やったー！さっきはスカルスラッシュって言ったけど

うん．．よし、スカルホームランに変更ね！」

バンザイをして喜ぶスカルの足下にジョーカーはさらなる攻撃を放つ。

「おわーっ!?!」

「亜樹子 teme、その姿でバンザイなんてしてんじゃねえよ．．．。

」

確かに、こんなところで仮面ライダーがバンザイとは

なかなかシユールな光景ですねえ。

．．．失礼、ジョーカーは全身が震えるほど憤っているようだ。

「いい加減にしる左、変っ．．身！」

【ACCEL!!】

そこに再び変身したアクセルまで乱入してくる。

「所長が心配なのは分かるが何も攻撃することはないだろう！」

スカルは「いや、心配してたのアタシじゃなくてドライバーじゃない?」

というツツコミを入れたくなったが一応堪えた。

「だー、分かったよ！（チツ）今は戦いに集中する！」

「イヤ今舌打ちしたやろ!?!」

ややパツとしない事もあるが、どうにか話も纏まった。

「んじゃ二人とも、行つくよー！」

「お前が仕切んな、お前がッ！」

「ア、ア、ウウ！」

咆吼し、次郎はその姿を本来の姿であるウルフェン族のガルルに変えた。

素早い動きでブラック將軍に急接近する。

「チツ、^{ケタモノ}獣めが・・・身の程を知れ。」

ブラック將軍もそれに応えるように自らの怪人態ヒルカメレオンに変身した。

威圧感を感じたガルルはザザツ、と急ブレーキを掛ける。

「ソイツがお前の本当の姿か・・・なんつーか、キモチわりいな。」
ガルルはヒルカメレオンのブツブツした体をしげしげと眺めた。

「次郎さん、くだらないこと言っていないでいきますよ！」

「バツシャー マグナム！！」

キバは二つ目のフェッスルをキバットに吹かせ、バツシャーフォームとなった。

三人はジリジリとその場を動きつつ機会を窺う。

「ヴオオ、オ、ウ！」

最初に仕掛けたのはガルルだ。咄嗟に消えたヒルカメレオンの位置をその嗅覚で突き止め爪を立てる。

「キイエエエー！」

「させるか！」

ヒルカメレオンはガルルの攻撃に合わせてうまく触手を伸ばすがキバの水圧弾でそれを打ち落とされ、ガルルの爪に引き裂かれた。

「浅い・・・油断するなよ渡！」

「ええ。」

キバはバツシャーマグナムで追い打ちを掛けるが、何かに当たったような音がしない。

「また姿を消したか。芸のねえ野郎だな。」

（なるほど、嗅覚で我が輩の位置を・・・ならば獣を直接狙うのは無謀か。）

そう考えたヒルカメレオンはキバの背後に回りすぐに触手を伸ばす。そして今度こそキバを絡め取ることに成功した。

「ウアッハッハッ！結局、何も変わらなかったな！？やはり勝者は我が輩の！」

キバは僅かに動かせるその手からバツシャーマグナムを放り投げた。それはマーマン族のバツシャーへと変わり

「ねえねえ。君、戦闘中によく喋るね。ハア！」

空中から風船ガムのような水圧弾を放ってヒルカメレオンを攻撃する。

「キイエツ！？」

キバフォームに戻ったキバは触手から逃れ、3つ目のフェッスルを

手に取った。

「おおつ、今回は大忙しだな！ドツガ ハンマー！！」
ドツガハンマーを叩き付けようとしたがこれは失敗し
ヒルカメレオンにハンマーを受け止められてしまった。

しかしその勢いが消えない内にキバは体を大きく上へ回転させ
丁度真上にあつた木に宙吊りになって拳を振り下ろす。
ヒルカメレオンはすぐに回避しようとするが
「フオオアアアア！」

フランケン族のドツガに掴み上げられてしまつて動けない。
「おのれ・・・キエアアツ！！！」

断末魔のような悲鳴を上げてヒルカメレオンが倒れるが
キバ達の猛攻は止まらない。

「キメるぜ渡。」

「はい！」

「力も急いで！」

「分かつて・・・る。」

「全員、行くぜ？ウエイク アップ！！！」

キバの左腕、右腕、胸、そして右足の鎖が碎け

魔王石が露呈すると共にドガバキフォームへ変身した。闇が周囲を
覆っていく。

「ここで我が輩が負けたところで、死んだところで！
我等大シヨツカーの勝利は揺るがん！！

偉大なる大シヨツカー首領に栄光あれ！
「フアアーツ！」

ダークネスムーンブレイクがヒルカメレオンを貫いた。

第九話 「師匠VS弟子!？」（後書き）

翔太郎「いや、今回はじっくり話を聞かねえとな、色々。」

死神大使「はい全て私の責任です私は謝りますですから首から手を放して下さいお願いします。」

照井「退け左・・・コイツには井坂が乗り移っているようだからな。」

夏海「うっわ・・・作者が目も当てられないようなことに!」

士「ま、今回は流石に遊びすぎたって事だ。」

これまでは翔太郎には何もされてなかったのに自分から墓穴掘りやがった。」

渡「そういえばスカルは帽子を被っているそうですが一体どこから・・・?」

亜樹子「お父さんのを使うのは流石に忍びないし、帽子無いとカッ
コ悪いし、

ってことで事務所にあつた翔太郎君の帽子適当に取つただけだよ。」

次狼「成る程な・・・ぬおお!？」

夏海「ひゃっ!？」

次狼「このコーヒーは誰が?」

亜樹子「えっ、竜君ですけど?」

次狼「旨い・・・(パンツ)釣りはいらねえ。」

亜樹子「ええっ、一万円も!?!?というかここ別にカフェでもなんでも・・・。」

士「どんどん小説とは関係なくなっていくてるな。」

海東「だがそれも、乾巧って奴の仕業なのさ。」

ユウスケ「君には嘘が多すぎるんだよ！」

第十話 「全仮面ライダー、集結せよ！」

「キギイー！」

シヨツカーライダーの一体が爪先からナイフを取り出し斬りつけようとしたがクウガはそれを素手で受け止めた。

「ふおお、超変身！」

ナイフをタイタンソードにして逆に本来の持ち主に突き刺す。

「キギヤアアア！」

カラミティタイタンのパワーに圧倒され、シヨツカーライダーは数秒と保たずに爆散してしまった。

「……キキツ、ギヒヒヒ……。」

気味悪くシヨツカーライダー達は笑い、クウガを取り囲んだ。そして一度に指からミサイルを発射する。

しかしクウガはそれも予想し既に動いていた。

「むおおおおっ！」

モーションなしでドラゴンフォームへ超変身、その跳躍力でミサイルの全弾をかわした。

当然向かい合ってミサイルを放ったシヨツカーライダー達は
同士討ちの形で果てる。

（やった……。）

安心し、やや無防備になっていたクウガの更に上空には
生き残った二体のシヨツカーライダーが攻撃の体勢に入っていた。

「!? ナニい！」

「ライダアアア キーック！」 「ライダアアア パアンチ！」

二体の攻撃は防御力に欠けるドラゴンフォームの装甲にヒビを入れ、クウガはすごい勢いで落下していく。

「グウウ・・・ふおおあ！」

それでもクウガは気力で持ち直し、ライジングドラゴンロッドをショットカーライダーの一体に投げつけた。

「ヒギイイ！」

クウガはうまく宙返りして着地し、

ショットカーライダーの残った一人は胸の装甲から

ロケットランチャーを展開させる。クウガはそれを前転で避けながら先程倒したショットカーライダーの腕の残骸を拾い上げた。

「超変身！」

ペガサスフォームに超変身してロケットランチャーを見切り、無駄な動きの一切を省いて回避しつつペガサスボウガンの標準を合わせた。

「ギアオオオオ！」

悔し紛れにショットカーサイクロンの遠隔操作でクウガを轢き殺そうとしたが

ペガサスボウガンを構えたままクウガは再び跳躍した。

ペガサスボウガンの銃口がショットカーライダーのベルトをゼロ距離で捕らえる。

「ギエエエ・・・」

急所を射抜かれたショットカーライダーは崩れ落ちた。

「・・・そちらも終わったようですね。」

見ると少し離れたところに渡、次狼、ラモン、力が佇んでいた。

雄介は変身を解いて走り寄り、サムズアップをした。

「うん。ちょっと背中やられたけど、少ししたら治ると思うよ！
えっと、それであの幹部の方は？」

「少し加減しましたが、もう何も出来ない状態です。」

「自爆装置のようなものも見あたりませんし、近付いても平気でし
よう。」

「！有り難う。」

さっさとヒルカメレオンの方へ走っていく雄介を横目に
次狼は呆れるような顔をした。

「あんな能天気な野郎がキバを上回る力を持つてるなんてまだ信じ
られん。」

「でもさっきの鬪気はすごかったよ。今はそんなの少しも感じない
けど。」

「アイツ・・・変わってる。」

「あつ、夏海ちゃん！あぶな・・・くはないか。」

雄介より先に夏海はヒルカメレオンに詰め寄っていた。

いくら動けないとはいえ自分を襲った相手に近づけるとは
大したものだと雄介は呑気にも感心する。

「お願いです、教えてください！どうすれば世界を、土君を救える
んですか！？」

「クク、ディケ・・・ドか。キサマの祖父に、デモ、聞けば・・・よ
カろう。」

「それ、どういう事ですか！？適当なこと言わないでください！」

夏海が我を忘れてヒルカメレオンを揺さぶると同時に、
一枚のカードのようなものが頬をかすめた。

「!?!?こ、今度はナニ・・・?」

「トランプフェイド。」

雄介が割って入る間もなくトランプが舞い、
気が付けば夏海もヒルカメレオンもそこにはいなかった。

「・・・！クソッ、やられた！！」

雄介は悔し紛れに近くの木に拳を打ち付けた。

渡達も慌てて駆け寄り、そして遅すぎたことに気が付いた。

「~~~~っ！」

何か言おうとしたが、声にならない。

少しの間立ち尽くしていると

ピートチェイサーからピーツと高い音が聞こえた。

雄介は苦い顔をしながらも愛車のもとへ足を運んだ。

「もしもし雄介ですけど、ヒビキさん？」

大変なんです！夏海ちゃんが・・・えっ、

俺達やデイケイドとは別の仮面ライダー？はい、はい・・・。全

員集合？」

第十話 「全仮面ライダー、集結せよ！」（後書き）

死神大使「いや〜短いな。ともあれもう十話ですよ！」

設定集除いて十話ですよ！」

士「大して大事なことでもねーのに二回も言うな。やかましいんだよ。」

雄介「え！？それは流石に酷いよ。だってこんな文章力で十話も書けたんだよ？」

死神大使「雄介エ……。」「

亜樹子「と、ところでさ！幹部が割とやられちゃってるけど!？」

死神大使「ああ、設定集に書き忘れたんですが

基本的に大シヨツカー怪人は本編と同じく雑魚。

但し幹部のみ元ネタを上回る性能を持っています。

本編でも分かるようにオリジナルのライダーが

最強フォームにならずに善戦できるってところですか。」「

翔太郎「おいおい、そんなんでいいのか？それじゃ弱い気がすんぞ。」

死神大使「オリジナルライダーが数年でそれだけ強くなってるって事ですよ。

ちなみにW組は最終回から間もないという設定なので

そこまではないです。幹部相手はエクストリームじゃな

きゃ。」

士「結局のところ最強フォームなら全員大丈夫なのか。それも問題だが……。」

俺の強さはどんくらいだ？」

死神大使「ジョーカー デイケイド。コンプリートフォームに関しては黙秘で。」「

海東「なんだかんだで全員最強フォームにならないからね。
使ったら圧倒的になっちゃうんだろっし。」

照井&ユウスケ「……………」

強化ディメンションブラストとレーザーがぶつかり合った。

徐々にカニレーザーが押され始めるが、お互いに気を緩めない。

「又ウウ・・・」

「うおおおお！」

その時、二つの光に何かが割り込み光を弾いてしまった。

「なに!?!」

「馬鹿な。何故貴様がこの世界に・・・」

必殺の銃撃がいつも簡単に破られたことに驚愕するディケイド、

カニレーザーもディケイドとは違った理由で驚きを隠せずにいた。

「ドクトルG、貴様のような石頭でも首領は大切に思っておられる。

下らんプライドなどで犬死にすることなど、許されん。

さっさと帰るぞ、首領がお待ちになっている。」

「・・・分かった。だがヨロイ元帥、次は俺の戦いの邪魔をしてくれるな。」

二人の背後にオーロラが現れた。

「おい、待てつつの!」

慌てて響鬼が追い掛けようとしたが、

彼等も残っていたレインジャー部隊もオーロラの向こうに消えていった。

「何だか変な気分だよ。これから何がなんでも逃げるつもりだった相手と」

「こうして普通に会話してるんだからさ。しかも何か増えてきたし。」

「そうだなー。俺も正直どうしようかと思ってたよ。」

「今もどうすりゃ良いか分かんないけど、多分事態は好転してると思っし。」

「そうなつたのもアイツ等が原因なんだが・・・なんか雲行き怪しそうだな。」

怪人達を退け、変身を解いたかと思えばまた口喧嘩を始めた翔太郎と亜樹子を

横目に見ながら土は独り言のように呟いた。

今のところ彼等が話したのは彼等が『Wの世界』から来たと言うこと

と、デイケイドを倒してはいけないということ、

後者の理由は全てのライダーが揃ってから話すということだけだ。

オリジナルのライダー達に理由も言わず

そんなことを説いても納得できる筈がないのだが、

成りゆきとはいえ共闘する形となった真司とヒビキが

後から来た天道と良太郎をどうにか説得し、

現在は他のオリジナルにも集合するよう呼びかけている。

「でも、それだけじゃ分かんないですよ。もう少し話を」

しかし彼等は断固として「全員が揃ってから話す」と言い張った。

「でも・・・」

「コイツ等にはコイツ等の事情がある。抑えろ、野上。」

「お、来た来た。おゝい、こっちだ雄介、渡！」
ヒビキは雄介と渡を見つけて、さも嬉しそうに手を振った。
いつもなら雄介も負けじと手を振っているところだが、
今の雄介にはそこまでの元気は見られなかった。

「アンタも仮面ライダーだったとは、な。」
士は雄介の背にいるユウスケの無事を確認するより先に
渡の顔を見て思いつ切り嫌な顔をした。

「ええ。それでイレギュラーの仮面ライダーというのは彼等のこと
ですね？」

渡は士の言葉を軽く流して翔太郎と照井を見た。

「ん、そうだ。あの帽子被ってる方が翔太郎、
赤いジャケットが竜っていうらしい。ついでにあの娘もそうだけ
？」

「えっ、そうなんですか？女の子なのに、スゴいですね。」

ヒビキは手短に翔太郎達を紹介し、亜樹子の方を向いた。

雄介は驚いたようだが、まだいつものように笑えずにぎこちない褒
め方をした。

「ちよつとそこ！ついでつて何ですか！」

「お前の変身はさっきのが最初で最後だぞ。ついでですらねーよ！」

「何よそれ！誰が決めたのよ！？」

「俺だよバーカ！」

「……」

「気にしなくていい。」

俺は照井竜、仮面ライダーアクセルだ。」

「僕は紅渡。キバです。」

「俺はこういう者です。名刺には書いてないけどクウガです。」

各々で自己紹介を済ましたところで海東が口を挟んだ。

「ところでナツメロンはどうしたんだい？君と一緒にだったはずだけど。」

ピタ、という音が聞こえそうなほど不自然に雄介と渡の表情が固まった。

夏海が攫われたということは士達には話していない。

もし話せば士が黙っていないからだ。

本来は最後に来るメンバーと一緒にだという事にしておき、

翔太郎達の話聞いた後で話すつもりだったのだが

海東が夏海と一緒にいた人物を知っているとは思っていなかった。

どうしたものか、と渡は考え出したが

「それが、何かランプで攫われちゃったんだよ……。」

雄介があっさり白状してしまった。

「何だと!？」

士が勢いよく立ち上がり、歩み寄ってきた。

「どういうことだ、詳しく聞かせろ!」

こうなつてはもう後の祭りだ。

渡は雄介を忌々しげに眺め、仕方なく説明を始めた。

「僕達は確かにそこにいる小野寺さん、そして光さんと共に行動していました。」

そこに

「クソ、大シヨツカーの奴等！」

「ああ、許せねえな……。」

「土も探偵君も落ち着けよ。」

ナツメロンが心配なのは分かるが、今僕達に出来ることは何も無い。「

「彼の言う通りだ。頭を冷やせ左。」

夏海が攫われるまでの話の一部始終を聞き、

更に荒れてきた土をなだめる海東は意外にも悔しそうな表情だ。

翔太郎もまた大シヨツカーへ怒りを募らせる。

「チ……。んで、残りのオリジナルとやらとはまだ連絡つかねえのか？」

「ああ、翔一達も戦ってんのかもな。」

「ありえますね。」

ヒビキと渡が暗い表情で言った。

雄介も不安そうな顔を隠して無理に笑っている。

「兎に角、津上君達と連絡つくまではみんな休んでおかないと。」

特に土君と大樹君は連戦だったからね。」

「それはお前等のせいでもあるんだが……。って、お前はいなかったっけ。」

「城戸、そんな顔をするな。アイツ等のことだ、心配はいらん。」

「そう……。だよな。大丈夫だ。うん、特に一真は。」

真司だけでなく雄介達も天道の自信たっぷりという言葉に少し元気づけられた。

第十一話 「〇を集める／異世界の探偵」(後書き)

死神大使「むう、時間かかった割にクオリティ低い……。」
士「ああ、そうだな。毎回ツッコミどころが多すぎて疲れんだよ。」

俺コンプリートになってもあんな扱いなのか？弱すぎる！？」

死神大使「何か本編でスペックだけで強すぎる印象があったので、
スペックが飾りな中ではこの程度だぜってところをさ。」

海東「この程度って……。それじゃ士とほぼ互角な僕も『その程度』なのかい。」

ユウスケ「んじゃ俺って……!？」

死神大使「安心してくださいそれなりには考えてあります。だから強さの話はここまで！」

剣崎「それは構わないが、最後のフラグっぽくないか……?」

巧「ああ。久し振りに出れたと思ったたらやられ役とかは勘弁してくれよ。」

死神大使「たつくんたちの三人組は好きな人が集中しているので多分無いです。」

多分、ね？」

剣崎「ウエ!? ナニイッテンダ! フジャケルナ！」

第十二話 「救世主と英雄、剣と騎士」

【EXCEED CHARGE】

「やあああ！」

ファイズはグランインパクトで稲妻怪人 エイキングを粉碎し、ゾル大佐を睨んだ。

「てめえ、あんな爺さん狙って何企んでんだ？」

「何も企んではない。私はただ裏切り者を殺しに来ただけだ。」

「裏切り者、ね・・・気に入らねえな。」

そう呼ばれて理不尽に殺された奴がいてよっ！」

走ってくるファイズを前にゾル大佐は顔を歪めた。

「聞き分けのない・・・邪魔をするなあっ！」

ゾル大佐はオーロラから仮面ライダータイガを召喚した。

タイガは手に持った白召斧デストバイザーでファイズを切り裂いた。

「君を倒して英雄になるのも悪くないかな。」

【STRIKE VENT】

「ハッ、いくら俺でもそんな滅茶苦茶な夢にや付き合えねえな。」

ファイズは立ち上がり、軽くスナップした。

「さて、栄次郎は・・・。」

「うああああ！」

ゾル大佐は栄次郎の抹殺を再開しようとしたが

今度はブレイド ジャックフォームがこちらへ飛んでくる。

「やれやれ、これだから仮面ライダーは扱にくい。」

ゾル大佐はイライラとオーロラを展開させ、そこから仮面ライダーナイトが飛び出してきた。

「ウエアツ!? つ・・・ウェイ!」

ブレイドは条件反射で飛び退き翼召剣ダークバイザーをかわした。

そして素早くナイトに接近してその黒い羽を斬りつけようとしたが、それを予想していたナイトは身を翻し、逆にブレイドに斬撃を与えた。

「うつ・・・!」

空中で体勢を整え一直線にナイトへ突進するブレイド。

ナイトもそれに応じてダークバイザーにカードを挿入した。

【SWORD VENT】

ブレイラウザーとウイングランサーが拮抗し、幾度も火花が飛び散る。

ほんの数秒、腕力のあるブレイドが優勢に戦ったが

ナイトが腰に戻したダークバイザーを再び手に取り二刀流でブレイドを襲った。

「ハアーツ!」

「ウガ!」

ブレイドが怯んだ隙にナイトがブレイドの背に馬乗りになった。

ウイングランサーでブレイドの羽をもぐ。

「うわあああ!」

通常フォームに戻ったブレイドは地面に落下していくが、それよりも先にブレイラウザーがナイトの翼を貫いた。

「イ、イイイ!」

「な・・・ダークウイング!」

翼となっていた契約モンスターが傷付きバランスを崩したナイトは

ブレイドに下から押されてあっという間に先程と逆の位置に来てしまった。

【BEAT】

「うおおお！」

すかさずライオンビートで反撃。

ウイングランサーを持つ手を攻撃されて取り落としてしまった。

「ぐあっ！」

ナイトはパンチと落下の衝撃に呻くが、ブレイドは華麗に着地しトドメに入った。

【KICK】 【MACH】

「うおお・・・ウェイッ！」

【BLAST SONIC】

「ク・・・！」

【GUARD VENT】

ブレイラウザーを地面に突き刺し、跳躍するブレイド。

ナイトはそれを防ごうとマントに身を包むがそのマントにも傷がある状態だ。

とても耐えきれないだろう。

「ウエエエエイ！」

案の定というべきか、ブレイドのキックは大爆発を起こしたのだった。

両腕にデストクローを装備してファイズに追い打ちを掛けるタイガ。しかしファイズは前転してデストクローを避け、蹴りを叩き込む。

「オラどうしたあ！この程度で英雄なんてのになろうってのか？」

「ウアア・・・君も英雄に相応しくないよ。」

やっぱりライダーなんて、最低な奴ばかりだ。」

タイガはファイズから一度距離を取り、バックルから必殺のカードを取り出した。

【FINAL VENT】

タイガの契約モンスター デストワイルダーが背後からファイズに爪を突き立て、タイガのところまで引きずっていく。

「ぐっ、コノ・・・！」

ファイズは必死でデストワイルダーを蹴りつけるがビクともしない。

タイガは勝利を確信しながらも最後の一撃の為に身構えた。

「はああ・・・！」

「舐めんな！」

【EXCEED CHARGE】

生半可な攻撃ではデストワイルダーを止められないと判断したファイズは

再びグランインパクトを発動してデストワイルダーを退けた。

「チ・・・。」

必殺技 クリスタルブレイクが失敗に終わりタイガは舌打ちするが、ファイズはデストワイルダーから受けたダメージで呻いている。

これならファイナルベントなど使わずともファイズを殺すことは十分に可能。

「君も頑張ったけど、最後には英雄が勝つんだ。」

ファイズを刺し殺そうとタイガは一步一步近付いてきた。

「そうかよ。けど俺あテメエの思ってる英雄になんのは真っ平御免だ！」

【BURST MODE】

ファイズはどう考えても怪我人とは思えない速さで起き上がり

タイガにフォンブラスターを連射した。

咄嗟にデストクロードで防御されたがそれも想定内。

顔を狙った為タイガの視界は今、自らの武器で塞がれている。

「らああっ！」

軽く助走をつけてタイガの足に滑り込みキック。

重心を下半身を乗せていたタイガは普通より僅かに起きあがるのが遅れる。

その隙を狙ってもう一度グランインパクトを放とうとしたが・・・

(ん？ありゃあ・・・)

ファイズの、もとい巧のオルフェノクとしての五感が落下してくるウイングランサーに気付いた。

常人ならば気付かず怪我、最悪の場合間の抜けた死を迎えていたことだろう。

ファイズはそれを楽々キャッチした。

(何だか知らねえがありがてえ、使わせてもらうか。)
ズシリとして重い剣を振り上げ、タイガを斬りつけた。

火花が飛び、タイガは両膝をつく。

その全身はまるで蒸発するかのようになっていた。

「アア・・・英雄に、なれてたらみんな・・・ボクを好きになっ
てくれたのかな？」

「さあな。ただよ、英雄つてのは俺やお前みたいな奴じゃねえつて
こった。」

「ハーツ！」

マシントルネイダーの体当たり ドラゴン・ブレスの連発で
怪人達を撃破していくが、

遠距離戦が不得意なアギトは徐々に追いつめられていく。
しかも栄次郎を庇いながらの戦いで思うように動けない。

やがて怪人達も距離を置いて攻撃を仕掛け始め、

アギトは栄次郎の周りをせわしなく飛び回るばかりだ。

（てつきり俺達を誘き寄せる為にこの人を襲ったんだと思ってたけど、

コイツ等どう考えてもこの人を狙ってる・・・！）

「ちよつと、どいてくれるかい。」

「え？わっ！？」

不意に栄次郎が前へ出た。慌てて止めようとするアギトを無視して
両手を挙げる。

隕石が再び怪人軍団を襲う。 対抗策であったドクガンダーもいない
今、

怪人達は成す術なく逃げ惑う。

（何ツか分かんないけど、チャンス！）

隕石に集中していて隙だらけの怪人達を一掃すべく、

アギトはベルトの左側にあるスイッチを押してストームフォームへ
チェンジした。

ストームハルバードをベルトから取り出し、振り回して突風を起こ
す。

「ハアアーツ！」

ストームハルバードが舞の様に弧を描き怪人達を切り裂いた。

不可解なことにアギトの方へは隕石がまったく降らず、

怪人達を倒してもアギトは怪訝そうである。

「えっと、今のは貴方がやったんですか？」

「ああ、そうだよ。凄いだろ？」

「はい！なんか、ズドンって！」

「見事だ栄次郎、そしてオリジナルの仮面ライダー共。

だが貴様とディケイドの命は必ず貰い受ける！」

ゾル大佐は鳴滝の姿に戻り、オーロラへと消えていった。

第十二話 「救世主と英雄、剣と騎士」（後書き）

死神大使「うーん、活躍させるつもりが特に見せ場なかったな翔一さん。」

士「アギトは直接攻撃しかないもんな。」

翔一「ですねえ。でもホントに光さんがいてくれて助かりましたよ！」

真司「別人だとは思っけどさ、蓮を殺さないでくれよ……。」

死神大使「確かに鳴滝が出てくるライダーは本物っぽいので

殺して良いのか迷いましたがリュウガは確実にやられてたので。

ナイト及びタイガファンの皆様申し訳ありません。」

翔太郎「ともあれこれで今出てる全仮面ライダーが大体見せ場作れたし、

いよいよ俺たちの説明が入るか？」

剣崎「そうだな。いい加減話を進めろ、テンポが悪すぎるぞ。」

死神博士「はい！投稿遅くなってきたけど頑張ります！」

海東「志望校判定がマジでやばい君にできるのかい、作者？」

ヒビキ「言っつてやるなよ……。」

第十三話 「地球の本柵での依頼」

大シヨツカー本拠地

「地獄大使の解毒を急げー！」

「ブラツク將軍のスペアパーツ残ってるか!？」

「ドクトルGの盾復元しとけ。」

幹部三人を始め大きな痛手を負った大シヨツカーは
(主に科学陣が)てんてこ舞いな状況にあった。

「やられた怪人達は再生しますか？」

「役立たずの再生など必要ない。」

本来なら奴等にもそう言っただけやりたいが・・・首領の御命令だ。」

「イーッ！」

ヨロイ元帥はモニター越しに傷付いた幹部達を眺めた。

結果的に大シヨツカーが得られたのは夏海のみ、

その唯一の利益すら地獄大使達の手柄ではなかった。

こんな弱者共を治してやるなど時間の無駄に思えてならない。

首領は何を考えているのか。

そんなことを考えていると、ドクトルGの治療室に一人の男が入ってきた。

「ム、奴は・・・。」

「貴様！許可もなく入ってくるな！」

「構わん、通せ。」

タイハウバッファローが男の前に立つが、ドクトルGがそれを制した。

「ザマア無いな、俺達を連れて行かないからだ。」

「フン、貴様を連れて行けば確実に犠牲が増えたわ。」

貴様に殺されて、な。」

入って来るなり文句を言い出したレインジャー第三部隊隊長

ゴ・バダー・バ（人間態）に憎まれ口で返し、ドクトルGは起き上がった。

「何の用だ。生憎貴様の愚痴の聞き手になる気はないのだが。」

「よく言うなア。立つのも辛いくらいやられてるクセに。」

バダーはコインを手で弄び始めた。

「次は俺の出番らしい。ゴラゲパゴドバギブベデバ（お前は大人しく寝てな）。」

怪人態に変化して治療室を後にした。

「津上さん、あの軍服と眼帯の奴には逃げられたみたいです。」

「ん〜、仕方ないかな。あの数だし。」

変身を解いた翔一達は辺りを見回すが、何の気配もない。

「で、この爺さんどうすんだ？狙われてるらしいけど、ってワリイ。」

言葉の途中で携帯が鳴ったので巧はファイズフォンを開いた。

「ん、天道。戦ってたんだよ仕方ねえだろ。あゝ？集合なあ？」

電話を切った巧は何やらムスツとした表情で翔一達の方を向いた。

「天道君、何だって？」

「全員集合、だとさ。ったく何考えてんだ。」

「確かに不可解だけど、行ってみましよう。貴方はどうするんです？」

剣崎は不意に栄次郎へ話を振ると、

「ああ、行かせて貰うよ。いい加減、本当のことを話してやらないと。」

即答だった。

「「・・・？」」

「あ、じゃ俺のバイク乗ってください。

スピード出すんでしっかり捕まってくださいよ？」

巧と剣崎は栄次郎の言う『本当のこと』に反応するが、翔一は笑顔で言った。

「さあ集まったぜ、さっさと話せ。こっちはイライラしてんだ。」

「待て！ディケイドがいるというのに、何故みんな倒そうとしない！？」

集まった面々を見て早速土が切り出すが、剣崎が突っ掛かった。

「剣崎の言う通りだな。コイツ等が何モンだろうが」

「ディケイドを倒しや手っ取り早く世界を元に戻せんだろ？」

「そいつは違えよ。ディケイドを倒したって世界は救えねえ。」
巧に対し断言する翔太郎。

「え？それ・・・本当なんですか？」

「マジかよ！」

「何？どういう事だ。」

「なんだって、それは本当かい？」

各々に反応を示すライダー達に照井は落ち着いて答えた。

「事の始まりは、『地球の本棚』だ。」

「『地球の本棚』・・・？」

「ああ。『地球の本棚』、左の相棒だけがそこにアクセスでき、地球中の記憶が本として集まっているデータベースだ。」

「つつてもあくまで俺達の世界の地球のみ、だけだな。」

翔太郎が補足する。

「何か凄そうだけど、その本棚とどう関係してるんだ？」

「もつともな疑問だ。確かに『地球の本棚』と世界の融合に直接的な関係は無い。」

「だがある時相棒は、自分の意思とは関係なく『地球の本棚』にアクセスした。」

「・・・こつからはアンタが説明した方が早いんじゃないか？」

翔太郎の視線の先にいるのは、栄次郎だった。

Wの世界 地球の本棚

「ここは・・・『地球の本棚』、なのか？」

これまで何度も来た場所であるにも関わらず、フィリップは確信が持てなかった。

自分の意思でアクセスしていない上に、

目の前にはキーワードを入力していないにも関わらず本が数冊しかない。

「・・・？」

フィリップは取り敢えず一冊の本を手を取ってみた。

表紙には『BIG SHOCKER』と書かれている。

他は『DECADE』、『DIEND』、『RE-IMAGINATION』等だ。

その本を開く前に人の気配を感じてフィリップは身構えた。

「やあ、君が園崎来人君だね？私は光荣次郎。君達に頼みがあるんだ。」

「僕達に？君は一体何者なんだ。」

いかにも疑わしいという表情を見せるフィリップに

栄次郎はにこやかだった表情を真剣なものに変えた。

「今、十の世界が融合を始めていてね、この世界もそれに引き寄せられつつある。」

このままでは全ての世界が融合し、そして破壊されてしまう。

世界の為に、君達仮面ライダーの力が必要なんだよ。」

「・・・それは大変な事だけれど、にわかには信じがたい。」

賣めて僕の質問に答えてくれ。君は、何者だい？」

「私は、こことは別の世界の『地球の本棚』にアクセスできるんだ。世界が引き寄せられている今の状況だからここそこに来ることができる、でき、

君を呼ぶことが出来た。その本は私の世界の本だがここに置いていくよ。

それを読めば君の知りたいこと、それに君達のすべき事は分かるさ。」

その言葉通り、本を残して栄次郎はオーロラへと消えた。

「待つ……。しかし世界の融合と破壊、か。」

これは我が探偵事務所が始まって以来の大仕事かもね。」

フィリップは『BIG SHOCKER』の本を読み始めた。

Wの世界 鳴海探偵事務所

「……フィリップ？」

「！ 翔太郎、依頼だ！」

フィリップは心配そうに呼びかけてくる相棒を軽く無視して言い放ったかと思うと

ありったけのメモリガジェットを持って外へと歩いていく。

そんな調子のフィリップに困惑しつつも翔太郎はフィリップの後に

続いた。

「あ？依頼？」

「そうなんだ翔太郎。僕は一刻も早くやらなければならぬ事があるから」

君は照井竜と一緒に異世界へ行ってくれ！彼が送ってくれるだろう。」

「いや異世界ってお前、それに彼って誰だよ。」

「依頼人さ。僕はもう行くよ。」

「お、おい！？」

フィリップは慌てる翔太郎をまたも受け流してハードボイルダーに跨り、

ヘルメットを被って走り出した。

「まったく、フィリップの野郎訳分かんねえ事言いやがって……。」
取り残された翔太郎はブツブツと言いながらどうしたものか考えた。
相棒の暴走に振り回されるのは今に始まったことではないが、
流石に『異世界へ行け』と言われれば戸惑ってしまう。

「翔太郎君、たっだいまー！」 「左、邪魔するぞ。」

「おお 亜樹子。照井も一緒か。」

見計らったようなタイミングで亜樹子と照井が事務所にやって来た。

「少し近くまで来たものでな。フィリップはいないのか？」

「ああ、それがよお」

「働いてくれているよ。世界を救う為にね。」

翔太郎は『異世界がどうか言って行っちゃった。』と言おうとしたのだが、

それを遮って照井と翔太郎の間に栄次郎が現れた。

「!?アンタは……。」

(コイツ、一体どこから……)

「今回の依頼人だよ。来人君から聞いてないかい？」

眉をひそめ、亜樹子を後ろに下がらせる二人を見て

栄次郎は参ったなあと言わんばかりの顔をした。

「貴様、どこから入って来た。まさかドーパントか？」

「いやあ違う違う。私はね、世界と、土君を救って欲しくて来たんだよ。」

そんなことを言っても二人の不信感は強まるばかりだが、栄次郎は気にせず続けた。

「この世界を含むいくつもの世界が融合を始めていて、

その各世界には君達以外の仮面ライダーがいる。

ライダー達はディケイド、土君を倒せば

世界の融合を食い止められるものだと言っている。

まずはその誤解を解いて、彼等と共に世界の融合の真の元凶、大シヨッカーと戦ってくれ。それが私の依頼だ。」

「何それ、アタシ全然頭が着いていかない……。」

亜樹子は話のスケールの大きさに混乱した。

「……話は一応分かった。けど信用できねえな。」

仮にそれが本当だとして、アンター一体何モンだ？何でそこまで知ってんだよ。」

「うーん、教えてあげても良いんだけど、

来人君が君に言わなかったという事は何か意味があるんじゃないかな？」

翔太郎は少し考えた。確かにフィリップは物事を冷静に考えて適切な行動を取ることもある。

しかし、目の前の事に捕らわれて後先を考えないこともあるのだ。今回は、どうなのだろう？考えても、答えは出そうにない。フィリップについて分かるのは

栄次郎の依頼で何かをしていると言っただけだ。

遂に翔太郎は観念したように言った。

「チツ、分かった。アンタの依頼を受ける。」

「良いのか左、こんな奴を信用して？」

「俺はこの爺さんを信じた訳じゃねえ。

けど相棒がこの依頼を受けちまったんだ、俺が拒否する訳にやいかねえだろ。」

「・・・それは有り難う。あ、そうそう。異世界に行く以上来人君との通信は

出来なくなるからロストドライバーを使うと良いよ。」

言葉と共に灰色のオーロラが現れ翔太郎は素直にロストドライバーを、

照井はアクセルドライバーを取り出した。

【JOKER!】

【ACCEL!】

「変身!」「

【JOKER!】

【ACCEL!】

「さて・・・異世界とやらでも、いつちよ暴れてやるか!」

「あ、待って!ちょっとだけ準備するから。」

「所長も行くのか?」

「もっちろん!」

亜樹子はそそくさと事務所の外へ出ていった。

このとき亜樹子がロストドライバーとスカルメモリを取りに行つて

いたことは
後で知る事になる。

第十三話 「地球の本棚での依頼」(後書き)

死神大使「ういゝ、グロンギ語面倒臭いな。」

士「んな事はどうでもいい。
引つ張つてた翔太郎の説明、色々と解決できてないことがあるぞ。」

死神大使「まあ、確かに……。という訳で次回も説明が入ります。」

ユウスケ「俺は……。まだなのか……。」

死神大使「ギクツ!? すいません、本当は

ヨロイ元帥じゃなくてバダーが乱入してきて第二ラウンド突入、

ユウスケ起きる、ユウスケVSバダーとなる予定だったんですが、

バトルパートが長引きすぎたのでもう帰っていたらこう、
という事になったんです。」

巧「相変わらず行き当たりばったりだな。」

死神大使「ハハ……。ヤッベ、ユウスケいつ起こそう?」

第十四話 「死神の過去」

「・・・正直期待していましたが、時間の無駄だったようです。」

「ああ。そんな話、何の根拠も無い。」

渡は思ったままの事を口にし、剣崎もそれに同意する。

「まあそうだけどよ、その根拠をこれから話してくれるんじゃないのかい？」

ヒビキは二人をなだめて栄次郎に尋ねた。

「・・・そうだね。私は話さなくちゃいけない。」

大シヨツカーのしてきた事と、これからしようとしている事を。「顔を落とす栄次郎を誰もが見つめる中、士だけは睨むような視線を送っていた。」

「まず最初に言っておくべきなのは・・・」

私は元大シヨツカーの幹部 死神博士だと言う事だろうね。」

「何・・・!？」

一同が驚く中、士だけは合点のいったような顔をした。

「成る程な。考えてみりゃ俺達の旅はアンタが背景ロールを下ろしてクウガの世界へ行った事から始まった。アンタは何も知らないよ。うな顔して、」

実は一番世界の事を分かってたって訳だ。」

士の指摘に栄次郎はほうと溜息をついた。

「流石だね、士君。私は首領から作られたその時から、」

大シヨツカーの目的に貢献してきた。

数々のリ・イマジネーションの怪人達に強化改造を施して

オリジナル以上の力を持たせてみたりとか、ね。」

「リ・イマジネーションが、オリジナル以上の力を!？」

「ああそうさ。そして私は遂に首領の力による世界の融合を提案し、その実験の第一段階として複数の世界の技術を一体の怪人に使う事に成功した。」

「それが十面鬼ユム・キミル。

彼が作られた当初とは大きく異なる存在となってしまったけど、私はこの技術を応用し、デイエンドとデイケイドを作り出した。」
「ではデイケイドは世界の融合の原理を使用しただけで、世界の融合を始めさせた原因ではない、と言う事ですか？」

渡が尋ねると、栄次郎は苦笑した。

「確かに世界の融合が始まったそもそもその原因は首領にあるよ。だけど、デイケイドが誕生するまでは

ある程度のところで収まっていた世界の融合が再び始まった。デイケイドライバーに搭載した力に首領の力が更に誘引されるんだ。」

「んじゃあやつぱり・・・デイケイドを倒さないと、

世界は救えないんすか？」

絶望的な現実を前に真司は消え入りそうな声で言った。

「いや、もとはと言えば首領の力で始まった事だ。

デイケイドライバーが誘引する首領の力その物を無くしてしまえば、

つまり首領を倒せば、世界の融合は、止められる。」

「うおお。そうすか、そツスか！」

真司は喜びのあまり大声を出した。

しかし、他のオリジナルはその事実には喜べずにいた。

「・・・駄目だ、時間がない！」

「えっー真ア!?!」

「変身!」

【TURN UP】

剣崎が突然変身した。

「もう世界が完全に融合しかかっている。既に消えてしまった世界だつてある!」

「なのにこれから大シヨツカーの首領を倒すなんて、間に合わない・
・・!」

ブレイラウザーを手に取るブレイドを、誰も止めなかった。
止める事など、出来なかった。

剣崎の言う通り時間がない。

ブレイド、キバ、響鬼の世界は消滅し、大シヨツカーの本拠地も場所どころか

この世界にあるのかも分からない。

たとえ分かったとしてもオリジナル以上の怪人軍団を持つ大シヨツカーの首領を

そう簡単に倒せるはずもない。

そう結論するのは当然の事と言えるだろう。

士も同じ結論に至り、ブレイドのラウザーを避けようとも、
デイケイドに変身しようともしなかった。

「待つんだ剣崎君!世界の消滅の決定打になるのは」

「・・・ウエエイツ!」

栄次郎の説得など聞いていない。

ブレイドはブレイラウザーを勢い良く振り下ろした。

“止める剣崎！”

士の目の前で、火花が飛んだ。

上を見ると小さなオーロラが出現していて、

そこから出た刃がブレイラウザーと拮抗している。

刃は柄の部分も、まして持ち主が見える事もなかったが、その刃に士は見覚えがあった。

「そんな、お前まさか・・・！」

ブレイドはうろたえた。震えながら後退し、変身を解く。

オーロラが大きくなり、刃の持ち主のシルエットが浮かんできた。

「久し振りだな・・・剣崎。」

【SPIRIT】

「は・・・始・・・っ!？」

「お前、何で・・・!？」

「当然だろう、世界を救う為だ。」

と言っても、リ・イマジネーション世界とやらは救えなかったが。

「
淡々とした物言いだ、始と呼ばれた男の言葉からは無念が感じて
取れる。」

「そういう事を言ってるんじゃない！俺とお前が会ってしまえば！」

「この世界に統制者はいない。」

「でも！」

「?」
異様なまでに冷静さを失った剣崎に士は呆然としていた。
士にとつての剣崎一真はもつと冷酷で無感情な男だ。
しかし目の前にいる剣崎はまるで何かに怯えるように始を拒絶して
いる。

「剣崎、お前のしてくれた事には感謝している。」

「だがたとえあの時お前に封印されようとも、俺はお前の友であり
続けたかった。」

「始……。」

「統制者のいないこの世界なら、

俺達はジョーカーじゃなく『仮面ライダー』として戦える筈だ。

だから責めてこの戦いが終わるまでは、またお前の友として共に
戦わせてくれ。」

始は重みのある声で懇願した。

剣崎は呆けたが、次の瞬間には士やオリジナルが見た事のない満面
の笑顔になった。

「ああ、俺からもよろしく頼む。俺と一緒に戦ってくれ!」

(ジョーカー……やっぱあの刃はカリスアローか。しかし、『俺
達』だと?)

一方で士は『ブレイドの世界』のジョーカーアンデッドのこともあ
り、

二人への不信感を募らせていた。

(どういう事だ?ジョーカーが複数いるはずはないんだが……。)

「え〜っと、もういいですか？」

突然能天気な声が聞こえてきた。

「ああ。構わん。」

それに対し普通に返事をする始。

見るとそこにはまだオーロラがあり、人影が映っていた。

「君、それ以上目立とうとするのは止めなさい。」

「名護さん!？」

「俺達もいるツス!」

「トドロキさん、あんまり喜ばしい事じゃないんですよ・・・?」

オーロラから名護啓介、イブキ、トドロキが現れた。

渡とヒビキが急いで駆け寄る。

「お前等、リ・イマジネーション世界が壊れちまって

やる事ねーからここに来たのか。」

「ええ・・・残念ですが、僕達では止め切れませんでした。」

リ・イマジネーション世界の修復を任されていた彼等は顔を落とした。

「過ぎた事をどうこう言っても仕方ありません。ところで名護さん、兄さんは?」

「ああ、彼ならば一度私たちの世界に戻った。

『取りに行く物がある』と言っていたな。」

「取りに行く物?こんな時に言うんだからよっぽどのモンなんだろうな。」

話の途中で巧が割って入る。

「何を取りに言ったかまでは聞いていないが、心配はいらない。」

彼にも何か考えがあるんだろう。」

「おい、デイケイドの話がまだ終わっていないぞ。」

相川始、お前の事は剣崎から聞いていたが、何故剣崎を止めた。絶対に避けられない話を天道が切り出すと、始は眉にしわを寄せた。

「デイケイドは殺すべきじゃないから止めた。それ以外にあるか？」

「ちよつと相川さん！」

喧嘩腰な始をイブキが慌ててフォローした。

「ブレイド、響鬼、キバの世界が破壊されたからこそ分かった事ですが、

それぞれの世界の修復は順調だったんです。

でもこの世界でイクサやレンゲルが倒された途端、

急に『滅び』が加速して結果的には消滅した。」

「裏を返しゃこの世界でライダーが倒されなきゃ、

残ったり・イマジネーション世界とその他の世界を救う余裕は

十分にあると思うんす。」

「じゃあやつぱり、首領さえ倒せば！」

「ああ。世界の融合は止められるはずだ。デイケイドを殺す必要もない。」

「！ そつか・・・ありがとな、始！」

今度こそ、オリジナルの全員が歓喜の声を挙げた。

大シヨツカーの首領さえ倒せば、デイケイド＝土を倒さずとも今残っている全ての世界を救える。

仕組みはややししいが、これほどシンプルな事はない。

「やれやれ。随分ヒヤヒヤさせてくれたけど、上手く事が運びそう

だね。」

「・・・話はこれで最後だ。お前は何故大シヨツカーを裏切った？」
微笑む栄次郎にまたしても天道が言った。

「きっかけは、ただの気まぐれだったよ。

幹部も、所詮は首領の力によつて生み出されたり・イメージシヨンに過ぎない。

首領の信頼も、私の功績ではなくオリジナルとなった男の性格に基づいた物だったんだ。

私はオリジナルの私とまるっきり同じなのが嫌になった。それだけさ。」

「・・・それだけの理由で、大シヨツカーを裏切ったんですか？」
良太郎は信じられない、と言いたげだった。

いくら幹部とて、大シヨツカーはそれだけの動機で裏切れるような組織ではない。

その事は内部の者が一番よく分かっているはず。

「自分で言うのも何だが私は、変わり種だったと思うよ。

それだけの動機で裏切る計画をかなり綿密に、時間をかけて練った。

そして予定では大シヨツカーを潰し、新たな首領となる筈だったがアジトから逃げる途中、私は見てしまったんだ。ディケイドの試運転の為

リ・イメージンション世界が作られて行く様をね。」

「アレは凄かった。私はてっきり首領に出来るのは個々のリ・イメージンションの創造と

そこにある世界を引き寄せるだけだと思っていた。

だがまさか、リ・イメージンションとはいえ世界を作り出すなんて・・・。」

「敗北感と恐怖に襲われた私は責めて少しでも困らせてやるとうい
う気しか

起こらなかつた。たまたま拉致されていた女の子を攫っていった。

「その女の子つてのが、ナツミカンか？」

「ああ。それからはいつ首領が襲って来るやらと震えながらも、
平和に暮らしていた。そんな人生も悪くないと思ひ始めていたけ
ど、

運命とは皮肉なものだ。私が開発したディケイドの適合者が
私の前に現れるとは……。」

「私はもう逃げる事は叶わないと悟つた。

『喉元過ぎれば』というヤツかもしれないね。

私は君の側で、大シヨツカーの野望を阻止しようと思った。

……とまあ、こんなところさ。私の罪滅ぼしの始まりは。」

栄次郎の話を、全員黙りこくって聞いた。

大シヨツカー本拠地

「ジヨーカー、か。」

ジエネラル・シャドウはトランプ占いの結果にフム、と呟くと
何やら考え事を始めた。

「まあ良い。こちらも奴等を迎え撃つ準備は十分に出来ている。
礫にされた夏海をチラリと横目に見ると、その場を去っていった。」

第十四話 「死神の過去」(後書き)

死神大使「ああ、疲れた。バトルパートの方がむしろ電子音で行稼げたかも。」

海東「おいおい、そういう裏事情はあまり言わない方が賢明だよ。」
士「コイツには常識が通用しないからな。なにせ期末テストが×日後に迫ってる中平気で駄文書いてんだ。」

死神大使「いやそりゃ、読者様方が待つておりまして・・・。」
士「そういうのを現実逃避って言うんだ。」

大体その読者様が短いつてご意見を下さったつてのに大して変わつてねえじゃねえか。」

死神大使「グウ・・・と、ところでジエネラル・シャドウと手塚つてどっちの占いの方が当たるんですかね？」

天道(話をすりかえた、か・・・)

始「俺が言うのも何だがサブライダーまで出てきて收拾付くのか？」
イブキ「そうですね。特に僕達響鬼勢の事はあんまり覚えてないつて言つてたのに。」

死神大使「まあサブライダーをリイマジの修復にあててるつて設定なんで、

消滅しちゃった世界担当の人達は出てきて良いかな」と。

良太郎「・・・それだけの理由で、サブライダー出したんですか？」
信じられないと言いたげ(ry)

死神大使「あとは始がムツコロとかロリコンとか言われて不憫だな

と思つたのもきっかけですね。」

始「同情から登場させたというのか・・・クサムラムツコロス！」

第十五話 「驚異のライダー」

「まだ僕達に時間が残されているのなら、やるべき事は一つです。」

「俺達全員で・・・大シヨツカーを潰す。」

戦士達は決意を新たに立ち上がる。

「栄次郎、だつたな。お前の事だ、

大シヨツカーのアジトの場所・・・具体的に分からなくとも、

ある程度の見当は付いているんじゃないか？」

始は静かに尋ねた。

「うん、十中八九この世界にある。

ただこの世界は広くはないけど、

私に見つけられないようカモフラージュや

大規模な移動をしているであろう事は確かだね。」

「ほえ、また地道に探さなきゃって事かあ。」

真司は溜息を吐いた。

「いや、その事も想定してアジトの位置は割り出してあるよ。

何せ私は大シヨツカーの天才と呼ばれた男なんだからねえ。」

「分かっているなら言わなくて良かっただろ！」

もったいつける栄次郎に土がイライラと言った。

「まあまあ土君。

それと大シヨツカーと戦うならこんなのがあった方が便利でしょ？」

栄次郎はハハハと笑いながらオーロラを出現させた。

するとそこからマシンディケイダー、ディケイドの愛車が出てくる。

「置いてきてたマシンディケイダーか、ありがとな。」

「他にもあるよ。」

続けて二台のバイクが現れる。

「あれ、おおっ凱火だ。」

ヒビキは愛車を見つけて笑みをこぼした。

真司も愛車には駆け寄ったが、大型バイクばかりの周りに対し自分だけがスクーターである事に気付いてガツクリとうなだれた。

「これで準備も整った事ですし、そろそろ行きましようか。」
真司の様子に気付いているのかいないのか、翔一は明るく呼びかけた。

「ああ。爺さんアンタは俺と乗れ。」

「おいおい、この人には場所だけ教えて貰うつてもアリだぜ？」
士は命令口調で栄次郎に自分の後ろに乗るよう言うが、
翔太郎は遠回しにそれを止めた。

いくら元幹部でも危険である事は勿論、
かつて仲間であった大シヨツカーと戦わせるのは忍びないと感じたからだ。

しかし

「いや、私も行くさ。私は、義理ではあるけど夏海の祖父だ。

これ以上大シヨツカーから逃げるつもりはないよ。」

「・・・そうか、ならさつさと案内しろ。」

どうやら栄次郎の意志は固いようだ。

無理に言い聞かせても無駄だと悟り、士は短く言った。

バイクを持っていない亜樹子はディアブロッサ、

「竜君、アタシはバイクないから後ろ乗せてね。」

「ああ、分かった。しっかり捕まっているんだぞ。」

妙に浮ついた雰囲気の中、亜樹子と照井。

翔太郎はシャドーチェイサー、

「俺だつてハードボイルダーをフィリップに持つてかれてだな……」
「なら俺の後ろに乗れ、それから……名前はもう少し考えてつけろ。」

始の言葉に少なからずショックを受ける翔太郎。

巧はブルースペイダー、

「乾さんは俺のバイクで良いですか？」

「おう、頼むぜ。」

始とまた会えて嬉しいのか人が変わったような剣崎といつも通り無愛想な巧。

気絶しているユウスケはビートチェイサー2000 ではなく、

「小野寺君は俺が乗せてくよ。」

「いや、それは僕がやる。」

君じゃナツメロン一人も守れないと分かったからね。」

「っ……！そう、だね。」

海東が運転するトライチェイサー2000に乗る事になった。

懐かしいトライチェイサー2000に跨る海東にそれ以上の事は言えなかった。

雄介は屈辱的というより凶星を指されたといった感じだった。

大シヨツカー本拠地

「！首領、ライダー共がこちらに突っ込んできます！」

モニターから外を監視していた戦闘員は

向かってくるバイクを見て、慌てて報告した。

「やはりこの程度で栄次郎を欺く事はできんか……。」

ヨロイ元帥、まだ終わりそうもないのか？」

「ははっ、今しばらくお待ちを。」

「……ライダーと栄次郎を早急に残滅しろ。これ以上の失態は許さん。」

仮面ライダー達

大シヨツカーアジトのすぐ前を走るライダー達だが、
彼等にはその姿が見えない。

「本当にこんなところにアジトがあるのかい？」

「何もないように見えるけど。」

「大シヨツカーのカモフラージュだよ。でもこうすれば……」
海東の問いに栄次郎は隕石を降らせる事で答えた。

隕石が見えない何かに当たり、突然目の前に巨大な城が出現した。

「ほう、こつも堂々と城を建てて待ち構えているとはな。」

「俺達やまず城攻めしなきゃなんねえ訳か。」

大シヨツカー城を見上げる天道とヒビキ。

「上等だ。あの馬鹿デカイ城、攻め落としてやる。」

士はハンドルを握る手に力を入れた。

「・・・お出ました。」

照井は不意に呟いた。

「ラデデギダゾ（待っていたぞ）、カメンライダー（仮面ライダー）。

ゴゼパキヨグギンサギザザ（俺は驚異のライダー）、

ゴ・バダー・バザ（ゴ・バダー・バだ）！」

ゴ・バダー・バを先頭に現れたのは、またもバイクに乗った怪人軍団だった。

「同じ戦法って事か？学習しねえ奴等だぜ！」

翔太郎が意気込むが、栄次郎は気をつけて、と声をかけた。

「彼等はレインジャー第三部隊という事になっているけど、

実質統率なんてまるでされていない。個々で強いから、結構厄介だよ。」

【ACCEL!】【SKULL!】【JOKER!】【KAMEN RIDE...】

【I・X・A READ・D・Y】 「ガブッ！」【STANDING BY】

『変身！』

【ACCEL!!】【SKULL!!】【JOKER!!】

【CHANGE】【DIEND!!】

【HENSHIN】【FI・S・T】【Z・O・N】【SWORD

FORM】【COMPLETE】【TURN UP】

【KAMEN RIDE DECADE!!】

アクセル、スカル、アギト、ジョーカー、カリス、響鬼、ディエンド、クウガ、

カブト、イクサ、キバ、電王、威吹鬼、轟鬼、ファイズ、ブレイド、ディケイド。

総勢十七人もの仮面ライダーがバイクの上で変身を遂げた。

その勇姿には第三部隊の怪人すら一瞬恐怖するほどの威圧感がある。

「ゴロギソギ（面白い）、ゾギツバサボソギデジャソグバ（どいつから殺してやるうか）」

バダーはバギブソンでまっすぐに走った。

怪人達もその爆音で我に返り、自らのバイクを走らせる。

「！」

バダーはディエンドに突っ込んできた。

「ラスザゴラゲバサボソグ（まずはお前から殺す）！」

「ジャセスロボバサジャデデリバジヨ（やれるものならやってみなよ）。」

ディエンドは銃撃で迎え撃つが、バダーのスピードはまったく落ちない。

むしろどんどん速くなってきている。

「ゴボデギゾバ（その程度か）！」

「チイ・・・」

銃撃では止められないと判断しトライチェイサー2000に加速をつけた。

「海東君駄目だ！」

ただ一人、バダーの恐ろしさを未確認生命体第41号として知っているクウガは呼び止めるが聞いていない。

「うおおっ！」

呆気ない、という言葉が相応しいだろう。

それほど見事にトライチェイサー2000はバギブソンに吹っ飛ばされた。

「グア！」

「海東君・・・むうおお！」

ビートチェイサー2000が割って入りどうにか追撃を免れた。横向きに突っ込んだビートチェイサー2000はバギブソンより不利な体勢にある筈なのだが、クウガはバダーにひけを取らずに戦っている。

その事実がデイエンドを驚愕させた。

「クツ、やはりオリジナルには敵わない、か。」

そう悪態混じりに吐き捨てたその時、

「うつ……」

「小野寺君、気が付いたのかい!？」

吹っ飛んだ衝撃で小野寺ユウスケが目覚めました。

「おわっ!? 何この状況!?!と、とにかく変身!」

怪人とライダーだらけの状況に驚きつつも、いつもの変身ポーズを取る。が、

「べ、ベルトが出ない……?なんでだよ!?!おい!」

目が覚めると怪人に囲まれ、しかもベルトが腹から出てこないという異常事態にユウスケはたちまちパニック状態へ陥った。

「あゝ、順を追って説明すると君はあの……」

「あれ?クウガ!? チクショー偽物だな!俺が変身できないのを良い事に!」

「ちよつ、待つんだ!」

見かねたデイエンドが雄介クウガを指差したが、これが仇となった。自分以外のクウガの存在を知らないユウスケは憤慨し、トライチェイサー2000でクウガに突進したのだ。

その頃

「くっそ、置いてかれちゃった……。」「
真司は決意した。

帰ったらバイクの免許取ろつと。

第十五話 「驚異のライダー」（後書き）

死神大使「やっと・・・ユウスケ復活！」

ユウスケ「このまま連れ回されるだけで終わるかと思ったよ。」

士「この作者、いざとなったらそれでも良いかもとか考えてたらしいぜ。」

ユウスケ「・・・ハア？」

死神大使「い、イヤ んな事ないって！何を証拠にそんな」

士「作者が『雄介いればユウスケなんている意味なくね？』とか

呟いてるのをハッキリ聞いた。」

ユウスケ「キツサマア・・・！」

死神大使「ヒイツ、は、放せ！俺は作者だぞ！」

名護「私のセリフを真似るのは止めなさい！」

ドゴツ！バキツ！ゴ（略）

鳴滝「作者まで破壊されてしまった・・・。

おのれデイケイドオオオオツ！」

剣崎「ウエツ！？ナズエイルンデイス！？」

重大なお知らせ

塾の先生にやる気無いのがバレてパソコンやその他が禁止になってしまいました。

(実はコレも親が寝た隙に書いています。)
投稿はおろかオースを見る事すらままならない状態になります。
しかも期間は受験終了、つまり三月まで。

大変申し訳ありません！

できれば空き時間に続き考えて
投稿できるようになった時出しまくろうと思います。

では僕はこれから先生と親による監禁生活に戻ります。

三月からはまた、世界の破壊者VS世界を救った男達をよろしくです！

どうか見放さないください！

第十六話 「戦う理由」

「ワウウウウッ!」

「カテゴリージャック!」

一方ブレイドはブラックファンクを駆るウルファンデッドを発見した。

「クッ……。」

「? あのゴツい奴とやんのか?」

すぐさまウルファンデッドの方へ向かおうとするブレイドにファイズは疑問を持った。

「はい。アイツは俺がやります。」

自分一人で倒す、ブレイドがそう言っていると悟ってファイズは不機嫌に言った。

「じゃ俺は突っ立ってるってのかよ。」

「その方が、良いんじゃないですか?」

「……うるせえよ。」

ファイズは感覚が無くなりかけた右手でスナップした。

「又ウホオオオ！」

「ぐっ！」

原始タイガーはカブトに不意打ちで火炎を吐いた。だがカブトはマスクドフォームの防御力で炎を耐えきり、カブトクナイガンの銃撃を贈り込む。

「又ボオオア！」

原始タイガーは怒りの雄叫びを挙げ、バイクで突進攻撃を仕掛けた。「やかましい奴だ・・・キャストオフ。」

【CAST OFF!】

カブトは原始タイガーの巨大な牙を武装したバイクに対抗すべく、ライダーフォームになると同時にカブトエクステンダーをエクスマードへ変形させた。

普段装甲の中に使われているカブトムシの角を模した

突進棒 エクスアンカーで原始タイガーと張り合う魂胆だ。

「又ホオ！」

「クッ！」

角と牙が火花を散らし、両者はお互いに弾かれた。と同時に、原始タイガーの胸から血が溢れ出す。

見ると、いつの間にかクナイモードになったカブトクナイガンが刺さっている。

どうやら弾かれた瞬間にカブトが投げた物らしい。

「又ウホオアアッ!?!」

「逃がしはせん。」

悲鳴を上げて距離を取ろうとしたが、それを許すカブトではない。

僅かに方向を変えた原始タイガーにエクスマンカーを射出して

原始タイガーをバイクから叩き落とした。

【ONE…TWO…】

カブトがバイクから降りてベルトのボタンを押すと同時に原始タイガーは噛み付きにかかるが紙一重で避けられた。

そしてカブトは刺さりっぱなしになっていたカブトクナイガンの柄を持ち、

原始タイガーを胸から肩まで引き裂いた。

「ヒギイイイイイ！」

【ATTACK RIDE BLAST!】

デイケイドは周囲の敵をデイケイドブラストで牽制しつつ、大シヨツカー城へ直進する。

「ふう…思ったより楽かもな。」

「油断しちゃ駄目だよ。そんな筈無いじゃないか。」

「…言ってみただけだよ。」

栄次郎の忠告は、かえってデイケイドの隙を作ってしまった。会話の為にやや士気を落としたデイケイドに炎を纏った岩石が飛んできたのだ。

「なっ！」

慌ててライドブッカードで防御しようとしたが、その前に隕石が岩石を打ち落とした。

「・・・アイツの岩、アンタの隕石に似てるな。」

「当然さ。奴はオリジナルの私が作り出した怪人のリ・イマジネーションで、

更にこの私による強化改造を受けたエリート怪人 ザンジオー強化体なんだから。」

栄次郎はザンジオーに感じた事のない様な殺気を放った。

あまりの威圧感にデイケイドすら一瞬面食らったが、すぐに目の前の敵に向き直ってハンドルを握り直した。

「へえ・・・ちったあ骨のある奴が出てきたって訳か！」

マシンデイケイダーが走り出すと

ザンジオーは再び多数の岩石を飛ばしてきた。

デイケイドはバイクだけでは避けきれずカードを取り出した。

【FORM RIDE KUUGA! TITAN!】

「コイツに乗つてりゃノ口さも関係無いぜ！」

ザンジオーの岩石はいくつも直撃するが、Dクウガは無傷だ。

ライドブッカードをタイタンソードに変えて突き刺す体勢に入る。

「イイイ、エア！」

ザンジオーはすんでのところまで身体を泡にして地中へ潜り込んだ。しかし、デイケイドは冷静に次のカードを用意した。

「そういつのは学習済みだ。」

【FORM RIDE KUUGA! PEGASUS!】

ペガサスフォームに超変身したDクウガは仮面の下で目を閉じ、

聴覚と嗅覚に全神経を集中した。

「・・・そこだっ！」

カツと目を開いてペガサスボウガン（ライドブッカーが変形した）を引き絞り、

一発の銃撃を放った。

「イギツ!？」

よもや攻撃されるとは思わなかったらしく、素っ頓狂な声を上げてザンジオーが姿を現した。

「さあて仕上げだ。」

Dクウガは50秒が経過してディケイドの姿に戻り、

“仕上げ”のカードをディケイドライバーに挿入した。

「てりゃああっ!」

響鬼はピッケルシャークを烈火で迎撃しようとするが、

「フイイエエッ!」

「わっ、眩し・・・ガッ!」

ピッケルフラッシュという閃光を浴びせられた。

視界が眩んでグラついたところを更に背後から槍の攻撃を受けて凱火から転倒してしまった。

「とと・・・わっ!？」

二体の追撃を避け、烈火を手に取るともう二体の攻撃が目の前に迫っていた。

ギリギリで防御は間に合ったが、間髪入れずに蹴りを食らう。

再び倒れかけるも足で踏ん張ってそれを防ぎ、改めて二体の怪人を見た。

ピッケルシャークと、もう一人の怪人はライオンオルフェノクだった。

「ほー、随分とまた貫禄ある奴が出てきたな。」

軽く肩を鳴らし、慣れた手つきで烈火をクルクルと回す。

「うおおおっ!」

トライチエイサー2000でクウガに体当たりしようとするユウスケ。

しかし、

「ジャラグスバ、リントレ（邪魔するな、リントめ）。」

「どわっ!？」

バダーが前輪を掴んで強制的に止められてしまった。

その反動でユウスケはマシンから転げ落ち、

トドメをさそうとするバダーから逃げられない。

「小野寺君！」
バギブソンの前輪がユウスケを押し潰しかけたその時、
今度はクウガがそれを掴んで止めた。
しかし、マイティフォームのクウガでは完全にはバギブソンの勢いを殺せず
手が弾かれてしまった。

ユウスケはその隙に横にずれたため助かったが、
右手を満足に使えなくなったクウガは瞬く間にマシンから叩き落とされた。

「ギベクウガ（死ねクウガ）！」

「うっ…おおりゃあっ！」

ギリギリのところまでクウガは軽くジャンプし、
助走なしのマイティキックでバダーをバギブソンから蹴り落とした。

「バレグバ（舐めるな）…。」

リ・イマジネーションとはいえゴ集団のバダーをそれだけでは倒せない。

バダーが平然と起きあがったのはクウガにとって特に驚く程の事でもなかったが、

しかし、すぐ近くで見えていたユウスケはそうはいかない。

マイティキックは現時点で彼の持つ最強の技だ。（変身できた場合だが）

「そんな…マイティキックでも駄目ってどんだけだよ!？」

そんな彼の目に、再びクウガの姿が目に入った。

「ぐっ…ハア…。」

「おいアンタ…一体ナンなんだよ？」

ユウスケの声でハツとしたクウガは立ち上がった。

「俺は…君のアマダム、壊した。けどもう一度戦いたいって思うなら、

壊れてても…アマダムはそれに応えてくれるよ。」

「……？」

半信半疑のような状態だったが、ユウスケは自らに問いかけた。

俺は、戦いたいのか？

違う。そう結論するのに時間はかからなかった。
ユウスケは決して戦いを好んではない。

では何故、戦っていたのか？

『俺は、アンタに誉めてもらいたかったんだ。』

かつての自分の台詞が、思い出された。

八代刑事に誉めてもらいたい。

それがまだ士達との旅を始める前の、ユウスケの戦う理由だった。

しかし、それもまたすぐに否定できた。

『世界中の人の笑顔の為だったら、あなたはもっと強くなれる。』

……私に見せて、ユウスケ』

『この男が戦うのは、誰も戦わなくて良いようにする為だ！』

自分一人が闇に堕ちたとしても、誰かを笑顔にしたい！そう信じてる！！』

『俺、何か分からないんですけど、俺に出来ること。』

それを探す旅の途中でした。ここで立ち止まっていたら、怒られちゃうんですよ。

それを、約束した人に。」

八代刑事、士、そして自分自身が証明したユウスケの戦う理由。

ほんの数秒間考えただけだったが、

何故これほどの時間が必要だったのか疑問に感じられた。

「俺はただ、世界中のみんなに笑顔でいて欲しい。

その為に戦う必要があるっていうなら俺は、戦う。」

普段よりゆっくりと、祈るように腹へ手を当てる。

（うん。やっぱり小野寺君も、『仮面ライダー』クウガだ・・・！）

「見ててくれ姐さん・・・俺の、変身！！」

ユウスケの腹に、変身ベルト。アークルがその姿を現した。

第十六話 「戦う理由」(後書き)

死神大使「…という訳で次回、ユウスケクウガ参戦予定です！」
士「ああ、めでたいな。だが作者、何故ここにいる？」

わざわざ『三月からまたよろしく』なんて言ってた癖に。」

死神博士「あー、やっぱり勉強しながら考えるなんて無理だったんで、結局またこうして親の目を盗んで投稿しちゃいました。」
ユウスケ「しちゃいましたって・・・良いのかよ？」

死神大使「良い訳無いでしょ(断言)。

今回は書きためといた分があって早めに投稿できましたが、

それももう出し尽くしたし、ライダーが多すぎて
まだまだ書かなきゃな部分がたくさんある。

んで続きを考えやすい状況を奪われているので、これから三月まで待つにせよ

チマチマ出していくにせよ良い事なさそうです。」

海東「いよいよ八方塞がりという訳だ。この小説ももう失踪シリーズの仲間入りかな。」

死神大使「そんな事はこの俺がゆるさん！」
ヒビキ「おおつ、その息だ。頑張れよ？」

天道「フン、愚かな…。落ちても俺は知らんからな。」

翔一「まあまあ；」

死神大使「とにかく次回は三月まで持ち越しになるか、

そこまではないにしろ遅くなるかのどちらかです。」

巧「いずれにせよ余計な期待はしない方がいいぜ。」

死神大使「エフンエフン。えゝ、それでは皆さん。」

全員『良いお年を！』

第十七話 「二つの神話と二匹の狼」

「畜生、チヨコマカしやがって！」

電王は高速で走り回るマツハアキレスに苦戦を強いられていた。

マシンデンバードは単純な速度ではマツハアキレスを上回っているのだが、

あくまでバイクだ。それに対しマツハアキレスのスピードは

ジェットローラーによるもの。小回りが利き、うまく捉えきれない。

「チイイ！」

苛立った電王はバイクを止め、マツハアキレスを見切ろうと目を凝らした。

(ちよつと、モモタロス!?こんなんじや格好の的だよ!?)

「うるせえ!人が集中してんだから邪魔すんじや・・・どわっ!？」

否定しきる前にマツハアキレスの刀の攻撃を受けてしまい、

身体と言つより良太郎の忠告通りの事が起きてしまった

精神的ダメージでぐうの音も出ない。

そこへここぞとばかりに仲間のイマジン達が現れた。

「ハハッ、相変わらず脳ミソからっぽだねセンパイ？」

「いちいち言わんでええて。今更どうこうなるモンやないやろ。」

「モモタロスのやくたたずう!ボクならあんなのにまけないもんね。」

カッチーン。

確かに、そんな音がした。

「んだとテメーらあ!もういつぺん言ってみろ！」

完全にキレて声を荒げる電王。が、

「脳みそからっぽ」「今更どうこうならん。」「ボクならまけない。」

「こんの・・・ん？ちよつと待て小僧、お前まさか!?」
再び怒鳴り出すかと思えば、何かに気付いて慌てだした。

「スツゴーイ！モモタロスなのによくきづいたね!？」

「お、おい？ちよつ待てつ、タンマツ・・・」

「答えは聞いてない!！」

【GUN FORM】

リュウタロスが電王に憑依し、モモタロスを強制的に追い出した。

「オマエ倒すけどいーよね？答えは聞かないけど。」

いつの間にかガンモードになったデンガッシャーを片手に、無邪気な声を発した。

「ハアツ！」

アギトはスコープオンロード レイウルス・アクティアの毒液を避け、

無駄のない動きでマシントルネイダーをスライダーモードに変形させた。

そしてすぐに構えを取り、高速のキック ライダーブレイクを放つ。

かつて正にこのスコープオンロードを葬った技だ。

アギトは少々、慢心していたのかもしれない。

「くだらん。」

「うああっ!?!」

アギトの攻撃を完全に見切り、ライダーブレイクが当たるストレスで斧による斬撃を難なく与えた。

「アギトよ、私を甘く見ない方が良い。」

アギトの知るスコーピオンロードと違って流暢に話せており、またライダーブレイクを容易に受け流したところを見ると、栄次郎の強化改造手術とやらを受けているのだろう。

スコーピオンロードはアギトが動けないうちにと毒液を吐いた。

「ク・・・!」

ジュツと音がした。

アギトが毒液で溶かされた音：ではない。

一筋縄ではいかない相手と見たアギトがバーニングフォームへチェンジし、

その手に宿った炎で毒液を焼き尽くした音だ。

「チツ!」

スコーピオンロードは先程より多量の毒を吐き、斧を振りかざした。アギトは胸で毒液を焼き、シャイニングガリバーを装備して斧を防御。

それだけにとどまらず、スコーピオンロードは左手で盾ごとパンチをかました。

「オア!」

アギトはよろめくが二度目は喰わない。なんと指で再来した盾を貫通しそれを持っていたスコーピオンロードの拳を掴んだ。

「グッアアアアア！！」

左手が焼かれる痛みにスコープオンロードは悶える。

「ハア、アツ！」

斧を持つ右手の力が抜けた刹那、シャイニングカリバーを持ったままの右手で

バーニングライダーパンチが放たれた。

「・・・！？」

ウルファンデッドは突然、背後に衝撃を感じた。

攻撃ではないが、同時にそれ以上の脅威を本能的に理解した。

「ウエイ！」

「ゲオルツ！？」

振り返る間もなくブレイドが殴りかかり、

コントロールを失ったブラックファンクが転倒する。

ブレイドもウルファンデッドも等しくその衝撃に顔を歪めるが、

ここで気を抜いてはやられる。ウルファンデッドはすぐに攻撃を仕掛けた。

「まったく、いくら不死身でも無茶苦茶だつての。」
ブルースペイダーの運転を引き継いだファイズは
半分呆れ気味にブレイドを一瞥し、ある人物のところへバイクを走
らせていた。

(・・・さて、俺も無茶すつか。)

【BURST MODE】

その人物とは、丁度城から出てきたところをファイズが偶然発見した
大シヨツカー幹部 ヨロイ元帥。

凄まじい防御力を持つという事以外何も聞かされていないが、
そんな事はお構いなしにフォンブラスターを起動させた。

並のオルフェノクならば後方に吹っ飛ばす程の威力の紅い光線銃は
まるでただの光のようにヨロイ元帥に当たった途端跳ね返ってしま
った。

「ム？」

しかし、ヨロイ元帥は防御力が高すぎたせいで
自分が攻撃された事にも気付いていないようだ。
それはそれで都合が良い。

「ラアア！」

ブルースペイダーで轢いてしまえばこちらのもの、

というファイズの考えはどうやら甘かったらしい。

「何かと思えば死に損ないのオルフェノクか。」

こんなもので私に傷を負わせられるとでも・・・

・・・!？」

余裕の表情でゆっくりとファイズの顔を向けた。

が、そこにファイズはいない。今度はヨロイ元帥が甘かった。

【EXCEED CHARGE】

「ヤアアーツ!!!」

バイクを止められたその時から、ファイズは次なる攻撃に入っていたのだ。

流石にロックオンは間に合わなかったが、

ファイズの跳び蹴りが炸裂する寸前にチャージも完了。

必殺のクリムゾンスマッシュがヨロイ元帥の背を抉る。

「ク又オオ・・・!!」

いくらヨロイ元帥といえどもクリムゾンスマッシュの直撃は辛いらしい。

「!!!?」

もう一踏ん張り、というところで目が眩んだ。

何かされた訳ではないと分かっている。

そしてこの一瞬で形勢を逆転される事も、ファイズには分かっていた。

「又ウン!!」

ファイズはその身から灰を撒き散らしながら弾き飛ばされ、

ヨロイ元帥はザリガーナへの変化を終えていた。

「ヘッ・・・固えもんだな。」

「当然だ。俺の装甲は大シヨッカー1。貴様に破られる筈も無かるう。」

ザリガーナは不意を打たれた事が癪だったのか尋常ではない殺気を放っている。

「ならよ、試してみつかあ?」

ダラダラと立ち上がるファイズ。ファイズはもともとそういう戦い方をするのだが

視界は歪んでるいるわ、頭は痛いわ、目眩はおさまらいわで、

ヨロイ元帥と戦っても勝機がないのは火を見るより明らかだった。

「けどよ……勝ち目が無くては負けるとは限らねえらしいからな。」

「さあ、来いよ。」

「俺がロクに攻撃する前からそのザマで……何をほざく！」
ザリガーナの鍔がファイズを襲った。案の定というべきか、直撃だ。更に最悪な事に、弱っていたファイズの変身が解けてしまう。

「ガハアツ!!」

「大シヨツカーに刃向かいさえしなければ残り少ない余命、
もう少しマシに過ごせたものを、哀れだなあ?」

皮肉混じりに巧を嘲笑い、ザリガーナは鍔を大きく開く。

「だが、刃向かった以上は楽に死ねると思うなよ?」

ザリガーナは手始めに、巧の右腕を切断しにかかった。

第十七話 「二つの神話と二匹の狼」(後書き)

死神大使「たつくんピンチ！まあそれは置いて。」

巧「置いとくのかよ…。」

死神大使「今回のスコープオンロード、裏設定では

タイホウバッファローと二人でドクトルGの側近やっ
ます。」

海東「数あるデストロン怪人を差し置いて、なんでまた？」

死神大使「だってあのデザイン、どう考えてもドクトルGのオマー
ジュじゃないですか。」

ユウスケ「いやそりゃそうだけど…そんだけ？」

死神大使「そんだけ」

士「なにが『そんだけ』だこの現実逃避作者！」

天道「なんだかんだ言っただして更新が遅れていないあたり、的を
射ているな。」

死神大使「いやそれは、偶然毎月十日に更新してる事に気付いて

キープしようと思ったからで…。」

スコープオンロード「作者よ、受験を甘く見ない方が良い。」

全員「!?!」

第十八話 「Rの遅刻／一枚と一本の切り札」

「おわっ！」

「大丈夫ですかっ・・・クッ！」

威吹鬼と轟鬼の二人はタイホウバツファローの砲撃に強襲されていた。

威吹鬼の弾丸はまるで小石のようにはたき落とされ、

轟鬼に至っては烈斬の間合いまで距離を詰める事ができずに足手纏いにすら見えてしまう。

攻撃する手段も隠れられるような場所も無いので

ひたすら砲弾を避けるか防ぐかだけの戦いとも言えない状況。

「おオっ!？」

轟鬼は何度目か分からないが烈斬で砲弾を防ぐ。

いや、今回に限り『防ごうとした』となる。

烈斬から炎弾が放たれ、砲弾を相殺したのだ。

「へッ？」

「轟鬼さん・・・今のは？」

有り得ない事態に二人が顔を見合わせて硬直した間に、次の砲撃が発射された。

「・・・つて威吹鬼さあん!? ヤバイっす!」

再び烈斬で迎え撃とうとした轟鬼。

あわよくばまた炎が出ないかと

期待していなくもなかったのだが、そうはいかなかった。

代わりという表現は適切ではないが、ドラグレッダーが

飛び出して来たのである。

ドラグレッダーはその尻尾で砲弾を弾き返し、雄叫びを上げる。対照的にタイホウバツファローは思わぬ反撃によるめいた。

「えええ！？オロチイ！？」

「いやオロチではないみたいですけど……。」

二度目となる予想外の事態に軽いパニックを起こした轟鬼。威吹鬼がフォローを入れるがやはり事態を飲み込めずに微妙な指摘になってしまっている。

「うおおい、大丈夫かー！？」

今度は後ろから聞いた事のある声が聞こえた。振り返るとスクーターに乗った青年だった。

「やーっと追い付いたあ！変身！！！」

城戸真司「仮面ライダー龍騎が、漸く参戦したのだ。

一方カリス、ジョーカーの乗るシャドーチェイサーは特定の敵とは戦わずに大シヨツカー城に向かっていた。

「相川さん、飛ばしすぎなんじゃねえか？

敵さんはこんだけウジャウジャいるつてのに、よつとー！」

「雑魚に構うな。世界の融合には時間があるが、

夏海という女は手遅れになるぞ。」

(は、ハードボイルドだ……。)

たまたま近くにいた戦闘員を蹴飛ばし、ジョーカーは思う。

「安心しろ、その女なら暫くは生かしておく。」

「……！」

気付けば目の前に、皺のある顔をカプセルで包み、真つ白な服にマント姿の怪人が現れていた。

シャドーチェイサーを急停車させると、巨大なトランプが周りを取り囲んでいる。

「なんだコリヤ？ふざけてんのか？」

「気を付ける、五代の話ではトランプで女を攫ったらしいからな。」

カリスが忠告するが、トランプに囲まれているという妙な状況にジョーカーはイラついた様子だ。

「確かに光夏海を捕らえたのは私だが、

私は女の拉致しかできないような弱者ではない。」

「左、伏せる！」

カリスがジャンプすると目の前にカプセル頭が現れ、その剣でカリスアローを防いだ。

「果たしてジョーカーとは貴様か、アイツか……

この目で見極めてやるう。」

「……？」

先程のカード占いの事など知る筈もないカリスは疑問符を浮かべるばかりだが、それでも攻撃の手は緩めない。

「おらッ！」

そこへジョーカーの加勢が入った。

二対一は不利と考えたのかカプセル頭はジョーカーにトランプを投げた。

「ガハアツ!？」

腕で防いだのだが、ジョーカーはダメージで倒れてしまった。

「下がっている、普段の半分しか力が出せないお前では無理だ。」

一旦ジョーカーのところまで下がったカリスは言う。

それが正しい事はお互いに経験上、分かっている。

ただし、

「そいつは引き受けられねえ依頼だなあ。」

「何？」

左翔太郎は理屈で動くタイプではないのだ。

そのせいで周りの人間からは

『ハーフボイルド』とからかわれているのだが。

「アンタがジョーカーって呼ばれる理由は分かんねえけど、

仮面ライダージョーカーは俺、一人だからな。」

「フツ・・・そうか。ならば俺は仮面ライダー・・・カリス。」

「この期に及んで自己紹介か・・・私も名乗らせてもらおう、

大シヨツカー幹部 ジェネラル・シャドウ。」

「ご丁寧にどうも？」

「待たせたなジェネラル・シャドウ。」

「ここからは、俺達が相手だ。」

第十八話 「Rの遅刻／一枚と一本の切り札」(後書き)

死神大使「新作だ！そして市内私立合格したぜ！」

ユウスケ「受かったんだ、おめでとー。」

士「コレで落ちたりや笑い話ができたのにな。」

死神大使「不吉な事言わないでくださいよ。まだ公立もあるんで。」

海東「そう思うなら勉強しなよ。」

死神大使「グツ・・・！」

始「私的な話はそれまでにしておけ。作者、ジョーカーという表記が紛らわしいぞ。」

死神大使「そうなんですけど、それ以外に思いつかなかったんですよね。」

「ごめんなさい頑張って解説してください。」

翔太郎「読者任せかよ・・・。」

天道「ある意味、責任転換とも言えるな。」

死神大使「すまない、教師に命を狙われてな(キリッ)。」

剣崎「コイツ、教師を何だと思ってるんだ・・・？」

第十九話 「勝利へと導く音」 (前書き)

話が全然、進まないんですよね・・・

第十九話 「勝利へと導く音」

「りゃあああ！」

響鬼の放った烈火弾を二体の怪人は槍とピツケルで弾き、すぐさま攻撃に移った。

響鬼はリーチのあるライオンオルフェノクの槍を防いでピツケルシャークに向けて再び烈火弾を放つ。

「フイエエ！」

「つと！」

ピツケルフラッシュが届く寸前に響鬼は槍を逆手にとってうまくライオンオルフェノクを盾にした。

ライオンオルフェノクはたまらず目を押さえて呻いてしまう。

事実上一対一になった間に響鬼はピツケルシャークを仕留めんと烈火を向けた。

「フイエエ！・・・!?」

響鬼は、ひよいとピツケルフラッシュをかわしてしまった。

ピツケルフラッシュはこれまで防ぐ以外の方法では

一度として切り抜けた者はいなかった。

それがたった一度、第三者としてみる機会があったからといって見切られてしまったては動揺して当然だ。

「せあつ！」

だがその隙を響鬼が見逃す筈もない。

今度は烈火弾ではなく烈火で直接腹にお見舞いした。

「たああああつ！！！」

勿論一撃では終わらない。烈火の連続打撃がピツケルシャークの身体に大穴を空けていく。

「フイ、エエ・・・」

遂にピツケルシャークは力無く倒れた。
その

ライオンオルフェノクが復活したらしく、
勝利の余韻に浸る隙を狙った槍が背後から飛んできた。
不意打ちといえど想定内の攻撃だ。

響鬼が回避できないようなものではない。
振り向きざまに槍を避け、爆裂火炎鼓を投げつけて
ライオンオルフェノクを捉えた。

「又オツ……！」

響鬼が寡黙なライオンオルフェノクの声聞いたのは
これが初めてだ。そして、これから最後になる。

「音撃打、爆裂連舞の型……！」

響鬼は自身最強の清めの音を叩き鳴らした。

「ヒョオオウツ！」

「うわっ!?!」

マシンキバーに豹怪人 ジャガーマンのバイクが横から突っ込んだ。
キバはバイクから落ちはしなかったが脇腹に強いダメージを受け
ハンドルすら握れていない。

「ふんばれ渡！ブロンブースターだ！」

「……うんっ。」
キバットの助言に従って魔像ブロンを呼び出すフェッスルを
引き抜き、キバットの口へ……

「ヒョウッ！」

ジャガーマンも黙って見ていない。

即座にバイクを方向転換し、再びキバに攻撃する。

「あっ！！！」

二度も同じ手を食うようなキバではないが、
ダメージで感覚が鈍っていたようだ。

かわした際にフェッスルを取り落とし、
マシンキバーのまま戦う事を余儀なくされてしまった。

「っ！」

痛みに耐えながらハンドルを握り直し、
今度はキバの方からジャガーマンに攻撃を試みた。

しかしバイクの運転技術ではジャガーマンに軍配が上がる。
ウィリー走行でこちらの攻撃が避けられたかと思えば、
次には後輪を振り上げて攻撃してきた。

「うっ！？ ……ハア、……。」

（こうなれば力押ししかないか。）
金色のフェッスルを取り出すキバ。

今度こそは落とすまいとしっかりと握っている。

「タツロット！」

間違いなくキバットベルトのバックル部分にフェッスルを運んだ。

だがそこにいるはずのキバットが消えている。

「なっ……キバット、どうした!？」

これではタツロットどころかどのフェッスルも使えない。

いや、それ以前にキバットは紅渡の家族とも言える存在だ。それが急にいなくなった事でキバは取り乱し、まるで戦う姿勢ではなくなってしまうた。

ジャガーマンがすぐそこまで迫っている事にも気付かない。

「ヒョオオオ…ッ!？」

ジャガーマンのバイクの車輪が、キバに当たる直前に弾かれた。キバが何かした様子もない。

ジャガーマンは不気味がつて警戒する。

「渡！俺様がいないからつてボサツとしてんじゃねえ！」

「キバット！どこ行ってたんだよ も〜！」

襲われかけた事に気付いていないキバは

たつた今救ってくれたキバットに対し迷惑そうに言う。

「随分な言われようだな、オイ。落とした物は拾うモンだぜ？」

ニヤ、と笑ったキバットの口元にはフェッスルがくわえられていた。

「あつ！それ……。」

「分かつたら反撃開始だ！行くぜ渡、ブロン、ブースター!!！」

キバットが再びキバットベルトに止まり、

魔像を召喚笛の音を吹き鳴らした。

第十九話 「勝利へと導く音」(後書き)

死神大使「受験終了！テンションMAXです！！」

士「まだ結果出てないんだろ？覚悟しといた方が良いんじゃないか？」

海東「君、内申点からして壊滅的だからね。」

死神大使「良いんですよ、今は不安がっても何も変わりませんし。

気楽に行こう、気楽に！」

照井「良く言えば楽観的、悪く言えば現実逃避…といったところか。

翔太郎「この小説自体、作者の現実逃避なんだぜ？」

亜樹子「それはいいけど、こんだけ長期間かけて一切話が進んでないって凄くない？」

剣崎「それは確かに。ずっと戦ってるばかりで何も進展しないまま受験終えちゃったな。」

死神大使「はい、自覚しております。しかしまだこの状態が続くと思いますね。」

イブキ「えっ！？僕達とか決着付いてませんし、仕方ないのかも知れませんが…」

士「正直もうだるいな。」

ヒビキ「初期の予定ではダブルクウガの戦いと並行して一話で

二つの戦いを終わらせるくらいのペースを考えてたんだつてよ。」

巧「またできもしない事をぬけぬけと…」

死神大使「あれ？おつかしいな」さっきまでテンションMAXだったのに…グスン(ノー；)」

第二十話 「鬼畜な未来人と誠実な不死生物」

「えいつ！それっ！」

デンガツシャーを連射しアキレスを追いつめていく電王。

アキレスが電王より速く動いてもブレイクダンスのような動きでお互いに攻撃が読めなくなっている。

加えて下手な鉄砲も数撃ちや当たるの力押しな戦法にアキレスは苦戦していた。

「又ツ……。」

アキレスは一気に近距離戦に持ち込もうと持ち前のスピードで電王の背後を取った。

「お遊びは終わりだガキ！」

刀で横風で電王の首をはねる、つもり（・・・）だったのだが、

「！」

まるでそれを予知していたように独特の動きで

電王は頭を引っ込めた。

「へへッ！」

「グアアアアッ！！」

悪戯っぽい笑い声と共に銃弾が足下へヒットした。

「やったー！おもったとおり！」

（うん…、でもリュウタロス、様子がおかしいよ。）

「…キ、キサマア……ううっ。」

異様な反応を見せたアキレスを良太郎は不安げに見つめる。

「ふ〜ん？でもボクそんなのきにしない。」

「ギアアアッ！」

足をやられて回避がままならないアキレスは

悲痛なまでの声を発した。

足はアキレスの最大の武器であり、防具であり、弱点なのだ。

事実上足を失ったとも言えるアキレスに戦う力など無いに等しい。

「もうつまんない、だれか かわってよ。」

（おう！任せとけこそ）

（もー、キンちゃん寝てるしボクしかいないじゃない。）

（亀公テメエエ！）

（…zzz）

【ROD FORM】

装甲が組み代わりウラタロスが憑依した電王、

ロッドフォームへのチェンジが完了。いつもの台詞でキメる。

「お前、ボクに釣られてみる？」

「…ハア、この俺を釣る、だと？できるものなら…やって見る。」

アキレスのその台詞はただの虚勢に過ぎない。

多少の加減をするなり、いつそ一思いに倒してしまうのが

敵に対するせめてもの義理というものだろう。

「そう？じゃあ遠慮なく！」

…だが相手が悪かった、と言うべきだろうか。

ウラタロスにせよリュウタロスにせよ、

ここで義理を重んじたりはしない。

そればかりか、わざと手を抜いた攻撃でアキレスを弄ぶ。

「グツ、ガアッ！」

「フフツ、そらっ！」

アキレスは刀で電王の攻撃を退けるのに必死だが、

機動力とリーチが違いすぎて話にならない。

遂には足を引きずっている相手にバイクまで使おうとした外道を
良太郎が引き止めた。

(ちょ、ちょっとウラタロス!? やりすぎだつて!)
「ええ? いいとこなのにな。」

ま、良太郎にこういうのはまだ早いだろうし
今回はこのくらいでシメようか。」

(……!?!?)

【FULL CHARGE】

物凄く嫌な予感を感じたのだが、良太郎にとっては
目の前で起こっている怪人いじめが終わるというだけでも
ありがたかったので何も言わないでおく。

「やああつ!」

電王が投げたデンガツシャーは狂うことなくアキレスに突き刺さり、
亀の甲羅を模した紋章が浮かび上がる。

それを確認してから電王は高く跳び上がった。

電王ロッドフォームの必殺技 デンライダーキックだ。

「!?!? うわあ!」

まだ十分に跳びきる前に一本の矢がデンライダーキックを阻んだ。
更には地面に落下した電王を槍が狙っている。

「ヤバツ!」

咄嗟に身を翻してかわし、新手を見据える電王。

二体のそっくりな怪人が、バイクに跨っている。

ただ一方は弓矢を持っていて、もう一方は槍を持っていた。

そして槍を持っている怪人の胸には大きく「JR」の文字がある。

サソリジェロニモとその息子のサソリジェロニモ Jr. だ。

「あちゃ。これは楽しすぎちゃったみたいだねえ。」

(楽しんでたんだ…って言うか、まずいよ!?)

「そうだね、一番まずいのは

デンガツシャー投げちゃって丸腰って事…かなっ!」

言うつと電王はすぐさまデンバードへジャンプしエンジンをかけた。

そしてサソリジェロニモ達に突撃

「グギャアアアアッ！」

とはいかない。

すっかり弱っているアキレスを轢き倒した。

「!?!?!」

意外すぎる行動に出た電王に慌ててサソリジェロニモが矢を放つが、ちゃっかりアキレスから

引き抜かれていたデンガツシャーが矢を通さない。

「今度は遊ぶ暇もなさそうだし…」

「ッ、ゲフウ！」

ジェロニモJr.の槍をのけ反ってかわし、カウンターで胸を強打。

「早めにさばるか。」

電王はパツと槍を取り上げてジェロニモJr.を

サソリジェロニモの方向へ蹴飛ばした。

【FULL CHARGE】

「さて、と。それじゃ…二人共死ねえっ！」

二体の怪人をデンガツシャーが貫いた。

【METAL】

トリロバイトメタルでウルファンデッドを退けるブレイド。

追い討ちにと次なるアンデッドの力を使う。

「うおおお!!」

【TACKLE】

「ギアウウウウ!!」

「ワダアツ!!?」

ボアタツクルを仕掛けたが、ウルファンデッドは跳び上がり足場にする形でブレイドの背を足の爪で引き裂いた。

ブレイドは倒れないよう足で踏ん張り、

未だ上空から着地していないウルファンデッドを捉えた。

今ならこちらの攻撃を防ぐ事はできて、避ける事はできない。

「はあっ……ウェイッ!!」

跳躍し、ブレイラウザーをウルファンデッドに突き立てる。

切り裂いたりしようものなら今度はこちらが下から狙われてしまう。

その為ブレイドは爪を立てられる我が身をかえりみず、

敢えてウルファンデッドと組み合った状態のまま

決め技を発動させた。

【KICK】 【THUNDER】 【MACH】

【LIGHTNING SONIC】

第二十話 「鬼畜な未来人と誠実な不死生物」(後書き)

剣崎「俺の出番これだけ…!?!」

士「電王に比べて随分短いな。」

死神大使「…電王つてギャグ要素のある戦いが必要かなと。」

モモタロス「んん?オマエなんか今日暗くねえかあ?」

良太郎「でもあの時のウラタロス怖かったな。『二人共死ね』つて…。」

ウラタロス「ボクもそのセリフは気になったんだけど、台本に書いてあったからさ。」

ユウスケ「ちよっ!メタ発言は禁止!」

海東「それに関しては僕が説明してあげるよ。」

『仮面ライダーX』の最終回でXライダーはジェロニモJr.と呪博士を

串刺しにした時『二人共死ねえ!』という爆弾発言をしたのさ。」

士「つまりアレは『X』のオマージユって事か。」

死神博士「…ええ、そういう事です。」

剣崎「ホントに暗いな…どうしたんだ作者。」

始「それより剣崎の出番が短い事にフォローがないが…気付いていないのか剣崎?」

剣崎「ウエツ、あ、そうだ。」

死神大使「…スランプって事にでもしといってもらえますか?」

剣崎「んな適当な!」

天道「…今はよせ剣崎。」

始「何?」

巧「コイツ…第一志望校落ちたんだと。」

全員『……………』

士「ははっ、なんだ気にしてるのか？」

そのくらい覚悟の上でやってると思ってたがな？」

死神大使「…ええ、僕もそのつもりでした。」

士（！？何だこの雰囲気…落ちてたら絶対虐めてやるうと思ってたのにできねえ！？）

第二十一話「角とキバと鉄」

ドラグレッダーが砲弾を相殺し、三人がかりで攻撃を仕掛けるがタイホウバツファローも負けじと恐ろしいまでの怪力で応戦する。

「たああ！」

ドラグレッダーを足場に龍騎が突き出した拳は呆気なく角で防がれる。

そして、首を振ると逆にこちらが吹っ飛ばされてしまった。「って、んじゃ これでどうだっ!？」

引き抜いたカードを見もせずドラグバイザーに挿入する。

【FREEZE VENT】

「あ、あれっ?ちょっと、城戸さん!？」

突如、ドラグレッダーがその動きを止めた。

彼等の命綱とも言えるモンスターは完全に凍結してしまっている。

「ああっ!ごめんなさい間違いました!！」

「間違ったって、冗談じゃないツスよ!？」

轟鬼の言う通り、冗談では済まない。

タイホウバツファローは水を得た魚の如く、

至近距離からライダー達に発砲する。

「うおおあああ!！」

「威吹鬼さん、轟鬼さあんっ!?!こ、今度こそ!！」

【SHOOT VENT】

龍騎の肩に”鋼の巨人”マグナギガの下半身を模した二連ビームキャノン砲のギガキャノンが出現した。

ガツシリと砲身を押さえ、照準を合わせる。

「はああ・・・だあっ！」

今度はちゃんと確認してあるだけに、おあつらえむきの武装だ。咄嗟に迎え撃ったタイハウバツファローの砲弾をぶち抜き、これまでで最大のダメージを与えた。

「ハア：どうやら、それはアイツに有効みたいですね。」

「い、今がチャンスって事ツスね！」

全身からもうもうと煙を上げてやって来た二人に慌てて駆け寄る龍騎。

「二人共大丈夫なんスか!？」

「どうって事無いツスよ。俺達だって鍛えてるんスから！」

「ええ。俺達できめましょう！」

そう言つて威吹鬼はタイハウバツファローに

鬼石の弾丸を撃ち込み、轟鬼は烈斬を突き刺す。

「は、はいッ!...グスッ」

自分のせいである事に関して何も言わない二人に

感動を覚えつつ、少し遅れて龍騎もデツキに手を伸ばした。

「音撃射・疾風一閃！」

「音撃斬・雷電激震！」

【FINAL VENT】

「「だああああああっ!!」「」

魔像ブロンを召喚し、マシンキバーと合体させる事に成功したキバは完全にジャガーマンを圧倒し、あとはトドメだけという状況にある。

「今だ渡、やつちま・・・ええええええ!?」

「クツ、手強い・・・!」

キバットが正にウエイクアップフェッスルを吹かせるよう促した時、イクサリオンが割り込んできた。

それを操るイクサの視線の先には怪人 サイギヤングの姿があった。

「だがッ!!」

イクサカリバーを手に取り、再び走り出すイクサ。

キバットはその背をしみじみと眺めた。

「アイツ、相変わらず周りが見えてねーな...」

困ったもんだぜ。な、渡?

「キバット、名護さんが!助けないと!」

「...あっちゃあ、困ったもんなのはお前も同じか。」

キバットはつつこむ事を諦め、ブロンブースターを

イクサの元へと走らせた。

ついさつきまで戦っていた相手の事も忘れて。

「ムッ?渡君!」

「名護さん、僕も一緒に戦います!

あつ、もしかして迷惑だったり...?」

「...いや、助かる。しっかり頼むぞ!」

イクサカリバーでサイギヤングを狙い撃つが、

相手も巧みにかわして見せ、かなりのスピードでUターン。

突進してくると共に火炎を吐き出した。

「名護さん、一旦下がってください！」

ブロンブースターが前に出てその両方を受け止めた。

火炎はともかく突進の衝撃は目を見張るもので、

危うくブロンブースターから振り落とされるところだった。

「ハアアッ！」

サイギヤングが攻撃を受け止められた隙に

イクサは死角となっているキバの後方から跳び蹴りを見舞わせた。

不意を突かれたサイギヤングは完全に無防備だ。

にも関わらず、イクサの蹴りは受け止められていた。

ダメージを与えるどころか、ビクともしない。

「ッ！！！」

普通ならここで反撃を喰らってしまうのだが、

イクサではそうはいかない。

すぐに頭を切り換えてサイギヤングのパンチを受け流し、

それを逆手にとって背負い投げた。

たとえダメージが無くとも、体勢は大きく崩すことができる。

「うおおっ！！！」

イクサカリバー突き立てた。が、やはり歯が立たない。

それを見ていたキバもサイギヤングが

恐ろしく固い事は十分に理解した。

すぐにそういった相手に適切なフェッスルを使う。

「ドツガハンマー！」

「！ それだ、寄越しなさい！！！」

【DO・G・GA F・A・KE】

キバが召喚したドツガハンマーを

イクサがフェイクフェッスルで奪い取ってしまった。
ドツガハンマーを持つとスピードが著しく落ちるので
敵の近くにいたイクサが持った方が都合は良いのだが。

「あのヤロー、またかよ！」

「ど、どうしようキバツト？」

「あー、もうブロンブースターで轢いちまえば良いだろ。」
納得してハンドルを持つとうとしたキバに
ジャガーマンが飛び掛かった。

抵抗する間もなくキバはジャガーマンの爪の餌食となり、
右肩は噛み付かれて血が出てきた。

もし先程ドツガフォームになっていれば
サイギヤングと同じくノーダメージで済んだだろう。

「ウウツ！」

キバは噛み付かれたままジャガーマンを抱え込み、
右手でフェッスルを使った。

「が、ガルルセイバー！」

ガルルフォームとなったキバは
ジャガーマンの首を斬りつけた。

悲鳴を上げる事もできずにジャガーマンは退くが、
キバからは逃げられない。

「ガルルバイトー！」

一方のイクサはドツガハンマーで確実にダメージを与えたのだが、
それも最初の一撃だけだ。

先程も述べたようにドツガハンマーを持っていたのでは
どうしても動きが鈍くなってしまう。

二撃目でバイクを破壊された（偶然）サイギヤングも

さして速いとは言えないが今の状態のイクサよりは速い。
軽くハンマーをかわして炎のカウンターを放つ。
どうにかイクサはハンマーでそれを防いだ。

「!?!」

が、次の瞬間にサイギヤングはイクサから遠く離れていた。
逃げるような状況では無い筈だ。

サイギヤングは助走をつけ、角を突きだして走り出した。
イクサは迎え撃とうとハンマーを振り上げる。

「! なあっ!?!」

直進の為か今度はかなり速い、
十分に構える前にサイギヤングの突進が直撃してしまった。

「グアアアツ…ハア、ハアツ……」

遂に二撃以上を与えられる事無く、イクサは膝をついた。
炎や突進のダメージより問題なのは疲労だ。

ドツガハンマーを使用するにはかなりの腕力が必要となるので
ドツガフォームになれないイクサではあまり長い時間使えない。
それでもイクサはハンマーの柄を片手に持ったまま、
片膝について呼吸を整えた。

その隙にサイギヤングは再び助走をつける。

イクサはそれに気付きドツガハンマーを両手で持つが、
持ち上がらない。立ち上がらない。

「ギギイイイイイ!」

「……フンツ!!」

雄叫びを上げるサイギヤングに対し、
イクサは短く気合いを入れる。

「ギアアアツ!?」

イクサに突進したサイギヤングはその角を叩き折られた。いや、”折られた”ではない。自ら”折った”のだ。

イクサはただ、ハンマーをサイギヤングに向けただけ。

「フツ、直進だけに捉えやすかったぞ!」

ハンマーをすぐに持ち上げなかったのは気付かれない為。

立ち上がらなかったのは突進の衝撃に備える為。

攻撃をほぼ全て回避し油断していたサイギヤングにたてたイクサの作戦は見事成功した。

「終わりだ。その命、神に返しなさい。」

【I・X・A C A・L I・B E・R R・I・S E U・P】

「まず…腕から切断する!!」

巧を踏んづけ、ザリガーナは宣言した。

鉄がジャキン、と不吉な音を立てる。

「ッ……………ううああああ!!」

巧はウルフォルフェノクに変化して

ザリガーナの鉄を力尽くで開いた。

「ほう、まさかまだそんな力が残っていたとは…」

「ハア…ッつあ!」

ザリガーナの足を足で払い退け、持ち前のスピードで距離を取る。

ファイズギアをチラリと見たが、やはり遠い。

取りに向かえば確実にザリガーナの邪魔が入るだろう。

(このままやるしかねえか…)

メリケンサックを見つめるウルフォルフェノク。

それを握る手はやはり灰になりつつある。

「……ッ!?!?」

ザリガーナと、自らの手に気を取られすぎたようだ。

新手と思われる男に腕を掴まれてしまった。

そして振り返る間もなく、ウルフォルフェノクの意識は闇へと沈んでいく。

「……成功か?」

「いや、まだ分からない。」

巧の姿に戻ったウルフォルフェノクを支え、

先程刺した注射器を懐に入れながら男が答える。

「貴様、その男に何をした?」

ウルフォルフェノクに向けていた鋏を男に構え、

ザリガーナは獲物を横取りされた怒りから来る殺気を隠そうとしない。

しかし、

「…君は彼を見ていてくれ。」

俺は彼のやり残した事を片付ける。」

男はザリガーナの問いには答えず、

冷静に白い笛のような物を取り出した。

「…変身。」

「へん、シン。」

「……………ウヌツ?!」

ザリガーナは赤い閃光に絡め取られた。

紅渡「仮面ライダーキバの実兄にして、ファンガイア族のキングたる男 登太牙」仮面ライダーサガの閃光に。

「何をした、と言ったな。」

我がD&Pは人工ライフエナジーの製造に成功し、
今やファンガイアの食糧だけでなく

人間の医療としても役立つている。」

「…貴様の自慢話を聞く気は無いのだが？」

勝ち誇って話し出したサガに

ザリガーナは憎々しげに悪態を吐いた。

「気付かないのか？彼のようなオルフェノクは人間の進化形。

その急激な進化に肉体が追い付けないのなら、

追い付くだけの時間と力を与えてやれば良い。」

ここまで聞いて、ザリガーナはようやく理解した。

太牙は巧に人工ライフエナジーを注射したのだ。

人間の生命エネルギーそのものであるライフエナジーならば、

一時的にオルフェノクの延命が可能となる。

奇しくもスーパーアポロガイストの

延命および強化とおおよそ同じ理屈だ。

「フウウウ、死に損ないを助けて何が良いのやら。」

あっけからんと言いつつ放った。

動けないというのに何かする気は全く感じられず、

巧を殺せずに悔しがるような素振りも見せない。

やはりそれはザリガーナの余裕が故だろう。

サガでは自分を殺す事は不可能だと確信し、

巧が生き延びても特に問題はないと確信している。

鎧の中で、太牙に呆れとも失望ともとれないような表情が浮かぶ。

「少なくとも、それが理解できるような相手なら

こうはならない、か。」

「ウエイクアップ」

サガークの口にウエイクアップフェッスルを差し込んだ。

第二十一話「角とキバと鋏」(後書き)

太牙「遂に俺も登場か。しかしフラグがあつたせいで意外に思う人は少ないんじゃないか？」

死神大使「…でしょうねえ。でもまあ仕方ないかなと。」

士「何が仕方ないのか分からんが、立ち直つたらしいな作者。」

死神大使「勿論です！いつまでも落ち込んでる訳に行きませんから！！！」

翔「うんうん。良い事だよ。」

海東「この何も感じる所のない戦いもそろそろ終わりが見えてきたしね。」

巧「俺もひとまず首の皮つながつた訳だ。」

ユウスケ「このままノンストップで行こう！」

死神大使「あー、それ無理。春休みの課題あるから。」

士「今更真面目ぶってんじゃないやねえ！」

第二十二話「クライマックス刑事」

スカルがカマキリメランを迎撃するが、やはり経験の浅さが否めない。

カマキリメランに全ての全弾を易々と回避された。

いや、回避と言つにも語弊がある。

カマキリメランはほとんど動いていないのだ。

それだけスカルの射撃は的を捉えられていなかった。

何発かの流れ弾が戦闘員に当たっただけまだ良い方だろう。

見かねたアクセルは両腕を元に戻した状態で

エンジンブレードを持ち、一気にスピードを上げた。

「ひゃっ!？」

急に速くなったバイクに慌ててしがみつくスカル。

先程から、翔太郎には絶対に見せられない失態続きである。

スピードを出す前に一声かけるべきだったか、と

アクセルは内心申し訳なく思うのだがそんな事を言っている暇もない。

鉄を構えて待ち構えるカマキリメランの目前に行く頃を見計らって急カーブする。

スピード押しで真正面から突っ込んでくると

踏んでいたカマキリメランは鉄を空振り、

エンジンブレードの斬撃が直撃した。

「キヤーツ！竜君、ナイスウ!!！」

「油断するな所長!」

仰向けに倒れるカマキリメランを見て

はしゃぐスカルにアクセルは活を入れた。

カマキリメランが倒れざまに肩のブーメランを投げていたのだ。

「わっ!?!」

「うおおおお!!」

アクセルはウィリー走行の体勢でブーメランからスカルを守った。その勢いでスカルは転倒し、アクセルは通常形態に戻る。

「竜君!? しっかり!」

幸い、アクセルに大したダメージはないらしい。

苦しむような素振りを見せることなく立ち上がった。

「しっかりするのは所長の方だ!。」

「え?」

「よく見ている、これが…戦うという事だッ!」

【ENGINE! JET!!】

再び飛んできたブーメランをエネルギー弾で撃ち落とし、バイクに乗った相手に向かっていく。

(おい! あっち面白そうじゃねーか! ちょっと行ってくる!!)

(じゃあボクもいく)

KYとはこういう事を言うのだろう。

カマキリメランと対峙するアクセルとスカルを見た

モモタロスとリュウタロスが二人に憑依してしまった。

元々が好戦的な性格の二人であるが、特にモモタロスは

良太郎を盗られた個人的な鬱憤を晴らそうと張り切っている。

「俺、参上! そのカマキリヤロー、

もうこの際キメ台詞省略しても相手してもらっせえ!?!」

キメ台詞をバツチリ言ってからこんな事を言い出す。

「……?」

カマキリメランはアクセルの急な変化に戸惑っているらしい。

一向に仕掛けてくる気配が無い。

「オイオイどうしたあ？来ねえならこっちから行くぜ！？」
エンジンブレードを肩に掛け、再度駆け出すMアクセル。
それを見て我に返ったカマキリメランもバイクで向かう。

「ん〜どうしよ。モモタロスがいたんじや たのしめないしィ…
あれっ、セミさんだ！」

先を越されたRスカルは近くを飛んでいる蝉を発見した。
時期的に有り得ない事なのだがRスカルは気にも止めない。
良太郎ならば注意したかもしれないが、
特異点ではない亜樹子はリュウタロスを追い出す事はおろか
口出しすらできない。

Rスカルは迷わず蝉を鷲掴みにした。

「わ〜・・・ちかくでみるとキモチわるいつ。」
蝉をまじまじと見つめ、あろう事かその場で投げ捨ててしまった。
勿論、飛んで逃げていくだろうと思つての行動だ。

しかし蝉は飛ぶことなく地に叩き付けられた。

「ええ〜!？」

Rスカルは面食らつて声を上げたが、
蝉が飛ばなかったからという理由ではない。

そんな事は全く問題にならないような事が目の前で起きたのだ。

「ミミイイイ・・・」

蝉が煙を吹き出し、怪人の影が現れたのだ。

「わ、えいつ！」

驚きのあまりいきなり発砲するRスカル。

しかしそれは結果的には正しい判断であった。

蝉の姿でRスカルを狙っていた怪人ヒーターゼミは
元々戦闘向きの怪人ではない。

暗殺と大量殺人に特化しており、その点を高く評価され
レインジャー部隊に落ち着いているのだ。
ヒーターゼミは得意の鳴き声でRスカルを喉を
枯らすはずだったのだが哀れ、
その間もなく体からスパークを吹き出した。

一方のモモタロスもカマキリメランのブーメランを破壊し、
完全に勝ち誇って宣言する。

「必殺、俺の必殺技！」

…って、どうなんだ、これ？」

Mアクセルはエンジンブレードを傾けたりして
必殺技の撃ち方を考えだした。

当然ながらそうしている間にカマキリメランが立ち上がってくる。

(うおおおおおっ！)

「ナニイイ!？」

照井は自力でモモタロスから身体を奪い返し、

カマキリメランを蹴飛ばした。

「クソッ、とんだ邪魔が入った！」

【ENGINE! MAXIMUM DRIVE!!】

「へへ、そうやるんだ。」

同じく必殺技の撃ち方が分からなかったRスカルは
アクセルの方を見やり、見よう見まねで

ロストドライバーに挿入してあるスカルメモリを引き抜いた。

【SKULL! MAXIMUM DRIVE!!】

「ラストいくよ? いーい?」

「俺に質問をするな！」

「答えは聞いてない! っつかお前には聞いてない!」

(変身してるとはいえ竜君の前でこんな…アタシ聞いてない!)

サガが一旦ジャコーダーを引っ込め、
再び伸ばしてザリガーナを貫かんとする。

ザリガーナはワザと背中中の甲羅に

ジャコーダーが突き刺さるよう半端に避けた。

「ハッ！」

「ムウンッ！」

ザリガーナはサガがジャンプした時を狙い、

甲羅を外してジャコーダーから脱出。

「何だと!？」

逆にジャコーダーを引っ張ってサガを落下させる。

「ハアアア…甲羅崩し！」

自らの甲羅を蹴り砕く。

その破片はザリガーナの方へは飛ばず、何故かサガだけを襲った。

「っ、うわっ?!」

しかし甲羅の破片がサガに命中する前に

いきなり抱え込まれるような感覚があったかと思うと、

まばたきしている間に視界が一変していた。

「キサマア……」

「フッ、『借りは返した』という訳ですか。」

「どうでも良いだろうが。
ったく、お前が余計な事したせいでこんなになっちまったぜ。」
人工ライフエナジーの力で疾走態と化したウルフォルフェノクが
サガを救出した。

「太牙。見ての通り人工ライフエナジーによる
オルフェノクの延命は成功だ。

だからといってすぐに動くのもどうかと思うが。」

「ああ、貴方はまだ休んでいるべきだ。」

サガは飛んできたキバツトバツト？世に同意するが、

「俺の勝手だ、口出しすんじゃないねえ！」

ウルフォルフェノクはピシヤリと断り、もう走り出している。

「ハッ、らあっ！ やああっ！！」

「ガアッ！？」

しかし、疾走態となってスピードもパワーも上昇した

今のウルフォルフェノクにはザリガーナの頑丈

極まらない装甲すらも決る事ができる。

ザリガーナの苦痛を耳にしたサガは

これ以上の助太刀は必要ないであろうと悟る。

(・・・だがそれは彼が万全であればの話だ、

今の彼にはまだ俺の力が必要な筈！)

装甲を引き裂かれたザリガーナなら

ジャコーダーで容易く倒せるが、

ウルフォルフェノクがあまりに縦横無尽に動くので

近づく事も遠距離から貫く事もできない。

下がるように声を掛けてみたが、集中しているせいなのか

無視されているのか、反応がない。

「太牙、貴様は優しすぎるのだ。」

戦いである以上、多少の犠牲はやむなしと思え。」
キバットバット？世の指摘に、ハツとしたように顔を上げた。

「多少の犠牲はやむなし…なるほど、分かった。」

サガは迷うことなく、ザリガーナへ斬り込んで行く。

その時ウルフォルフェノクの移動経路に入り二人が激突した。
サガはザリガーナの真横まで吹っ飛ばされる。

「何やってんだお前・・・ッ！」

大したダメージではないはずのウルフォルフェノクも
突然に崩れ落ちた。

サガの予想通り、まだ完全には人口ライフエナジーが
身体に馴染んではいけない上、

先の戦いによる疲労やダメージもある。

サガが動き出した途端、

形勢が完全にひっくり返ってしまった。

「ハツ、なんだ自滅か。」

「ウェイクアップ」

サガから視線を離し、まず厄介な方をと

ウルフォルフェノクを見るザリガーナの腹を
ジャコーダーが突き抜ける。

うつぶせに倒れたままのサガの仕業だ。

「何だと!？」

「グッ・・・お前と乾さんの両方に

止まって欲しかったものでな。

多少の犠牲ははやむなし、

今度こそその命、もらい受けるー！」

第二十二話「クライマックス刑事」(後書き)

死神大使「危なかった！ギリギリ十日中に出せた！」

士「いや別にソコだわらなくて良いだろ、どーせ誰も期待してねえよ。」

海東「ともあれ今回で見所のない戦いだけの話は終わり。

次回からは新展開さ！」

ユウスケ「皆さんお楽しみに！！！」

死神大使「あノ・・・あんまハードル上げないで頼むから。」

第二十三話「兄弟、再び」(前書き)

序盤で行数を稼いでいる？

・・・その通りッ！！

第二十三話「兄弟、再び」

【THREE】

「ライダー・・・キック！」

【RIDER KICK】

ライダーキックが原始タイガーを、

「ハアッ！」

バーニングライダーパンチがスコープオンロードを、

「音撃打、爆裂連舞の型！！」

響鬼の音撃がライオンオルフェノクを、

【FULL CHARGE】

「でえやあっ！」

ソリッドアタックがサソリジェロニモとジェロニモJr.を、

【LIGHTNING SONIC】

「ウエエエエエエイツ！」

ライトニングソニックがウルフアンデッドを、

「音撃射・疾風一閃！」

「音撃斬・雷電激震！」

【FINAL VENT】

「だあああああつ！！」

威吹鬼と轟鬼の音撃に

ドラゴンライダーキックがタイハウバッファローを、

【I・X・A C A・L I・B E・R R・I・S E U・P】
イクサ・ジャツジメントがサイギヤングを、

「ガルルバイト！」

ガルル・ハウリングクラッシュがジャガーマンを、

【ENGINE! MAXIMUM DRIVE!!】

【SKULL! MAXIMUM DRIVE!!】

ダイナミックエースとスカルバニツシャーが

カマキリメランとヒーターゼミを、

「ウエイクアップ」

スネーキングデスブレイクがザリガーナ、

「おりゃああつ！！」

二人のクウガによるマイティダブルキックがバダーを撃破した。

【FINAL ATTACK RIDE DE-DE-DE

DECADE!】

マシンディケイダーはディケイドの前に現れた3Dカードごとザンジオーを突き破って撃破。

ディメンションドライブ、

これまで使われる事のなかったディケイドの必殺技の一つだ。

「潮時だな。トランプフェイド!」

唯一生き残っていたジェネラル・シャドウは

怪人達の有り様を確認するとあっさり退却してしまった。

「うおっ待ちやがれ!」

「いい、それよりも全員無事なのか?」

追おうとするジョーカーを制し、

カリスがライダー達に呼びかける。

「うー、そうなんじゃない?パツと見。」

どうにか憑依が解けたスカルは辺りを軽く見渡して答えるが、

「待て、海東がいないぞ。」

すぐにディケイドから訂正された。

「え!?!」

「そういえばあの時から…」

二人のクウガは互いに顔を見合わせた。

ユウスケが変身してから海東を見ていない。

「で、どうすんだ?」

「…これ以上先延ばしには出来ません。我々だけで城を攻めましょ
う。」

変身を解き、力無く座り込んでいる巧の問いに

やや迷う素振りを見せるキバだが、やはり淡々と言った。

「なっ、せっかく戦わずに済んだのに、

今度は見捨てろってのかよ!?!」

「…」

龍騎がさかさず食ってかかるが、キバは言葉ではなく目を逸らすという形でそれに応じる。

「渡君の言う通り、ここは先を急ぎましょう。」

今は一刻も早く奴等を倒すべきだ。

一人の為に全世界を巻き込む訳にはいかない。」

見かねたイクサが彼に助け船を出した。

「そんな、でも…おい土！お前も何か言えよ！」

ユウスケクウガが憤慨しデイケイドに同意を求めるが、

「そうだな…俺はそのキバに賛成だ。」

っっていうかユウスケ、お前やっど起きたのか。」

期待に反して、デイケイドは面倒臭そうに言った。

「…っ、良いのかよ？」

ユウスケクウガは一瞬言葉を失ったが声を低くして問いかけた。

「何度も同じ事言わせんな。」

アイツを心配したって無駄だろ。」

「…そっか、それもそうだな。」

変身していても、互いにニツとしたのがハッキリ伝わってくる、そんな会話だった。

（大樹君はアレで信頼されてるんだから

羨ましいね、…まったく。）

「あ、乾さんブルースペイダー返して下さいよ。」

「おお、ソコだ。」

「ちょっ、これ…こけたんですか!？」

「誰がこけるか！ 乗り捨てたんだよ！！」
「意図的！？ それは流石に怒りますよ！」

「兄さん、名護さんが言ってた取りに行く物って…。」
「コイツだ。乾さんともしもの時の為に持って来たんだが、早くも俺に使う事になるとはな。」

巧とブレイドが言い合っている間にサガも変身を解除し、人工ライフエナジーをキバに見せてから一気に飲み干した。吸命牙を使う必要がないのも人工ライフエナジーの特徴の一つだ。

「お前も、酷い怪我をしてるようだが。」

太牙は噛み砕かれかけたキバの鎧に目をやり、三つめの人工ライフエナジーを取り出そうとする。

「…大丈夫だよこのくらい。」

「……そうか。」

明らかに『このくらい』の傷ではないのだが、それ以上太牙は何も言わなかった。

渡は意図的に人工ライフエナジーを口にするのを避けている。完全なファンガイアではあるが、人間 嶋昇に育てられた太牙にもその気持ちは分からなくはなかった。

「口喧嘩はもうそのくらいにしておけ。お前達らしくもない。」

「あつすまない、乾さんこの話はまた。」

「またすんのかよ、お前意外とネチっこいな。」

またしてもカブトの介入で口喧嘩が終了し、

「どうかしたか？」

「…いや。」

（剣崎のああいう面が、”意外”なのか…。）

カリスは違和感を感じずにはいられない気持ちを抑えブレイドから視線を離れた。

大シヨツカー城内

「・・・ガハッ！」

「弱い・・・君達は一応、私の仲間だったんだ。

もう少し頑張れないのか？」

緑色のライダーが、金色のライダーから少し離れたところでうつぶせに倒れている。

そして金色のライダーは紅いライダーの首を鷲掴み、その足が地に着く事を許さない。

「っ、純一・・・！」

純一と呼ばれた金色のライダー、グレイブは紅いライダー、ラルクの悲痛な声を無視してラルクバツクルをはぎ取った。

ラルクの変身が解除され、三輪春香の姿が露わになる。

「私が欲しいのはこのカードのみ・・・」

グレイブは器用にバツクルだけを捨て、

チェンジケルベロスのカードを腰のケースにしまった。

「君はもう、良いな。」

グレイブラウザーの切っ先を春香の首に突きつけた。

「止める、純一・・・止めるオおおッ！！！」

【MIGHTY】

緑色のライダー、ランスが気力で立ち上がり、グレイブに攻撃を仕掛ける。

例え当たらなくとも、注意を引ける事は確実だろう。あとはどうにか春香を取り返せれば。

が、グレイブは微動だにしない。

「感情的になりすぎだ、こんな近くの驚異にも気付けないとは。ランスは突然現れた大量のアルビノローチによって瞬く間に押さえつけられた。」

「なっ、コイツ等！邪魔すんじゃ・・・」

必死にもがくが、傷のダメージもあり動けない。

ついにはローチの一匹にランスバツクルを取られ、禍木慎に戻ってしまった。

「オイ返せよ！このっ・・・春香あああ！！！」

「ハア、このカードを持っていてこの程度か。」

まあ安心しろ、この力は私が最大限に使ってやる。」

「！！！」

春香を貫かんとしていたグレイブラウザーがギリギリのところまで止まった。

端からはグレイブが自分の意思で止めたように見えた。

少なくとも、春香と慎には。

「お前も、いたのか。」

「……………」

グレイブの腕をすんでの所で止めた『何か』が、少しずつ、その姿を現した。

「……………なあ、大樹？」

ディエンドインビジュアルで姿を隠していた、仮面ライダーディエンドが。

第二十三話「兄弟、再び」（後書き）

一同『……………』

士「……………遅い。」

死神大使「……………そうですね、一ヶ月もかかってしまいました。」
士「……………投稿の事じゃない。いやそれもだが……………」

俺が最後に登場してから、どのくらいたったと思う？

死神大使「……………一ヶ月。」

士「……………後書きは除いてだ。」

死神大使「……………約五ヶ月。」

主人公（笑）「どうなってんだ？ああ？」

死神大使「いやその……………」

（誰か助けて！主に最近出番多かった人とか！）

渡（どうします？）

巧（ほつとけよ……………）
デイクイド小説なのに

デイクイド勢ほとんど出さなかったアイツが悪いんだ。）

名護（右に同じだ。俺は常に正しい。俺が間違っ事は無い。）

イマジンス（……………異議なしっ！）

太牙（王の判決を言い渡す……………無視だ！）

【FINAL KAMEN RIDER……………DECADE!】

死神大使「ちよ、コンプリートとか……………」

真司「あー、今回ようやく大ショッカー城前の戦いは終わって

早く行かなきゃとか言いつつゆっくりしてく話だったな。」

天道「完全に作者の力不足だ。

どうにか乾や登の回復してるところを描写したかったらしい。

剣崎「お陰で俺の出番があったが……………」

急にTV本編風の性格になっていたな。」

始「俺が出てきた影響で…という設定との事だ。」

しかしまあ不自然だな。」

海東「最後に僕も登場したけど、実は作者の奴が

僕の存在を忘れてたからあんな形になったという。」

ユウスケ「俺、引つ張った分活躍あると思っただのに…。」

雄介「最初は変身できたけど白、みたいな話も

考えてたらしいんだけどね。」

慎「っつーかさ、俺等あつという間にベルト取られたんだけど。」

死神大使（霊体）「ああ、それは当初から決まっていた。」

カットした訳じゃありません。」

春香「ええっ！？じゃ、じゃあこれからの活躍とかは？」

死神大使（霊体）「いまんとこ皆無と思ってくれて良いです。

もうオールアップに近いかもしれせん。」

慎「マジかよ…俺達一応

ディケイドでは数少ないオリジナルゲストだろ？」

死神大使（霊体）「そうなんですけど…

ぶっちゃけ君らの活躍とか、需要無くない？」

春香「ひどいつ、折角良い性格にリメイクされたのに…。」

慎（霊体じゃなけりゃ ぶっ飛ばしてやるのにな…。）

ヒビキ「ま、そんな感じで相変わらず穴だらけの小説だが、

次回もお楽しみにな。シュッ」

第二十四話「取り引き」

「ハア・・・ぐふっ!？」

デイエンドはすぐさま振り下ろされたグレイブラウザーをかわし、手薄になっていた腹をパンチ。

怯んだグレイブから春香を奪回した。

「大樹、貴方・・・」

「下がっていたまえ!」

【KAMEN RIDE GARREN! LENGEL! RI
O TROOPERS!】

何か伝えようとする春香を強引に押しつけ、

五体ものライダーがデイエンドライバーから射出された。

その中の同型の三体、ライオトルーパーが

蟻のように湧いてきたアルビノローチをアクセラレイガンで牽制。

そしてそれとは別に群がっているローチに

ギャレンとレンゲルが突っ込む。

「ゲホッ、ゲホッ・・・」

ギャレンにローチの群れから引つ張り出された憤は

ひどく咳き込んでいたが、見たところ命に関わるような傷も無い。

それを確認するよりも早くデイエンドライバーに

更なるカードが装填された。

【ATTACK RIDE BARRIER!】

デイエンド達とグレイブ達の間には蒼い防壁が形成され、

なおも追って来ようとするアルビノローチの行く手を阻む。

「その二人を安全な所・・・土達の所へ。」

召喚されたライダー達は無言で頷き、

三体中二体のライオトルーパーが憤と春香を担いだ。

「ちょ、おい！？降ろせよ今すぐ！」

咳が治まった慎は喚いたが意思の無い彼等は案の定無視し、
残りの三体が慎達を取り囲むようにして守りを固める。

一方の春香は自分の無力を悟っているのか全く抵抗しようとしな

「っ、純一をお願い！」

「だああ！大樹テーマ絶対負けんなよ！！」

だが二人は共通して、苦虫を噛み潰したような
悔しさに歪んだ表情をしていた。

「見ての通り私達に、純一は止められない。」

「アイツは仲間だ、俺達はそう信じて戦ってきたのに

もう俺はアイツを敵とも味方とも呼べねえ。・・・冗談じゃねえ
よ。」

「・・・」

「でも貴方なら、少なくとも弟として純一を止められるわよね？」

「つつーか、じゃねーとこっちが困んだよ。」

「・・・ああ、分かっているさ。」

デイエンドは二人を背に、ポツリと独り言のように呟く。
防壁は既に崩壊寸前の所までできていた。

「・・・良かったのか？お前が一度に喚べるのは

カード三枚分まで、と聞いているが。」

慎達がこの場を離れた頃合いを見計らい、グレイブが口を開いた。軽くグレイブブラウザーを構えているというのに、その口振りは本当にディエンドを心配しているかのような錯覚に陥る。長い間自分を偽り続けた海東純一だからこそ出来る芸当だ。「それに、よりにもよって狙われている
彼等の所へ向かわせるとは、余程信頼しているようだ。」
「勘違いしないでくれ、兄さんとの決着を誰にも邪魔されたくないだけさ。」

二人の会話は、そこで途切れた。
お互いに武器を構えたまま、ピクリとも動かない。
アルビノローチが防壁を破ろうと悪戦苦闘する音だけが
周囲を覆い尽くしていく。

「・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・」

「フッ！」
「ハアアッ！」
二人はパリーン、という防壁の断末魔を合図に
全く同じタイミングで静寂を突き破った。

「お前は!？」

「なんだ、またお前か。」

身構えるユウスケクウガに対し、

ディケイドはやれやれと言わんばかりに肩を竦めた。

二人の言うお前とは、地獄大使その人。

ただ、前回と違いつころどころ身体が焼けただれている。

恐らくは前回の毒の影響だろうがそんな事はどこ吹く風、完全に優位に立っている者の笑みを浮かべている。

「フン、まあそう言うな。今回だけは戦いに来たのではない。」

「どういうこつた、お前等の目的は

ディケイドとり・イマジネーションだろーが。

ここにやその両方がいんだぜ？」

言い、前に出ようとした巧はカブトに止められた。

変身していない状態で近付かせては危険だという

彼なりの優しさなのだろうが、

強引に腕を掴まれたのが気に入らなかったのか

ムスツとしてその手を振り払った。

「その通りだ、だからこそ無駄な犠牲は出さずに手に入れる。」

地獄大使は合図し、一体の戦闘員を呼び寄せた。

いや、よく見ると一体ではない。

戦闘員の後ろにいる為によく姿が見えなかったが、

どうやらもう一体いるようだ。

「お爺ちゃん、土君！」

「夏海……！」

光夏海だ。縄で縛られており、戦闘員に無理矢理歩かされている。ユウスケと栄次郎がすぐに駆け寄ろうとしたが、

地獄大使が彼等の足下に鞭を叩き付けた。

「おおっと、感動の再会にはまだ早い。」

まずは全員、変身を解いてもらおうか。」

「……」

予想の範疇である要求だった。

確認できる敵は地獄大使と戦闘員一体のみ。

万一戦闘となっても一度変身を解いたからと言って不利になるような状況ではないだろう。

この場のほとんどはそう考え、変身を解いた。

そうしなかったライダーは三人。

その内の一人が片手を挙げて言う。

「あ……さ、俺達顔だけじゃ駄目かい？」

響鬼達 鬼の一同だった。

彼等は変身で自らの衣服を犠牲にするので、

変身を解けば全裸だ。渋るのも無理はないだろう。

「……ああ、構わん好きにしろ。」

地獄大使の興味なさげな応えに鬼達はひとまず安堵する。

「さてここからが本題だ。この女と引き替えにディケイドと

リ・イマジネーションのクウガを渡せ。」

「よし、分かった。」

考える間もなく、土があっさりと応えた。

「ククッ、話が早くて助かる。」

「分かっているなデイケイド、
小野寺ユウスケが死ねばクウガの世界も消滅する。
お前が大シヨツカーに手を貸す事になれば
俺達は今度こそお前を倒さざるを得なくなる。」
「心配ねえよ。全ての破壊者とその手下が
そう簡単に利用されてたまるかよ。」
「いや俺は手下じゃないんだけど・・・
とにかく返り討ちにしてやりますよ。
それより今は夏海ちゃんを！」
ユウスケまで同調し、剣崎の忠告にも全く揺るがない。

戦闘員が二人を縛り、逆に夏海の拘束を解いた。

「夏海ちゃん、また後でね。」

「はい、気を付けて。」

擦れ違いに短い会話をするユウスケと夏海。

だがそんな二人が面白くないのか戦闘員が横槍を入れてくる。

「さつさとしろ。」

「分かった分かった、じゃあさつさとするか！」

士は縛られたまま戦闘員にタツクルをかまし、
戦闘員の手からピストルが宙へ舞う。

それを見た地獄大使はすぐに鞭を振り上げた。

・・・が、振り下ろす事は出来なかった。

「ラアアアッ！」

ウルフォルフェノクがそれより早く飛び掛かってきたのだ。

その隙に士達は拘束を解く。

「ナツミカン、早くこれほどけ！」

結び目のある背を向け、凶々しい態度で夏海に命令する士。
流石に慣れっこな夏海はブツブツと文句を言いながら
言われた通りに

「イヤです。」

すると思っていた。

「あ？！」

状況が状況なだけに、さしもの士も思わず聞き返してしまった。

「だって私、士君達を捕まえてくるように言われてるんですよ？」

「！　デイケイド、その女から離れる！」

天道の怒号が二人の思考を同一の結論へ導くが、
その頃には夏海は異形へと変わっていた。

「さあ、大人しく来てもらおうか！」

変身を解いた夏海はウカワームの本性を現し、
抵抗できない二人を両手に軽々と掴み挙げた。

「！」

「余所見をするなあ！」

ウルフォルフェノクも一瞬そちらに気を取られ、
地獄大使の電磁鞭の餌食となった。

あまり防御に優れないウルフォルフェノクはゴロゴロと無様に
転がり、一気に距離が離れた。

「では諸君、そこで死ぬまで念仏を唱えている！」

変身して対抗しようとしたライダー達の周囲のシャッターが閉まる。
閉じこめたつもりか、と思えば今度は煙がもうもつと漂ってくる。

猛毒だ。

大量の毒を浴びた地獄大使は、再改造で

更に強力な毒素を体内に培養していたのだ。
人間はおるか怪人であろうとひとまりもない。

「グウウ!? ガホツ・・・」

一人、また一人と中のライダー達が倒れていく様をモニターで
確認し、地獄大使は口元を吊り上げた。

第二十四話「取り引き」（後書き）

死神大使「お久し振りです。今回は皆さん毒にやられてしまっているのですね。」

メンバー「少な目でやっていききたいと思いまーす。」

士「ようやく俺達が主体の話になってくるのか？」

春香「分からないわよ？私の名前盗った女もやっとな再登場かと思えば偽物だったし。」

何より書いてんのはこの糞作者なのよ？」

慎「あーそれスゲー説得力あるー。」

ユウスケ「みんな辛辣だなあ、同意見だけど。」

死神大使「まあ、これも自業自得というヤツですね。」

人気も落ちてきてるようだし・・・これと呼んでくださっている方には

本当に感謝しなければなりません。」

海東「と言う訳で、次回をお楽しみに・・・してくれるのかな？」

こんなの、このサイトに眠るお宝に遠く及ばないけど。」

純「フェイント、ですか。アイツらしい。」

第二十五話「野望と約束の海東」(前書き)

そろそろオーズも終わるな・・八八・・

第二十五話「野望と約束の海東」

「そこだっ！」

デイエンドの左肩にグレイブライザーが深々と食い込む。

「終わりだ、大樹。俺は今度こそ躊躇わない……俺の野望の為に！」

鬼気迫る声音でライザーを握る手に力を込めるグレイブ。

「ッ・悪いね兄さん……それはお互い様だよ！」

しかしデイエンドがライザーの刀身を鷲掴み、

それと同時にデイエンドライバーを突き付けた。

「僕も今回は迷うワケにはいかない、彼等との約束と、

最高のお宝
仲間の為にさー！」

「ぐうっああああー！！！」

言葉の通り躊躇無く引き金が引かれ、グレイブバツクルが大破。

変身を強制解除された海東純一もその余波で若干後方へ吹き飛ばされた。

「ハア・ハア……さあ、今度こそ終わりだよ兄さん。」

荒い息をしながらなおも純一に銃を向けるデイエンド。

絶体絶命とも言える状況で、

純一は未だに笑みを崩さないでいた。

「……ハハッ、そうかな？」

その吊り上がった口元からは軽口と共に

緑色の血が流れ出ている。

「！」

気付くと、純一がこちらに手をかざしていた。

反射的に発砲するが、同時にデイエンドの周囲で爆発が起こる。

「!?!? くっ……!」

一般的な考えでいくと今の弾丸で純一は死んだだろう。

しかし、彼が何事もなく立っているであろう事は

見るまでもなく分かっている。

デイエンドは爆風に耐え、純一のいる前方に目を凝らす。

煙の中でよく見えないが確かにそこにいるのが気配で分かった。

「……………」

案の定、煙が晴れてくるにつれて浮かび上がってきたシルエットは倒れ伏した純一のものではなかった。

「クツ……ソオオオオオッ!!」

デイエンドは、殺し損ねた怪物にデイエンドライバーを乱射するが怪物はそれを防ごうともしない。

「ところで大樹、俺は手負いのお前がいつまで

彼等の攻撃に耐えきれるか興味があるんだ。協力してくれるな？」

怪物の影が伸び、新たにアルビノローチの群れが生まれてきた。

最悪の形ではあるが戦闘が一段落ついてしまったせいで

デイエンドは力が抜けてしまい思うように身体が動かない。

更に言うと、こういった不利な戦況を抜け出す際の十八番である

デイエンドインビジブルのカードは城への侵入時に、

他の仮面ライダーを召喚して援護させるカメンライドも

慎と春香を救出した時に使用済みだ。

「どうした大樹、そんな調子じゃすぐ死ぬぞ？」

必死で現状をくぐり抜ける策を練るデイエンドを嘲り、

アルビノローチ達に合図を送る怪物。

数十匹という数のアルビノローチが一斉に襲いかかってきた。

「オイ、お前達!？」

剣崎は倒れた仲間達に大声で呼びかけるが、
誰一人起き上がる様子は無い。
立っているのは剣崎と始だけだ。

「……どうやらこの毒、俺達アンデッドには効かないらしいな。
だがどうする?このままでは全員死ぬぞ。」

「取り敢えず、この密閉された空間をどうにかしてくれ。」

俺は……どうにかして解毒してみる。」

「この毒が何なのか見当がついているのか?」

「いや、ただ彼がいる。唯一の望みって事になるけどな。」

剣崎が見据えたのは、
五代雄介。

その表情は心なしか他より穏やかな印象を受ける。

「クウガのベルトの中の霊石、アマダムは以前驚異的な早さで
毒の抗体を作って五代さんの命を救おうとした。

当時はそれでも間に合わなかったらしいが、

アマダムと完全に一体化した今の五代さんなら大丈夫だろう。

問題はその抗体からワクチンか何かを作る事が出来るか、だ。」
そう言つて剣崎は太牙の懐から空になつた注射器を取り出した。
それ以上口々に器具もない中で
ワクチンを作るなどかなり不可能に近いが、
二人共それ以上言葉を発する事は無かつた。

(それもある・・・だが一番気掛かりなのは
俺達は何の異常も無いという事だ。)

そう、妙なのだ。

不死生物であるアンデッドを殺す事は出来ないとしても、
大シヨツカーならば動けなくするくらい毒は作れて当然だろう。
始は壁に向かい黙つてラウズカードを手にする。

と、その時だつた。

チエンジマンティスのカードが始の意志に反して手を離れ、
ある人物の元へ飛んでいく。

「!?!」

「おつと、そう恐ろしい顔をするなよ。

これも俺の仕事の内だ。」

黄色のチエンジケルベロスのカードをこちらに向けている
本来の自分と瓜二つの怪物に始は目を見開いた。

「・・・何者だ貴様。」

「海東純一、またの名を

三人目のジョーカーアンデッド、アルビノジョーカー。」

「なんだと?」

「そして次の仕事はお前達を確実に封印する事・・・。」

アルビノジョーカーは自分の身の丈程もある大鎌デスサイズを出現
させると、

「クッ!?」

始から見ても気味悪く、それでいて素早い動きで急接近してきた。カリスへ変身する事の出来ない始は代わりのカードを出して吸収させる訳にもいかず

ジョーカーアンデッドの姿に戻る事を余儀なくされた。

始とアルビノ両者の鎌が派手に火花を上げる。

「・・・リ・イマジネーションが、オリジナルに勝てるか?」
「確かめてみるか?」

不敵にデスサイズを持っていない掌をかざすアルビノ。衝撃波ヘルフレイムで爆発が起きるが始はすぐさま回避

「ガアああッ!」

しようとして踏み止まった。

危うく倒れている翔太郎に被害が及びそうになった為だ。

「始!」

「俺に構うな、お前はそちらに集中している!」

思わず叫んだ剣崎を一喝し、

アルビノとは対照的な小鎌 デススラッシャーから

強力な破壊光輪を発射。

アルビノはヘルフレイムで相殺し三枚のチェンジケルベロスを取り出した。

「さあ、滅びの始まりだ。

念仏でも唱えろよ、人間らしく見えるぞ?」

アルビノの瞳から真紅の閃光が走り、

究極の人造アンデッド、ケルベロスが解放された。

「っ、ハア・・・ハ・・・ッ・・・。」
左肩と手からボタボタと血を流し、なるべく声を出さずに呼吸を整える。

我ながら、この傷でよく逃げ切れたものだ。

怪物がアルビノローチに合図を送る数瞬前に
デイエンドは手を打っていた。

【ATTACK RIDE ILLUSION!】

【【FINAL ATTACK RIDE DI-DI-D

I DIEND!】】】

六体に分身し本物以外の五体がデイメンションシュートで
無理矢理退路を開く・・・土壇場に考えた力押しな策だが、
この通り首の皮は繋がったままで済んでいる。

「・・・・・・・・。」

加減などしなかった。

迷いも無かった。

しかし敗北した。

何も出来なかった。

今までの自分と何一つ変わらない。

（そう急には変わらない、か。

・・・でも今は無理にでも変えなきゃならない。

それが僕の、あの世界で与えられた役割だったんだ。）

手早く応急処置を済ませ、愛用の銃を手に、

海東大樹は再び兄の元へと向かう。

異形と成り果てた兄を引きずってでも、慎達との約束を果たす為に、
丁度近くを搜索に来ていたアルビノローチ達の目の前の飛び出す。

【KAMEN RIDE DIEND!!】

第二十五話「野望と約束の海東」（後書き）

死神大使「いやはや、今回は独自設定が多いので僕だけで失礼します。

海東兄がアルビノになったのは、MISSING ACE
Eのアルビノは僕の捉え方でいくと

ケルベロスに適合した志村が天王寺によって何度も実験的にグレイブに変身させられ、

ジョーカー化したという事に由来します。」

死神大使「剣崎が始を封印した後にジョーカー化し、まず天王寺を殺した。

そして次に烏丸所長…とMISSING ACEにつな
がっていく訳です。」

死神大使「橘さんは死んだ天王寺が人体実験を行っていた事を知り、
志村と出会う訳です。

（そこでジョーカー化はまだしていない、と

うそぶく志村を疑わないのが橘さんクオリティ）」

死神大使「そしてアンドッド達が解放されるとグレイブに変身して
もジョーカー化しないように

ケルベロスのカードを分裂させ、ランスとラルクを造り
ます。

例えるならグレイブのカードはコアメダル、

他はセルメダルみたいなものです。」

死神大使「で、海東兄がアルビノになった経緯ですが、それは流石
に本編でやらなきゃですね。

あと一ヶ月で一周年を迎えてしまうこの小説・・・

脳内補完程度のもりだったのに何やってんだろ。」

第二十六話「基本はそんなに変わらないから」(前書き)

虎太郎のキャラソン『Be Free!』から取ったタイトルですが、当然出てきません

第二十六話「基本はそんなに変わらないから」

コイツは、危険だ。

地獄の番犬の名を冠する人造アンデッドを前に最強である筈の本能がそう告げている。

始は足が翔太郎に触れるまで、後退っていた事実気付かなかった。

「どうした、怖じ気付いたのか？」

そんな始をアルビノは嘲り、ケルベロスと共に攻撃に出た。

二体の攻撃を分けて見れば、少しでも腕に覚えのある者なら回避や防御はおるかカウンターを当てる事さえも容易いなんとも単純明快なものである。

しかし、驚愕から気の抜けた敵を二対一で仕留めるには何の問題もない。

ケルベロスを食べ入るように見ていた始は

どうにかケルベロスの鉤爪を受け止める事には成功したが、

「ぐお!?」

同時にデススラッシャーが直撃してしまった。

鮮やかな緑色の血液が、禍々しいまでに白い鎌を濡らしていく。

ケルベロスが追い打ちにと放った光弾を鎌で弾き、

そのままの勢いで破壊光輪を飛ばす。

「グル・・・ガアアアあああ！」

が、ケルベロスは防ごうともせず突進してきた。

「何!?うごっつ！」

壁に叩き付けられ、気を失いそうになる。

軽く頭を振って意識を回復させると、妙な音が聞こえた。

「ム、闘争本能のみで動くというのも考え物だな。」
アルビノはヒヨイ、と先程落ちた右腕を拾い上げた。
緑の血を大量に吹き出しながらバタバタ動くそれは、
見ていて滑稽でもあり、不気味でもある。

その腕の主であるケルベロスとは言えば
未練も痛みも感じている様子はなく、
ひよっとすると片腕を失った事に
気付いてすらいないのかもしれない。

兎に角ケルベロスは痛みに呻く事も怒り狂って凶暴化する事もなく、
これまで通りの獰猛さでこちらを狙っている。

だが、攻撃の単調さもこれまでと同じだ。
うまくいけばカウンターで封印しアルビノとの一騎打ちに持ち込め
る。

「はあああつ！」

鉤爪を紙一重でかわし、がら空きになっている右側に回り込む。
ズブ、とデススラツシャーがケルベロスの脇腹を捉えた。

始はアルビノが横槍を入れる前に封印すべく一気に鎌を引き抜く。

「・・・ガッ」

しかし、悲鳴にも近い声を上げたのは始の方だった。
まるで攻撃を受けた事実などないかのような速さで
始を蹴倒し、踏みにじる。

始に屈辱を味わわせる為ではない。

「ゲウウ・・・ッ！！」

そのまま踏み潰してしまおうとしているのだ。

「ア・・・ガ・・・」

「変身！」

「ギャウツ!？」 「うごっ！」

青白く発光する、見慣れた長方形。

オリハルコンエレメントが始ごとケルベロスを吹っ飛ばした。

「剣崎・・・何を、やっている・・・!?」

「悪い始。俺、あれから結構変わった気でいたけど・・・」

息も絶え絶えの始を気にかけてながら、剣崎一真が光を通過する。

「やっぱり俺は・・・俺みたいだ」

「・・・そう、か。なら、それで良い」

自分を見下ろしている、いや俯いているのだろうか、

仮面ライダー^{ブレイド}剣を見て、

始は妙に納得した。

合理的な思考で動くなどこの男らしくない。

かつてとても信じられなかった直線的な行動が、

今やそう来なくてはと思う。

「だが決着は急ぐ、やるぞ剣崎」

「ああ、分かってる！」

【G】 ABSORB QUEEN , EVOLUTION KIN

「なあ、アイツ等に撒き散らしてった臭い息は何だ？」

「分かっていて聞くな、時間稼ぎのつもりか？」

士がそれとなく毒に関して探りを入れてみるが、地獄大使は乗ってこない。

短気な奴だと侮りすぎていたか、と思っただが

今はそれ以上に出来る事もない。

もつとも、たとえ毒の正体を聞き出せたとして捕まっているのではどうにもならないが。

(士、どうにかならないか?)

(お前な、たまには自分でモノを考えてみるよ。

俺だって万能って訳じゃない)

(そりゃそうかもしんじゃないけど・・・)

何でそんなに冷静なんだよ!?)

(まあジタバタしてもしゃーねえし、

なんか、大丈夫な気がすんだよ)

(んな楽観的で大丈夫なのかy「ってうわ!?)

作戦会議、と言うより雑談に花を咲かせる士とユウスケを遮り、近くの壁が派手な音を上げて砕けた。

「敵か!？」

地獄大使は早くも壁を破壊した相手に毒霧を射出した。

だが、相手はどこ吹く風と数え切れない銃弾をお見舞いしてきた。

「ワシの毒が効かんだと!？」

ウカワームと共に銃弾を腕で軽く防御し目を凝らした。

腹立だしい事に自分の毒霧のせいで相手を黙視できない上に、戦闘員が巻き添えを食ってしまい邪魔で仕方がない。

「ええい、邪魔だッ！」

腹いせに足下に転がっていた戦闘員を蹴飛ばし、飛んでくる銃弾を頼りに敵の場所を特定する。

「ぬうん！」

電磁鞭が敵を絡め取った。

確かな手応えを感じた地獄大使はすぐさま電流を流し込む。

・・・が、直後にその手応えは消えてしまった。

「なにっ!？」

そうこうしている内に毒霧が晴れてくる。

「海東の奴、厄介事押し付けてきやがったか」

「でもまあ、これは結果オーライだろ」

「き、貴様等・・・!？」

「「変身!」「」

慎と春香をそつと退がらせるデイケイドとクウガ。

それを見届けると、役目を終えたギャレンとレンゲルは消滅した。

「そう考えりゃ俺の勘も捨てたもんじゃねえな」

「五代さん達の解毒方法と・・・夏海ちゃんの居場所を教えてください!」

第二十六話「基本はそんなに変わらないから」（後書き）

死神大使「この小説が一周年を迎えた！素晴らしいッ！」
全員「素晴らしいっねーよ！」

士「ようやく俺の出番が出てきたのは良いが、有り得ないだろ・・・」

剣崎「デイケイドが色々な世界を旅する話ならともかく、

完結編を未だにやってるなんて・・・」

ユウスケ「ここだけだろ、間違いなく」

始「文才ももう芸術的なまでに壊滅的だし、

待ってる読者もいないだろうし、もう本当にダメだな。出番があっても素直に喜べん」

死神大使「そこまで言いますか・・・いやまあ最近スランプ中というか

ラストは決まってるけどどう繋げるかは行き当たりばったりというか・・・」

士「せいぜい失踪だけはしないようにしろよ。」

死神大使「はい・・・」

第二十七話「異形の戦友」

「丁度良い、どうせ貴様は殺すのだ。」

リ・イマジネーション相手ならばわけはない！」

怒号と共にアイアンクローが振るわれた。

クウガは咄嗟に両腕で受け止めたが、

腕がミシミシと鳴り、これ以上は踏ん張りきれないと

主張しているようだった。アマダムがまだ本調子ではないのか

或いは単純にユウスケの力不足なのか。

「グ・・・お、俺は五代さんには適わないかもしれないけどっ、

誰かの笑顔を壊すような奴に・・・負けられない！」

「ユウスケ・・・うおっ?!」

防戦一方になりかかっているクウガに加勢しようと

向けられた銃が宙を飛ぶ。

反射的にそれを目で追おうとすると、

いつの間にかウカワームがデイケイドの目と鼻の先に現れた。

「ニセミカンか、面倒臭い事してくれるぜ」

ライドブツカーがなくては

武器による攻撃もカードを使う事も出来ない。

素手でもある程度戦えるが、

クロックアップで動く間もなくやられるだろう。

ザリガーナのそれより巨大な鋏が

デイケイドの身体から火花を派手に撒き散らした。

「・・・?!」

ガシ、と鋏の右手を抱え込むように掴まれた。

「へへ、捕まえたぜ？」

「愚かな・・・たとえ私の動きを封じても

クロツクアップに付いて行けねば貴様に勝機は無い」
「さあ、どうかな!？」

ウカワームはクロツクアップを発動し、
取り敢えずデイケイドの腕を振り解こうとしてみたが、
流石に力比べでは敵わないらしい。

すぐに諦め空いた左腕でパンチを叩き込んだ。

ウカワームの感覚ではそれなりの間を空けてパンチしているが、
デイケイドには目にも止まらぬ連続パンチの応酬である。

「ガハツ・・・このおおおっ！」

デイケイドはそれらを全く無視して力任せに
ウカワームを抱えたまま壁に叩き付けた。

「やかましいぞ、虫が！」

「おあッ!？」

足蹴られ、その場に呻くクウガを見下ろした地獄大使は
面白いモノを見付けた。

「フン・・・折角だ、使つてやるか」

ライドブツカーを鞭で器用に拾い上げ、クウガに向ける。

「! 超変身!！」

ドラゴンフォームで跳躍し銃弾を回避したが、
それは地獄大使の計算の内だった。

「甘いわ！」

上空に佇むクウガを電磁鞭が絡め捕る。

「しまっ・・・うああああ！」

地獄大使はスパークを上げて悶えるクウガに再び銃口を向け

「!?!」

ようとしたところで異変に気付いた。

明らかに鞭の電流を超えたスパークが上がっている。
いや、クウガが放っているのだ。

「まさか・・・ッ!」

咄嗟にクウガから離れた直後、

捨ててきた愛用の鞭はボロボロに弾けた。

クウガは動いてすらない。

その体から溢れ出すエネルギーの余波だけで、
鞭は耐え切れず文字通り無造作に引き千切られたのだ。

「・・・・・・・・」

凄まじき戦士が、静かに地獄大使を見据えた。

「ユウスケ?!」

凄まじき戦士の力の片鱗を感じとったデイケイドは思わず戦慄し、
ウカワームを足で地に押さえつけていた力を緩めてしまっていた。
その絶好機にウカワームもまた、
デイケイドを攻撃する気になれない。
ピクリとでも動けば押し潰されそうな圧迫感。
そのために誰一人として動けずにいた。

「ウ・・・」

「!?!」

思い出したように凄まじき戦士が動き出した瞬間、
ウカワームはクロックアップした。
いくら力があるうとクロックアップの前では意味は成さない、
そう自分に言い聞かせるように考えて。

「うおおおお!!」

全身全霊の力を込めて、鉄を漆黒の鎧にぶつける。

事すらできなかった。

つい先程まで手にあつた剣が今は無くなっている。その代わりとでも言う様に、

凄まじき戦士の手には黒剣が握られていた。

クロツクアップしていても見えない速さで切り裂かれた。

果たしてそう理解することができたのだろうか。

すぐに空いた左拳が飛び、ウカワームは爆散した。技でもなんでもない、ただのパンチだ。

『気付けばウカワームがやられていた』

その程度にしか見えなかったが、だからこそ戦士がどれだけ桁違いかよく分かる。

地獄大使がいつの間にかいなくなっているところを見ると、ウカワームが動き出した頃には既にオーロラを潜っていたのだろう。

「ユウスケ、アイツまた逃げやがったぜ」
警戒しつつも、戦士が友である事を願って語りかける。

もし、前回のようにならぬように自我を失っているのなら・・・

「あ、ああ・・・悪い、ちょっと動けそうにない」

戦士 ユウスケは、心配したこちらが馬鹿らしくなるほど気の抜けた声を出して座り込んだ。

見る見る内に黒が元の赤まで脱色し棘のあつた装甲は丸みを帯びた。

「ハッ・・・まあお前らしいが、流星に休んでる暇はないぞ」
「分かっているって、」

けどちよつとM【FINAL FORM RIDE K-K-K
KUGA!】ってうわ?!」

【EVOLUTION KING】

ラウズアブソーバーから黄金色に輝くラウズカードが出現、
ブレイドを囲うような形で大きく回転を始める。

「馬鹿め・・・ケルベロス！」

「ギャオオルアッ！」

ケルベロスはラウズカードを吸収すべく雄叫びを上げた。

「・・・!？」

しかし何も起きないまま、ブレイドは光の衣を纏い、
最強の姿キングフォームへ変身を遂げた。

「無駄だ、俺のカードは俺を倒さなければ吸収できない。

そして、お前に俺は倒せない！」

挑発的に宣言しブレイドラウザーの切っ先から
ディアースンダーを放つ。

予想通りケルベロスはダメージに構わず真っ直ぐに突っ切って来た。
最早致命傷（アンデッドには不適切な表現だが）でも
ダメージにはならないと分かっている。

ならば、正面から受けて立つのみ。

「ゲルツ・・・」

「はああああ・・・」

すぐに立ち上がるケルベロスに

ブレイドは召喚した大剣 キングラウザーへ

自らの身体から溢れ出る光を集めていく。

【?TEN、?JACK、?QUEEN、?KING、?
ACE】

「クツ、邪魔を・・・!」

「あの男に、近付くなあああ!」

ケルベロスの助太刀に入ろうとしたアルビノは始が抑えている。

「ギアアア!!」

【ROYAL STRAIGHT FLUSH】
「ウエエエエエエイ!」

「グ、オオ・・・」

ケルベロスは瞬間に収縮し、

ブレイドの手には二枚のラウズカードが収まる。

間髪入れずにブレイドはその内の一枚を投げた。

「始、受け取れ!」

「!・・・変身」

【CHANGE】

「ガッ!」

始の醜い姿がカリスへと変化したとほぼ同時に
カリスアローがアルビノを斬りつけた。

「これは・・・まずいな」

【FLOAT、DRILL、TORNADO
SPINNING DANCE】

「はあああ・・・」

カリスの身体が宙に浮き、竜巻がその身を包み込む。
アルビノの放ったヘルフレイムを全て吹き飛ばし、
突風の中でカリスがその両足をアルビノに向けた！

第二十七話「異形の戦友」(後書き)

死神大使「・・・純一君。わざわざ君が来た用件を伺おう。」

一体、何を心配しているのかね？新生BOARDは「

純一「では、率直に。弊社と貴方との間に締結した

ディケイド小説開発計画において、約一週間の遅れが生じています」

死神大使「細かいなあ。大した数字ではない」

(腹パン)

純一「作者さん。投資先は、お宅だけではないのですよ？」

死神大使「わ・・・分かって・・・ゴホッ、いる」

純一「では、具体的な修正案をお聞かせ願えますか？」

死神大使「え・・・えつと・・・テスト勉強を諦める！」

純一「良い修正案だ、感動的だな、だが無意味だ」

死神大使「スンマセンでした・・・」

はい、遅れた上に変な茶番をしてすいませんでした。

遅れを取り戻せるように頑張ります。

取り敢えず、ブレイドのカードが吸収されなかった理由を細くしておきます。

何度も言うように剣崎は全てのスペードのラウズカードと融合しているのです

剣崎が出すカードは他のアンデッドが出す武器のようなもので、厳密にはラウズカードではありません。

わざわざカードの形にしているのは剣崎が戦いやすいからです。吸収したければ剣崎ジョーカーごと吸収するしかありません。

第二十八話「情報」

「はあああ!!」
スピニングダンスがアルビノに直撃する

寸前、トランプが舞った。

カリスの蹴りは虚しく空を切り、奥の壁を派手に吹き飛ばす。

「! これは・・・!」

すぐに体勢を立て直したが、案の定そこにアルビノは存在せず
純白のマントが爆風になびいていた。

「フム・・・占いより元気そうで何よりだ、カリス」

トランプを眺めてカリスと対峙するジエネラル・シャドウ。

対してカリスはある推測を立てていた。

「・・・アンデッドでもない貴様が無事と言う事は」

「ああ、貴様の期待通りだ」

シャドウが持っていたトランプの裏から、手品のように小瓶が現れた。

回想

「クツ・・・話が違う・・・何故アヤツが“究極の闇”に・・・」

おそるるに足らぬと思い込んでいた相手から、
地獄大使は無様にも逃げていた。

そんな彼を冷たく見据える影が言葉を発する。

「さあな、だがだからといって逃げ帰ろうとは見苦しい」

「！ き、キサマは?!」

「シャドウ剣！」

フエンシングで使うそれのように細身の剣は
寸分違わずあるモノを捉えた。

「！ それは・・・」

「預からせてもらうぞ、トランプフェイド！」

「こうしている間にもそやつ等を蝕む毒の解毒薬・・・

喉から手が出るほど欲しているものだろう?」

小瓶はそんなざいにカリスへ放られた。

「何故こんな真似をする」

「俺は卑劣な手段を執ってまで

貴様等に勝とうとは考えていない。ただそれだけの事だ」

カリスはやや戸惑う素振りを見せたが、

小瓶をブレイドに渡し、全員に使うよう指示した。

「・・・まあ良い、礼を言っておく」

「フツ、律儀なものだな」

シヤドウはトランプフェイドで姿を消そうとし、止めた。

「ではお前の礼儀に免じてもう一つ・・・」

「お、重い・・・」

「おいおい、レディに対して失礼だぞ？」

「そりゃ人間三人も乗っけてたら重いだろ！」

クウガゴウラムは憤と春香を背に乗せ、

デイケイドを手（前足）でぶら下げてフラフラと飛んでいた。

ユウスケの疲労もあって明らかに重量オーバー。

せいぜい歩きよりはマシという程度にしかスピードが出せていない。

「バイクねえんだからこれが一番速いんだよ、我慢しろ」

「くそつ・・・覚えてるよ土！」

「それ、僕も乗せてくれないかい？」

不意に聞こえた声の主は壁に寄り掛かり、

彼等が良く知るシアンと黒を基調とした装甲の仮面ライダーだった。

「兄さんはその二人を追ってると思ってたのに、参ってしまっな」

「海東か。乗せてやるのは構わんが、厄介事押し付けんなよ」

デイケイドはユウスケの抗議の声をさらりと流し、

自分はディエンドに文句を言う。

「ごめんごめん、でも士と僕の仲だろっ?」

「急に馴れ馴れしくすんな気持ち悪い、どうせお宝探しに夢中でこいつ等の事まで手が回らなかつたんだろ」

「まあそう言わないでくれよ、戦果はあまり良いとは言えないがそこそこの情報があるからな」

「リ・イマジネーションの世界は、もう少して全滅する」

「リ・イマジネーションの世界は、あと僅かで全滅するぞ?」

第二十八話「情報」（後書き）

純「流石作者さん、遅れを取り戻しましたね」

海東「兄さん、そのネタまだやるのかい・・・」

死神大使「ストロンガー名物（？）シャドウの密告キターーーー！」

士「今回もまた随分と短いが・・・ペースアップできるかも知れな
いと言っるのは本当か？」

死神大使「はい、多分」

剣崎「お前って多分ばかりだよな」

第二十九話「消されたライダー」

「どういう事だ?!」

この世界でライダーが消えなければ

『滅び』は止められるんじゃないのか!？」

「そう吠えるなブレイド。」

確かにその通りだが、デイケイドが関われば話は違ってくる」

怒声を上げてシャドウに掴みかかるブレイドだが、

シャドウはトランプフェイドで見ている憎たらしい程

澄ました様子で背後で腕を組み、壁にもたれていた。

「デイケイドを監視し続けていた責様等なら知っているだろう？」

ほとんどの世界でデイケイドは仮面ライダーを消している」

「龍騎の世界のインペラーとアビス・・・それにネガの世界の事が」

「それだけではない。キバの世界のビートルファンガイア、

ブレイドの世界のジョーカー、電王の世界のシルバラ、ゴルドラ、

カブトの世界のフィロキセラワーム、

シンケンジャーの世界のチノマナコ。」

「彼等もれっきとした仮面ライダーだったって事さ。」

更にはアギトの世界のギルス、G3-X、

響鬼の世界の斬鬼、威吹鬼もまたある意味では

デイケイドが来た事によって消えた事になる。

となればどの世界も滅ぶのは時間の問題だろうね。

残るはBLACKとRX、アマゾン、そして小野寺君の世界だけだ」

まあどうでも良いんだけどね、と続いて出てきそうな程
デイエンドは軽々しくそう説明した。

「・・・お前の世界は？ あそこは誰も消してないだろ」
「この通り、さ」

士の問いには海東大樹の デイエンドの世界の住人である
グレイブとランスのひしゃげたバツクルを見せる事で答えた。

「僕も近い内その二人と一緒に消えるんだろうね、残念だけど」

「！？ お前・・・」

「おっと、今君にネガティブになってもらっちゃ困る。」

他はともかくこのバツクルは僕のした事だしね」

気にかける様子のデイケイドを制し、バツクルを捨てるデイエンド。
とても消えゆく者とは思えない態度に

デイケイドは仮面の上から頭を搔いた。

「まあ今更後悔してられないのは分かるけどな・・・」

「だろう？ だからさ・・・もっと急いでくれよ小野寺君」

「お前等・・・コレもう歩いた方が絶対早いだろ・・・」

嫌がらせか・・・!？」

デイエンドは突然ノロノロと飛行するクウガゴウラムに振るが、
既に喋るのも辛そうなユウスケには殆ど耳に入っていないようだった。

「ハハ、ごめんごめん。ちょっと用が出来たから降りてあげるよ」

「！ 誰だ?!」

ブレイドの怪力で投げられたブレイラウザーが、叩き落とされた。

「何の真似たジェネラル・シャドウ、

敵に情報はおろか解毒薬まで与えるとは」

既にカニレーザーの姿となつて壁の大穴から現れたドクトルGが
手斧と短剣を携え、静かな憤怒の感情を込めてシャドウを睨んだ。

「貴様と同じ死に損ないの卑怯な手段を封じてやったまでの事。

それにこの程度の情報が知れても大した障害になるまい」

「フン・・・本来ならばこの場で処刑してやりたいが

今はこのライダー共が優先だ。

嫌とは言わせん、手伝えシャドウ!」

「っ?!」

斬りかかる斧を咄嗟にカリスアローで受け止め、
即座に蹴りを入れて倒れている面々から引き離す。

「興の冷める事をしてくれる・・・

最低限の手伝いにさせてもらうぞドクトルG」

対するシャドウはつまらなさそうに

トランプショットを数枚ブレイドに放った。

「グッ」

が、キングフォームの装甲はびくともしておらず、
衝撃でブレイドを半歩下からせた程度にしか効果が無かった。

「さあ、貴様の仲間達を守って見せる」

「!」

しかしその隙にトランプが舞い、

消えたシャドウと入れ替わるように無数の戦闘員達が
周囲を取り囲むように湧いて出た。

普段であれば決して後れを取るような相手ではないが、
意識がない巧達が狙われる中ブレイド一人が彼等を守りつつ
大人数を相手にするのは難しい。

「止めるっ！」

あの近距離で戦闘員を爆発させれば

確実にこちらでも被害が出ると踏んだブレイドは

牽制としてデИАーサンダーを放つが

全ての戦闘員を止められるはずもなく、

大半が手に持ったナイフで巧達に襲いかかった。

クウガゴウラムから降り立ったデイエンドはふう……と息を吐き、
軽くデイエンドライバーを持ち上げた。

「覗き見とは悪趣味なんじゃないですかあ？」

鳴滝さんっ！」

放たれたエネルギー弾はオーロラによって吸い込まれるが、
その奥には眼鏡と薄い褐色のコートにフェルト帽を被った
士達の良く知る格好をした壮年の男 鳴滝が立っていた。

「鳴滝……」

「すまない海東君。私もそろそろ

「デイケイドと決着を着けなくてはと思っただけね」

「決着？ よく言うな。」

「お前自身と戦った記憶は無いぜ？」

頼む、世界を救ってくれ 憎いデイケイドにそう願った鳴滝。

それが今決着を着けようと言う。

その矛盾に土は当然の疑問を口にした。

「・・・今は『あの時』より更に深刻だろ、

なんで邪魔するような形でそんな事を」

「・・・それでも、今しか無いからだ。貴様を潰し、そして・・・」

そして何なのか、その続きの言葉が紡がれる事はなかった。

代わりと言うように

「それが私の、世界よりも重い望みだ！

今度こそ死ね、仮面ライダーデイケイド！！」

怒声を上げ、銀色のオーロラが周囲の空間ごと

デイケイド達を包み出した。

「やるしかないか・・・ユウスケ、海東。先行ってる」

既にデイケイドは生身の人間である鳴滝に

これまでにない苦戦を強いられる事が大体分かっていた。

第二十九話「消されたライダー」（後書き）

士「ようやく俺に出番が出てきたのは良いが・・・」

海東「『早く出せるかも（キリッ）』（笑）」

死神大使「それについてはもうひたすらごめんなさい

いまいちモチベーション上がなくて・・・」

海東「はい、こっから作者のスーパー言い訳タイムだ」

死神大使「え・・・いや・・・うん、やっぱいいです、ホントごめんなさい」

始「・・・剣崎、ぶつちやけ俺が一人で戦ってる間何してたんだ？

五代の血を周りに打っていく事くらいしかなかっただろうに」

剣崎「そ、そんな事無いぞ！アンデッドになっただからある程度なら血液の成分まで見える。

そこから五代さんの血液打っても血液型的に問題ないか、

打つにしてもどのくらいの量が適切か・・・」

始「と言う事をやろうとしたが実際は気が気じゃなくて

とてもそんな冷静ではいらなかった・・・と言ったところか」

剣崎「ぐっ・・・確かにシャドウの解毒薬がなきゃホントにヤバかったな、

翔一さん達には謝つとかないと」

死神大使「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい・・・え、最初から期待してなかった？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1189n/>

仮面ライダーディケイド 世界の破壊者VS世界を救った男達

2011年11月16日14時25分発行